昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和五年四月一日發行（毎月一回一日發行）
「變態相」第五年第四十三號四月號

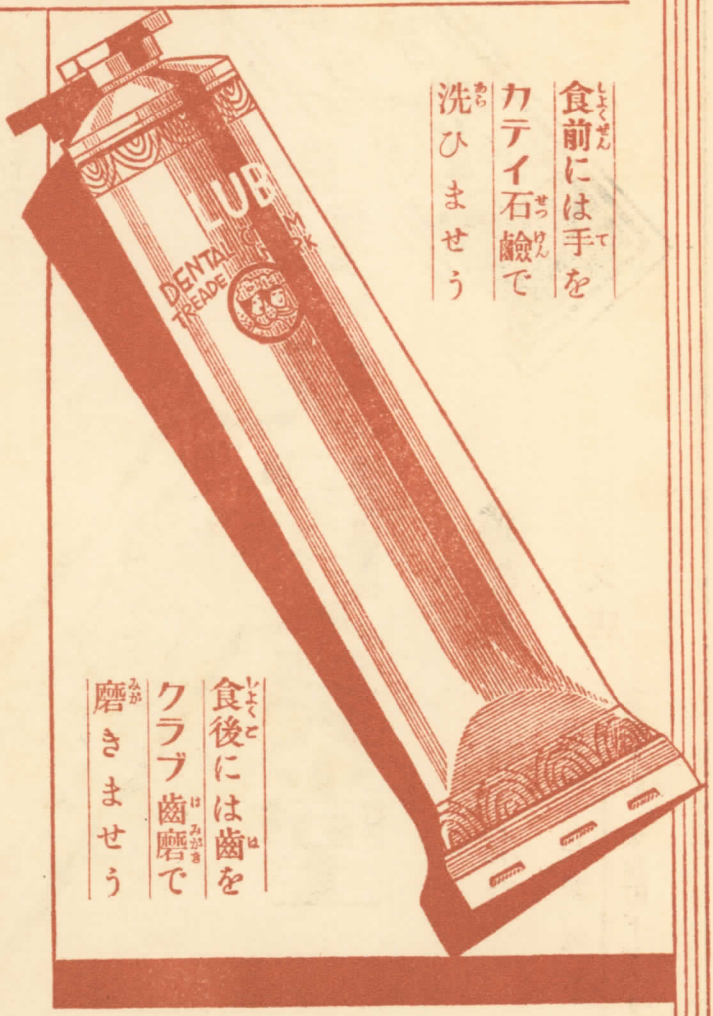
變態相

第五年四月号

健康第一の

クラブ煉歯磨

食前には手をカテイ石鹸で洗ひませう

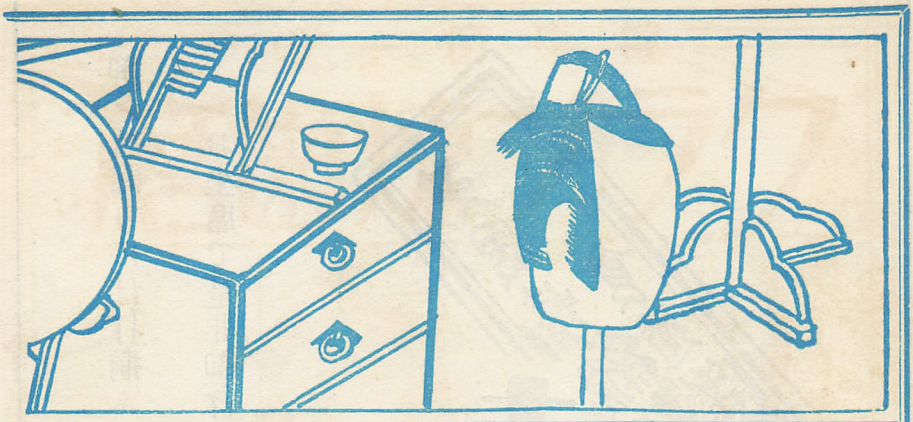


食後には歯をクラブ歯磨でみがきませう

皮膚の美と健康を増す

カテイ石鹸

御芝居歸りには打揃ふて
お坐席で是非御會食を



道頓堀

昭和五年四月號　第五年第四十三輯

◇表紙（文樂座上演「義經千本櫻」壽司屋の場に因みて）……

口繪

◆佛國政府より「社會教育功勞章」を贈られた白井松竹社長◆中座の曾我廼家五郎劇◇五郎の剛田良助◇「尺取蟲」の舞臺面、「初戀」五郎の老媼磯のお秋、蝶六のお春◇「春の宵」の舞臺面◇「かげぐち」の舞臺面、「黃金の雨」の舞臺面◆浪花座の第一劇場◇壽三郎の高倉長右衞門◇「淀君」高田の相川半三郎、藤村の木村常陸介、三好の淀君、石河の楓「色氣ばかりは別物だ」の舞臺面◇友田の田舍者、東山の客の夫人、汐見の主人、田村の女中、御橋の客◇「疵高倉」壽三郎の高倉長右衞門、山口の又八郎、石河のすが◆角座の新聲劇◇「安政怪盜傳」中田の龍五郎、辻野の雲助權次◇伊川の道中師、中田の龍五郎、芝田の雲助團六、和歌浦のお仙、富士野のお島、辻野の權次◆京南座の大新派劇◇「夕立」の舞臺面「結婚反對倶樂部」の舞臺面◇「首斬代千兩」井上の江藤新平、加藤の大久保、小堀の河野◇「吹雪の夜」の舞臺面、井上の男工、河村のミネ子、村田嘉の小間使、村田美の女工、東の女工◇井上の社長「天國地獄」の舞臺面◆四月の文樂座人形淨瑠璃「義經千本櫻」◆松竹座「春のおどり」の舞臺面

◇扉（「色氣ばかりは別物だ」のスケッチ）……田中滿彥畫

◇佛蘭西に寄する……白井松次郎（二）

◆帝劇女優の出演……宇野四郎（四八）

◆遲日斷片……高原慶三（四七）

◆舞臺で終始して貰ひたい……額田六福（五三）

◆井上正夫の輪廓……中井泰孝（五四）

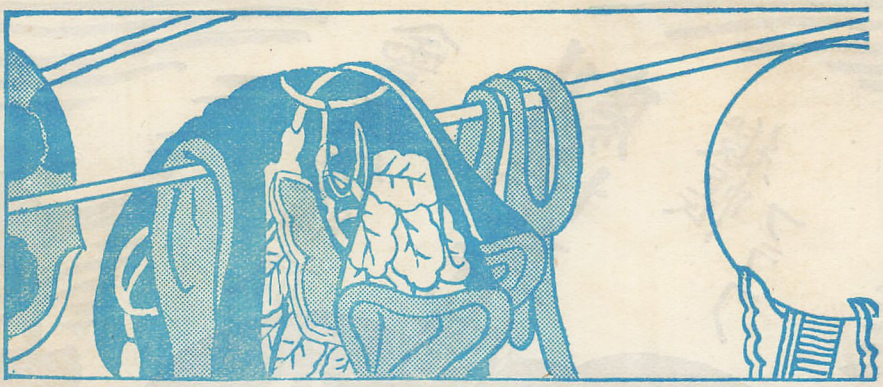
第一劇場

◇淀君◇……（五〇）

◇色氣ばかりは別物だ◇……（一〇）

◇疵高倉◇……（三四）

◇人氣投票◇……（一三）



◆「疵高倉」の話……長谷川伸（三六）

◆「太功記」の一考察……森ほのほ（二二）

◆文樂漫談……高谷伸（二四）

◆春の交響樂……山上貞一（四）

◇春宵綺語……曾我廼家五郎（一六）

◇首斬代千兩に就て……井上正夫（五〇）

◇善光寺行き……曾我廼家五郎丸（四二）

◆舞臺稽古……杵屋正一郎（四〇）

◆正しい批判へ……園池公功（三八）

◆城廓から街頭へ……櫻井悅三郎（三九）

◆麗人の春……倉田啓明（四四）

□小劇場から大劇場へ……築地連（一八）

□初の京都へ……帝劇連（三八）

▣文樂座の印象……（五八）

□プレイガイド……（二一）

□劇壇時事……（五六）

□劇壇往來……（六二）

△挿繪カット……田中滿彦

△編輯後記……松本泰三（六六）

和服
洋服
帽子
靴
鞄
雨具
傘
足袋
ワイシャツ
洋品
和服
帽子
靴
鞄
雨具
傘
足袋
ワイシャツ
洋品
柏原商店
神戸市
楠社西門
電話
元町一六一五番

お芝居の幕間と
お歸りにはお揃で
食慾をそゝる春のお献立が
お待ち申してゐます

梅園

お芝居でのお食堂にて……
お歸りには白鷹にて一寸一ぷく江戸すしを……

中座食堂

本店 太左衛門橋北一丁
電話南六二二七番

お芝居の
あいまには
高尚で趣味深い
寫眞のお道樂が
いッちよろしい！

寫眞機は

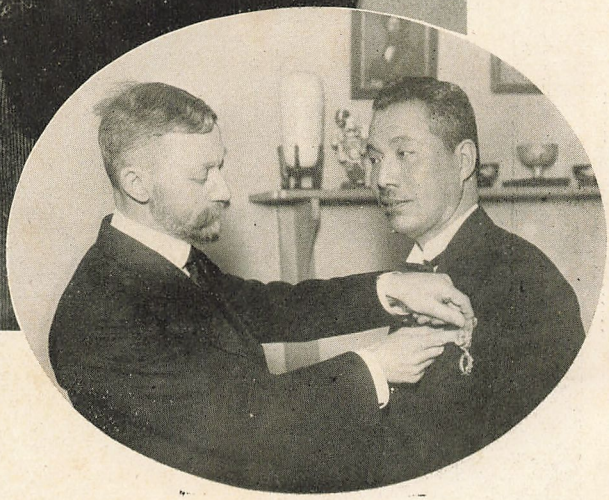
リリーカメラ
パールカメラ
アイデアカメラ
パーレットカメラ

（カタログ進呈）

大阪市南區長堀橋筋一丁目
小西六大阪支店
電話南（三二九二八九三二番）
本店　東京　本町二丁目

佛國政府より「社會教育功勞章」を贈られた

松竹社長　白井松次郎氏



寫眞は傳達式のあつた四月四日
フランス領事館にて寫す
（下）は功勞章を傳達するオー
シュルヌ領事と白井松竹社長

中座・四月興行・曾我廼家五郎劇

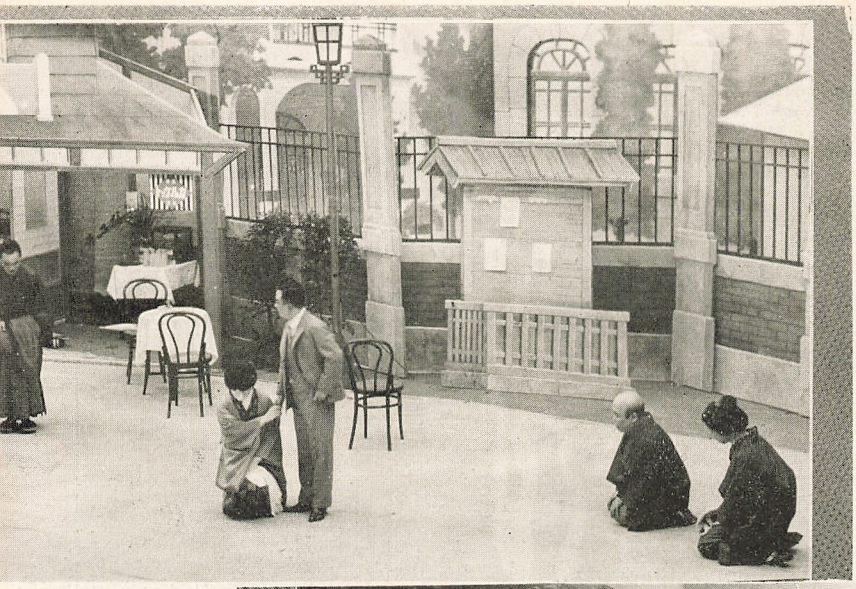
……黄金の雨……

坑夫頭　剛田良助……五郎

中座・四月興行・曾我廼家五郎劇

「春の宵」の舞臺から（圓山公園附近）

（郎五）久房女吉熊（蝶六）吉熊井酒工大（蝶勢）吉留者若井今



中座・四月興行

曾我廼家五郎劇

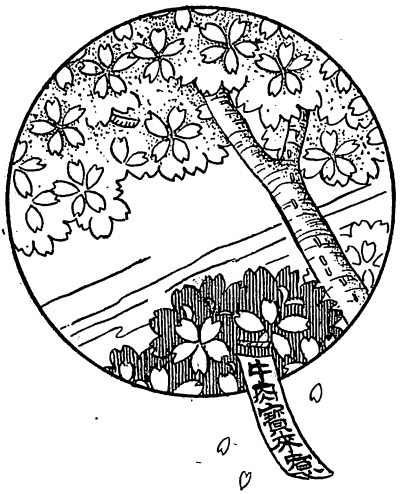
（上）「尺取虫」の舞臺面

浮世の風が南か時化かと別れる裁判所の前で三樣の結婚行進曲が奏でられる……

（下）「初　戀」の舞臺面

老媼磯のお秋……五　郎

お秋の娘お春……蝶　六



お、春は麗朗!!

行かずや行楽の世界

用意せずや

牛肉寶來煮

發賣元 株式會社 松下商店 大阪高麗橋

出張所 松下商店京都出張所 京都市醒ケ井五條上ル

好評 御化粧用 好評

たゝ出れ賣てっ立目

散歩にいやなあぶらぎ
お忘れあるな

スキナ
あぶら取紙

各地の化粧品店石鹸店に於て販賣いたして居ります。
尙道頓堀の各座の賣店にても常備いたして居ります。

お買求めの際はスキナと御指定を乞ふ。

大阪 スキナ屋 謹製

面臺舞の「ちぐげか」

（蝶林）子春妻　（郎次小）山豐田島家畫　（郎五）松楠藤須人友の縣　（六蝶）縣員師請正三

中座四月興行・曾我廼家五郎劇

「黄金の雨」

寶家亭主敗沼利助……蝶六
酌婦お澄……大磯郎
坑夫頭剛田良助……五樂
酌婦お米……秀蝶
お澄の父才藤田藏……五

浪花座四月興行●第一劇場「疵高倉」高倉長右衛門……東阪壽三郎

浪花座・四月興行

新興演劇の第一線に立つ

第一劇場の舞臺二景

（上）「淀君」

楓……石河薫

石田三成……阪東壽三郎

（下）「人氣投票」

館野倉吉……藤村秀夫

吉田喜作……小笠原茂夫

浪花座・四月興行
第一劇場の舞臺から

「淀君」相川半三郎……高田亘
楓……石河薫

「淀君」楓……石河薫
木村常陸介……藤村秀夫

「淀君」淀君……三好榮子

春の御宴會

御客樣へ特別奉仕

觀櫻御料理（御一人樣）金五圓也

御酒仲居祝儀付（三十人樣以上）

純和風造りの大廣間
舞臺付百疊敷宴會場
櫻花爛熳觀櫻氣分横溢

敷奇を凝らせる大庭園
落花流水鯉魚躍る溪流
優美風雅な大小の座敷

祇園の夜櫻を偲ぶ篝
火に映ゆる雪洞の風
致一入の眺めあり

電話戎
長
四一三七番
三三三三
五六七四
番番番番

主なる

四月の催し

繪更紗展覽會　九日より十三日迄（七階）

雜貨パラソル金物大會　九日より十三日迄（七階）

青旗社洋畫展　十六日より廿日迄（七階）

東西諸大家日本畫展　十六日より廿二日迄（七階）

乘物大會　十六日より廿日迄（七階）

ブラジル事情展　廿五日より卅日迄（七階）

呉服雜貨特賣會　廿五日より卅日迄（七階）

安く賣る店
買ひよき店

大阪堺筋

白木屋

行興月四・座花浪
連地築の場劇一第
面臺舞の「だ物別はりかば氣色」

浪花座の四月興行

(A) 田舎者……友田恭助
(B) 客の夫人……東山千榮子
主人……汐見洋

第一劇場の築地連

(C) 田舎女客……中田御橋
(D) 田舎者……中田秋子
友田恭助
村田秋公子

大阪市東區農人橋二丁目十二番地

合名會社

大阪橋本組

電話 東（特長一五八〇番 特長一一五八一番 二六五五番）

支店 東京市麹町區丸ノ内二丁目六番地
電話丸ノ内特長四七八〇・四七八一番

支店 小倉市大阪町十丁目（電話四三〇）

春の大和！

花はまねく!!

奈良公園
—大阪から急行卅五分—

郡山城址
—大阪から四十分—

あやめ池
—大阪から急行廿五分—

多武峯
—大阪から五十八分—

長谷寺
—大阪から一時間—

吉野山
—大阪から一時間半—

大阪上本町 ばりの

大軌電車

電話 南五五〇三番

「疵高倉」

高倉長右衞門……阪東壽三郎
東郷又八郎……山口俊雄

「疵高倉」

すが（後に又八郎妻）……石河薫
東郷又八郎……山口俊雄

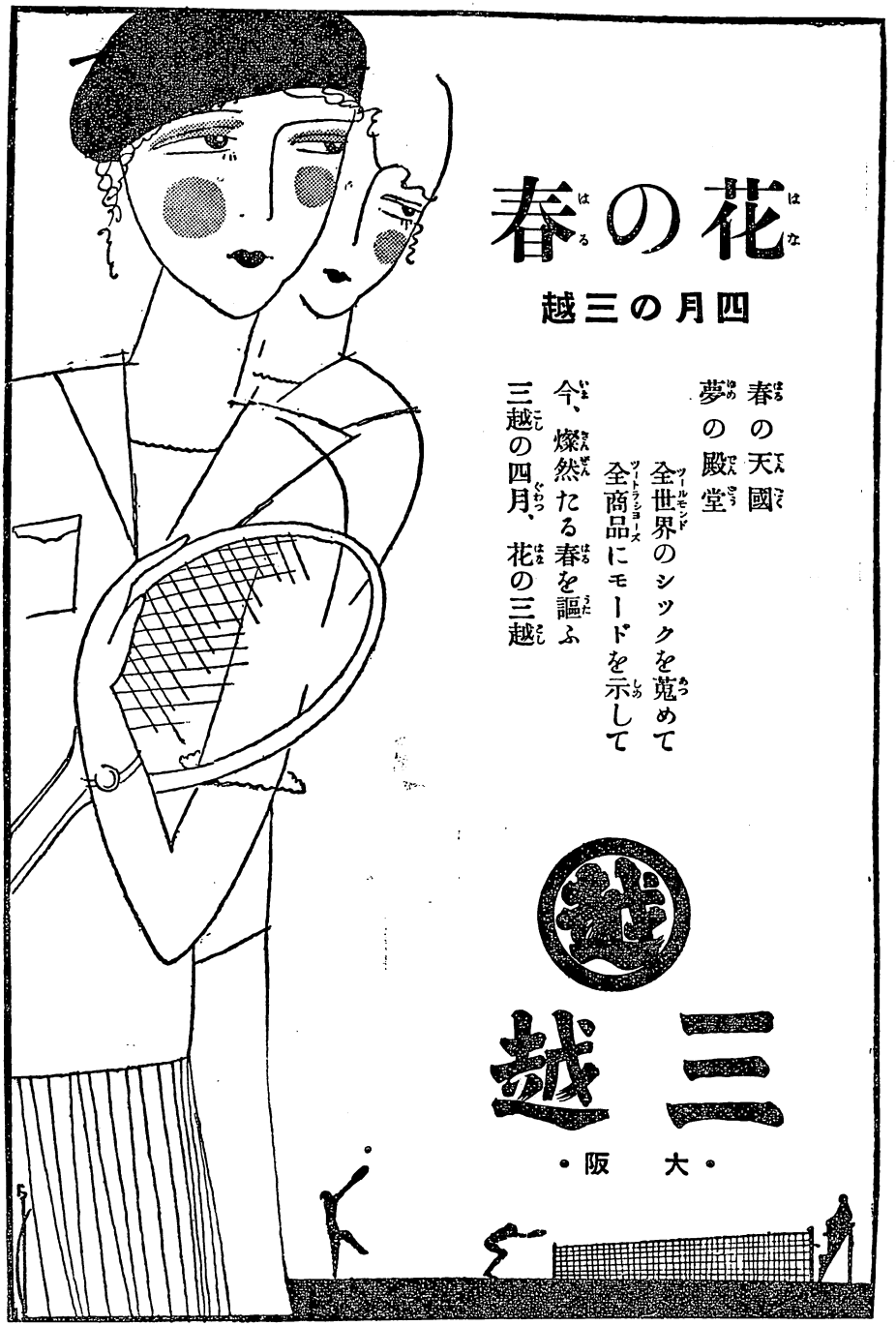
第一劇場舞臺情景

四月興行の浪花座

角座・四月興行・新聲劇一派

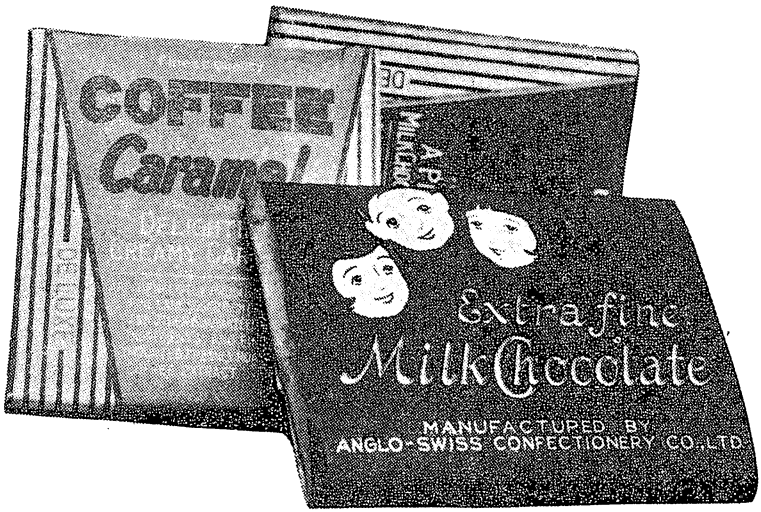
大門の龍五郎……中田正造
お島の子與吉……沼田義弘
雲助　權次……辻野良一

・安政怪盗傳・


春の花
四月の三越
春の天國
夢の殿堂
全世界のシックを蒐めて
全商品にモードを示して
今、燦然たる春を謳ふ
三越の四月、花の三越
三越
大阪

アングロス井ス
ミルクチョコレート
コーヒキャラメル
チョコレート キャラメル

大阪市東區豐後町三番地
發賣元 株式會社 横山商店
電話東(94)一六六一二〇一三番



道中師桑田屋新兵衛……伊川八郎
駕舁龍藏（實は大盜大門の龍五郎）……中田正造
雲助團六……芝田新
女賊お仙……和歌浦糸子

お島……富士野蔦枝
權次……辻野良一

角座・四月興行
新聲劇の舞臺相
・安政怪盜傳・

「吹雪の夜」

王良（探偵）井上正夫　劉高手（醫師）梅田重朝
李七一伊志井寛　碧蓮（妻）初瀬浪子　雪娥（娘）齊田照子

「天國地獄」

令嬢ミネ子……河村菊江

「天國地獄」

男工……井上正夫

京・四條南座の東京新派界の巨頭に女優軍の大共演

子瓣美田村……キト工女
子出目　東……代千工女
「獄地國天」

•子久嘉田村……ツセ使間小「獄地國天」

天國地獄中の舞臺の一齣より

「夕　立」

父親　伊八……小堀誠
姉　娘おせい……初瀬浪子
弟　恒次……清水一郎

「夕　立」　千代香……村田嘉久子

「結婚反對倶樂部」

女優軍總出動

京・四條南座

新劇新派の精鋭に女優軍の共演

櫻は京都

祇園、清水、嵯峨
醍醐の花見　おむろ

●四月六日より十六日迄
醍醐天皇一千年御遠忌大法要奉脩
醍醐寺三寶院

平安神宮、岡崎動物園
宇治、香里
大津三井寺、坂本

りぐめ島生竹湖わび

丸りどみ・丸阪京

航就丸鳥白裝新

發津大濱分十三時十・時十前午日毎

船車往復
大阪天満橋 圓3 京都三條 圓2
（賃子額半）

京阪電車

ばりの
大阪天満橋

ばりの
京都三條・四條
五條・七條

うごそもでんなはのもの供子

うろそもでんなはのもの供子

大阪心斎橋

十合呉服店

京都・四條南座
東京大新派劇

「首斬代千兩」

江藤新平……井上正夫

「首斬代千兩」

大久保利通……加藤精一
河野敏鎌……小堀誠

京の春を賑はす
四條南座の四月興行

「天國地獄」の社長……井上正夫

面臺舞の「天國地獄」

(子房間藤)人夫 長社(誠 堀小)永富長場工
(子竹田村)子リュ人友(江菊村河)子ネミ嬢令

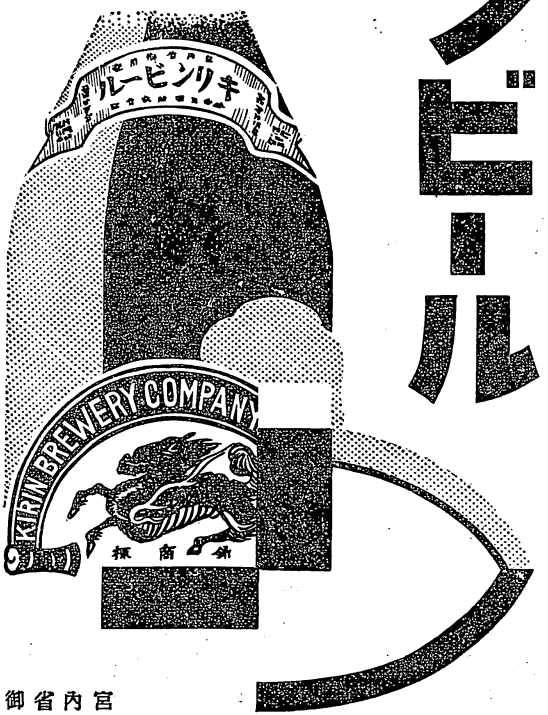
キリンビール

最古の歴史
最新の設備
最上の品質

清涼飲料

キリンレモン

絶對着色なし



宮内省御用達
麒麟麥酒株式會社

K3

絢華たる春！　卯月映畫界に花を
欺くばかりなる我等が名畫陣!!!

封切迫る二大名畫

京都撮影所特作　井上金太郎監督

直侍

林長二郎主演　月形龍之助　特別助演
若水絹子　助演

蒲田撮影所特作
大每東日連載　栗島すみ子主演

麗人

岩田祐吉・新井淳　競演　島津保次郎監督
藤野秀夫・八雲惠美子

目下撮影中の名篇

栗島すみ子主演
女は何處へ行く
池田義信監督

阪東壽之助主演
鹽原多助
古野英治監督

田中絹代・渡邊篤主演
微笑む人生
五所平之助監督

市川右太衛門主演
原田甲斐
白井戰太郎監督

藤野秀夫・山内光　共演
結城一郎・及川道子
眞實の愛
清水宏監督

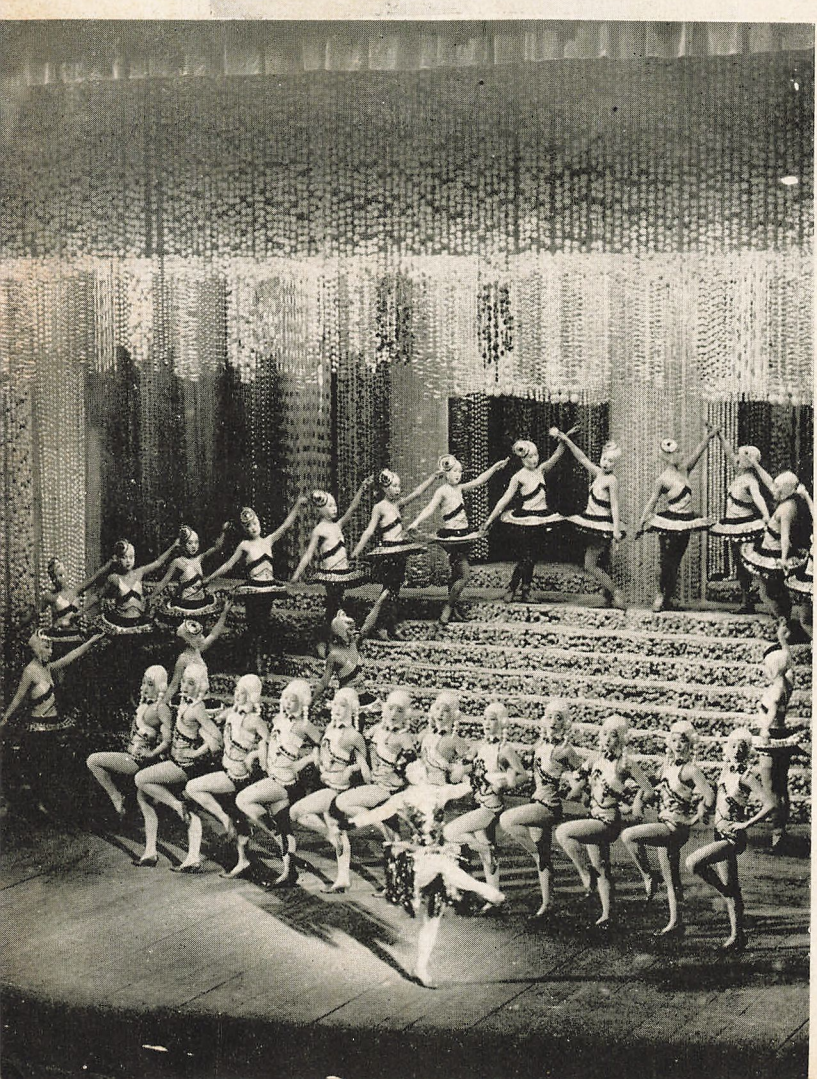
阪東妻三郎主演
からす組
犬塚稔監督

川田芳子主演
續篇母
野村芳亭監督

月形龍之助主演
荒木又右衛門
惡麗之助監督

松竹キネマ株式會社

古典の薫り馥よかな
文樂座人形淨瑠璃
四月興行
「義經千本櫻」の道行
靜……文五郎
忠信……榮三

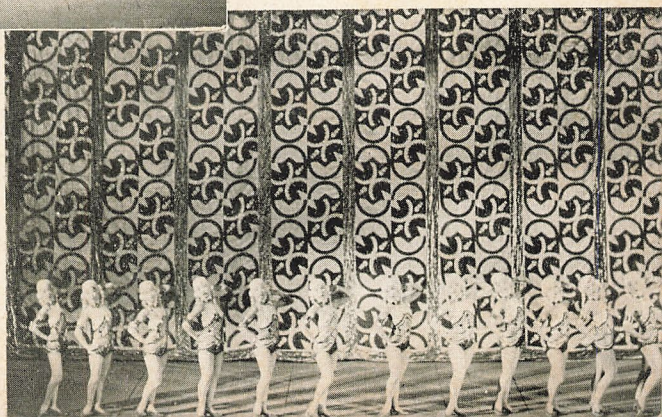


松竹座の「春のおどり」……さくら……

「繪馬」

「朱の柱」

「かぐり」



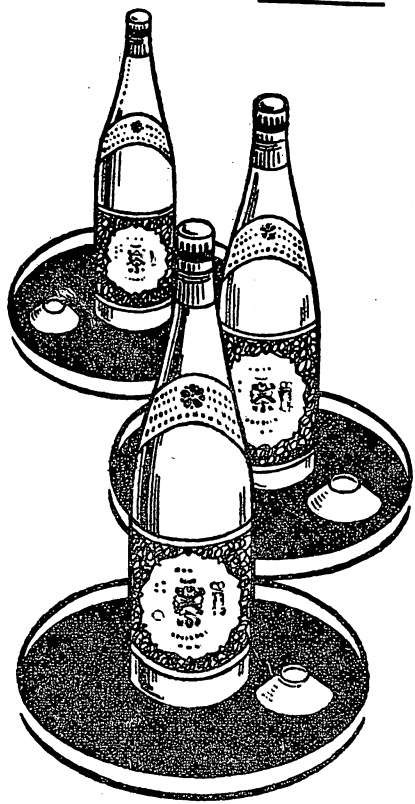
「銀のとばり」

春の踊を代表する
松竹座の
「春のおどり」

櫻正宗

瓶詰
樽詰

純良清酒の代表



晩酌と共に
樂しく今日は暮れた
明日も樂しく勇ましく

宮内御會用達
山邑酒造株式會社

讀め・新人巨歩のあと

新興演劇

四月一日發行・第三號內容

—戲曲—

死船（二場）……鳥江銕也
義勇兵の影（二幕）……ションオケシイ作 野淵昶譯
遺された畫像（二幕）……豐岡佐一郎
愛欲觀世音（三幕）……田中總一郎

—小論文・隨筆—

第一劇場三人評……（山上・森田・豐岡）
プロ演劇のマンネリズム否定……（鳥江）
大阪は文藝に無關心か……（山上）
編輯後記……（同人）
表紙繪・カット……森亶次郎

菊版壹百餘頁・定價金參拾五錢

發行所 大阪市東區船越町二丁目 新興演劇社 電話東一二二三四四番 振替大阪一八二四番

小道具・小裂

貸衣裳

素人演藝會
宴會の催物
春秋溫習會
婚禮の衣裳

（其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます）

松竹衣裳部

本店　大阪市南區久左衞門町八
長電話　南四七一一番
一一八八番

東京支店　東京市淺草區並木町十五
長電話　淺草五五九九番

新興帝キネ長瀬超特作

市川百々之助主演
明石緑郎、歌川八重子特別出演

鞍馬天狗

原作　大佛次郎氏
脚色　多聞總太郎

森本登良男監督
厨小與三撮影

明石緑郎
草間實　共演

危驛者の夢

渡邊新太郎監督作品
キヤメラ　高橋武則

原作　今東光氏――脚色　堀川波吉

週間朝日特別號所載

月刊・演劇研究・雑誌

演藝畫報

第五年

四月號

第四十三輯

佛蘭西に寄する

（オフィシエ・ド・ランストリユクション・ピユブリツクに就て）

白井松次郎

春です、春四月です、日本の國にはいま、櫻の花が誇らかなその姿を天地に見せて、都大路の大氣も何となくもの柔かく感じられる時候が參りました。

この時、數ならぬ私に、世界のパラダイス、花の巴里から、輝かしい贈り物を受くるの榮譽をもたらされたのであります、即ち四月四日、神戸佛蘭西領事館に於てオーシユコルヌ領事から、佛國勲章オフイシエ・ド・ランストリユクション・ピユブリツクとその勲記を傳達されました。

餘りの突然に、實は最初佛國政府からの勲功授與に就て、一時私の耳を疑つた程でした。だが、それは事實として、しかも彼國の社會教育功勞章といふ破天荒なものであると知つて、たゞ〳〵私

一個の榮譽欣幸ばかりでなく劇界・映畫界に於ける最大の欣快事としてこれを受諾することになりました。

大正十一年二月十五日、佛國答禮使として來朝されたジョッフル元帥とその御一行が大阪來訪の際、我國の古典藝術として二百年來の傳統を保持した文樂座人形淨瑠璃を中央公會堂に於て御紹介しました。その後、當時駐日のクローデル詩人大使、領事オーシュコルヌ氏等は大の文樂愛好者となられ、これが本國への御紹介をもして頂いた程で、私はそれ等の方々に只管感謝してゐる次第であります。

今や文樂が鄉土藝術として、世界的視聽をあつめつゝあるのは、實に佛蘭西の方々が、國境を越えて、藝術を愛されるたまものであると信じて居ります。

これを機會に、私は及ばずながら、佛蘭西の劇映畫を我國へ紹介し、又、我が國の藝術をも理解して頂くべく努力する覺悟で居ります。

こうした藝術を通じて、僅かでも日佛親善の一助ともなり得ば、私の喜び之に過ぎたるものはありません。

（傳達式を終へて）

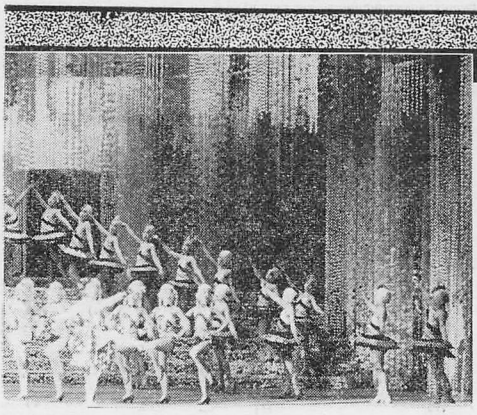
松竹座第五回

春のおどり

山上貞一

紅提灯

光る都は若き都　われらの空に育つ甍
もゆる陽炎いき〳〵と　春を語る春を語る
唄ふ都は若き都　生命の酒の盡きぬ器
映ゆるともしびさんらんと　春を語る春を語る



なつかしいシャギリの音、あの太鼓のばちさばきの魅惑は、定式幕の前のみに相應しいのでなく、このおもい重厚な緞帳の前でも、そしてあの薄暗い下座からでなく、洋式な舞臺ばなのボックスの裡から鳴り出しても、聞く耳には變りがない。

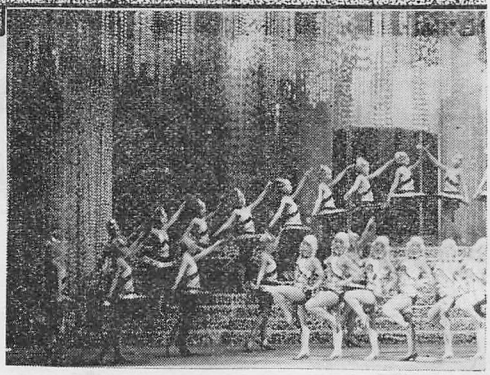
パリのレヴューとニユヨークのジャズを聞いて來た大森正男君ですら、日本のレヴユー、日本の姿、それでいゝのだといふ。もとよりそれに育まれるてゐる我等觀客はそれでいゝのだ。たゞいゝものであればそれでいゝのだ。

シャギリ、太鼓の音、拍子木、一文字から左右へ、大小提燈のカアテン。

——光る都は若き都、われらの空に育つ甍、もゆる陽炎いき〳〵と、春を語る、春を語る。——まこと春を語るに相應しい少女の聲、混聲大合唱とはこの事か。緞帳がする〳〵とあがると、舞臺一面の提燈の幔幕赤いつらゝの提燈でまづ、眼がちか〳〵する眩いのでなくて痛いのだ。

かがり

〈二上り　夜のとばりに照りそふさくら、月にうつらふ朧のさくら、合籬うつくし舞ふさくら、合ゆきかふ人に媚び匂ひ、合ふりしきるさくら花、人か花か、花か人かのさくら花



いつか混聲合唱は非常なスピードで終つてゐる。

大太鼓の音、アーオー、三味の音、いゝ音じめだ。

おゝ日本の姿、日本のレヴュー、

かゞり火は京の圓山、枝垂れ櫻、よしそれでなくても、あの黄色い目を見て、あの單調な黒と黄色とで點綴した元祿風の踊子の姿を見て、そう想像することがよくないだらうか。

もゆるかゞり火、紅ざくら。

師重の若衆、懐月堂の女、清信の女、それは世界にかゞやく日本藝術の永遠の偶像だ。見てあかないあの髷、あの袖、あの羽織姿、人か花か、花か人かのさくら花、南北老人も一九三〇年には惜しい詩人だ。

コン〳〵チキチン、鐘の音につれて男女の亂舞は花の下でつゞく。全く羨ましい太平の姿だ。かゞり火のみは赤く燃える。月は黄色で大きい。

春の夜の櫻を象徴化した花のアーチから、花びらの一つ、二つ、五つ、六つが舶來の姿でダンスを踊る。どこまでが肉體でどこまでが衣裳か、たゞすこやかな四肢の活動に、我が勇躍の天地を知る。

花ばしごから、花びらがおりる。コロ〳〵〳〵とピアノが鳴る。コロ〳〵〳〵、ピアノのうちで一番嬉しいひゞきだ。花びらは全く風のまに〳〵飛ぶ、散る、はねる。そのまゝに手を振る、足をのばす、ちゞめる、舞ふとか踊るとかいふ文字の外に新しい表現字を考えずばなるまい。

集合離散、とびぬく、そしていつもの輕快な足どり、そのくびすの調子よい音がありがたい。ト、ララララ〳〵、薄衣の銀玉が紫色に光る。

——春の夜はいつしか更けて靜寂に返つた。天地はたゞ花のみの世界、花一ひら二ひら三ひら、はらはらと夜風に散つて地上に舞ふ、あはれさよ——。

なんといふうまい説明だらうと、プロを見て少しセンチになる。

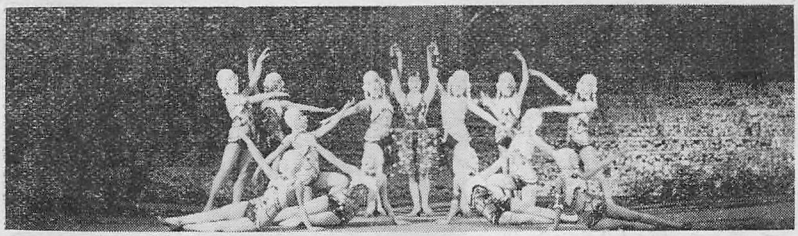
朱の柱

〳〵本調子朝ざくら、合そもなやましの花のかげ、そもうつゝなの櫻花、合誰がかんぼせに醉ひしれし、合うつゝなの我思ひ、合繼せじないくよまで、なやましの春、なやましの人、合追ひつ追はれつ、追はれつ追ひつ、人の世のかげさまざまや

〳〵朝ざくら、そもなやましの花のかげ……

卽ちNAGAUTAだ。

ばら〳〵と胡蝶が現はれる。ひばりの聲がする。花のアーチがつぶれ



て、朱の柱がによき〳〵と立つ。奈良の都とでもいひたい。大極殿の御庭に八重櫻がらんまんと咲いてゐるといへば、この背景は日本人ほどの人の眼底にすぐ浮ぶ春らしい繪だ。

朝臣俊幸卿が狂亂だ。

恩地かつ子——聞かない名だが、踊りは相當に見られる。

「大和屋梅吾の後身だよ」

「なんだ。そんなことはどうでもいゝ」

「そうだともあしべ踊りぢやあるまいし」

とさ。

藤代君江の雌蝶ともつれて

……うつゝなの我が思ひ、戀せじないくよまで、なやましの春……と舞ふ。

追はれつ追ひつ、扇をひらめかして狂亂の君が去りませば、これは驚いた。正しく尖端だ。

胡蝶が衣を脱ぐと金びかの腰かざりをつけた裸女となる。

蟬脱でなく、蝶脱だ。調達だの洒落だとはいくら食滿老もいふまい

ぷか〳〵〳〵と西洋音樂の妙、全くコントラストとはかゝる時に使ふエイゴだ。クラシックからモダーンへ、よろしい。

五色の色リボンのカアテンがおりて、明るいテンポのダンスがつゞく。こゝの少女達は肉體美を發揮する場合にのみ氣樂そうだ。裾までの衣裳を着てちよこ〳〵走りをしてゐるのに、似合はないほ

ど、現代のリズムがこゝの少女達の身も心もそして藝術にまで侵入してゐやうとは、これが時代だ。

銀のとばりがおりて、西洋舞踊がつゞく。

――最近歐米歸朝者はこれを指して、新しい日本の若い女性の健康で、美しくて、愉快そうな新しい生活の姿を見てよろこぶものです――といふ。

黄のバックに繪馬堂のひさしがかぶさつて繪が生れる。

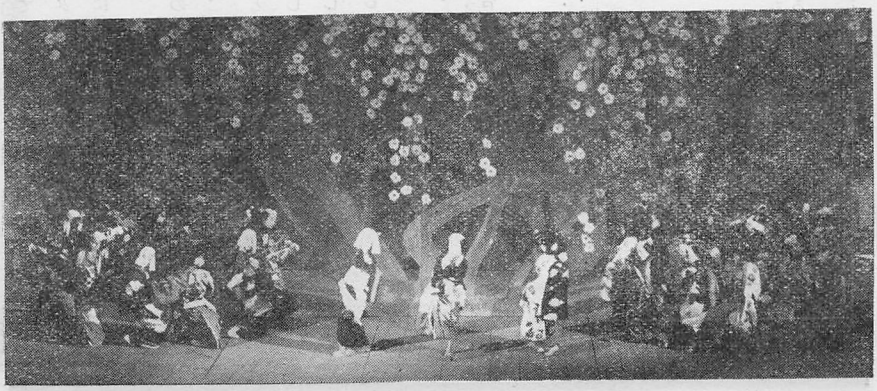
半面をつけた三人の女はそれ〳〵醉つてゐる。醉つたことのなさそうな彼女達の醉態。住吉踊の笹、ひさ

繪馬

〳〵三下りサツサ浮かれた、合醉た〳〵さゝに、僅か五勺か六尺袖にたんだふれふれ花の雨、〳〵降るは春雨乙女のなみだ、合泣くな泣きやるなその泣き顔を、合見るは目の毒お氣の毒、怒りやさんすな怒るは野暮よ、合きゆんなほして一ト浮かれ

〳〵花のさかりに御攝嫌上戸、合浮かれ〳〵てつい花の山、オツトおひないヤレソレ花がちる

〳〵吹けよ春風、一重か八重か、合さんさん櫻につひ目の先に、ちらりちらりとヤレソレ酒のゑい



ど、櫻の枝三味の囃子につれて、それが踊る足どりもかるい、身もかるい。醉つたものとは、あゝしたものだと誰がきめた。こゝでも元祿風俗の讃美だ。

あの髷の優美さ、袂のまろさ、裾さばきの前掛、そして櫻、繪馬堂、そこへぼーうんと鐘の音、情景まさにフルマークだ。

〳〵花のさかりに御機嫌
上戸、浮かれ〳〵て
つひ花の山……

理窟は言はぬが勝だ。たゞ見ていて、うつとりとなればそれでいゝ。

金銀のとばりがひかれて、タップダンスの靴の音。

飛鳥明子はいよ〳〵肉體的にほうまんだ。それにきんにくの整つた隆起よ。

花が散る。赤、青、黄、白の花吹雪だ。

櫻色の色電氣のかいだんを、一人、二人、三、四、十、二十、五十、百、百幾十人の踊子がをどる。

紫光線に映ゆる金、銀、そして彼女の白粉の肌、

ケン〳〵、くる〳〵、とそしてザラ〳〵とでよく揃つた足、手、女王明子の笑顔の頰に花が散る。

畫面と群舞、花の上の天地、ラストシーンの美しさ。

日本レヴューはこれでいゝ。

もし望めたら、太三味線の合奏だ。

あつ、忘れる處だ。

——櫻さく國、櫻さくら……の春の歌は岸本水府君の作だつた。

さくら

櫻　咲く　國
花は西から　東から
こゝも散りしく　アスファルト
櫻　吹　雪　の　狂ふ足どり
櫻　咲　く　國　櫻　さ　く　ら
春がこぼれて　君　想　ふ
夢にほころぶ　シャンデリア
櫻　吹　雪　に　晴のまひぎぬ

【配　役】

紅提灯—（百五十人の混聲合唱）

かがり—師重の若衆（御室郷子、天野歌子、二見政枝、關一惠、川路關子、天草美登里、浪速榮子、碧川京子、伊勢萬里子、小波光子）懷月堂の女（河原涼子、東條薫、美川千枝子、泉照子、西野鈴子、雲井八重子、三好衣江、渚三保子、花菱愛子、澤田加代子）清信の女（瀧澄子、若山千代、住江節子、中島薫、室町麗子、花園青子、立花喜代子、小柴秋子、淺香登喜子、池澤笑子）

花びら—（飛鳥明子、衣笠桃代、千原久枝、河邊月子、伊達良子、池邊市子、柏晴江、森郁代、中村秀子）

朱の柱—朝臣俊幸（恩地かつ子）、蝶蝶（藤代君江）胡蝶（淺路澄子、三浦八重子、三笠靜子、小町糸子、月丘松子、末廣千恵子）

銀のとばり—師子の一（衣笠桃代、千原久枝）師子の二（河邊月子、淺路澄子、三浦八重子、三笠靜子、小町糸子、月丘松子、柏晴江、末廣千恵子）師子の三（天野歌子、池邊市子、關一惠、泉照子、天草美登里、花菱愛子

繪馬—半面の女（恩地かつ子）同（藤代君江）同（瀧澄子）女（御室郷子、河原涼子、若山千代、東條薫伊達良子、住江節子）

さくら—ソロ（飛鳥明子、他大ぜい）

THE FIRST THEATRE・NANIWAZA・APRIL

出演作彬山青・補譯授教男存口關・作原ーシツビラ

氣色ばりかは別も だの

女中のいとも素晴らしき雄辯によれば、主人のシフォンネは獨身者で、變り者で、嘘が嫌ひで、お世辭を言はれると腹がたつて——要するに社會がよくわからない男である。

彼は、不正な動物に愛想がつき今晩はその厭世觀、厭人觀を披歷し、彼等に絶交せんと考へてゐる。

その爲に彼の忠實なる下女は、風船玉入のカツレツ、衛生展模型の料理、番茶のビールを調へて居るのだつた。

其處へ訪れて來たのは、今夜招待される筈のコクナール。

『お招きにあづかりまして……、私の妻も……』

『あなたの妻君は美人ですね』

『へ？』

『それで何か御用ですか』

『實はお願ひがありまして……』

コクナールは競馬狂である。素敵な馬を見つけたので、二三日間三百圓の借用を歎願する。

『では、一時間ばかりしてお出でなさい』

『それはどうも……』

コクナールが歸つて行くと、彼は下女を捉へて、

『今出て行つた男が一時間程して來たら、支那漫遊旅行に出かけたと言ふんだぜ』

『その通り、正直に申しあげます』

次に彼の前に現はれたのは——水汲人夫マシアワヴオアヌ。

『旦那、お前樣何か失くしたものはありませんかね』

水汲人夫の言ふ通り、事實、彼は鞄へ入れた三百圓を落したのだ。そうして、その三百圓が、再び自分の懷に歸るならば、好きな煙草を止てもいゝと、呟いてゐたのである。

『年甲斐もなくこんなものを落すんぢやねえ』

水汲人夫は彼に三百圓を渡すのだ。いよいよ彼は煙草を止めねばならぬ運命になつて來た。

『すると、君にお禮を二割あげよう、いゝかね』

『馬鹿野郎』

『二割では不承知か——ぢや、三割——』

『何だと——』

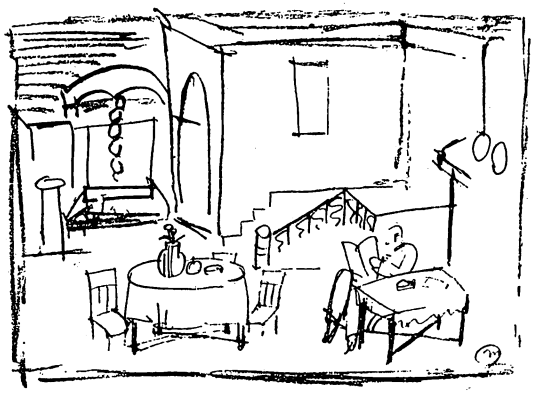
『では、四割！五割！六割！』

『やい、凸凹野郎、正直者のマシヤワヴオアヌを知らないのか！』

勿論この正直のシンボルの如き、水汲人夫を打算的な彼は日給三圓によつて雇ふのであつた。

丁度、其處へ女中が月末仕拂のお金を貰ひに來る。

『總計、百二十五圓七十三錢です』
『そんなにあつたかな、まあいゝや』
と、彼が其儘、仕拂はうとすると、マシアワヴオアヌ
『一應店屋の付を見せねえ』
と、女中に命じる。女中はどぎまぎしてしまふ
『お前の知つたことぢやないよ』
『處が俺は、不正なことを發見するために雇はれた人間なんだ』
結局女中の惡事露見——この、虚儀の典型と、正直のシンボルとの對立を見て、主人たる彼は、新しい召使ひの技倆を認め、心から滿足する。
再び、其處へ扉を排して、入り來たつたのは、コクナールのマダムである。
『突然伺ひまして……』
『その用事なら判つてゐますよ』



『どうか、主人にはお金を借して下さらないように』
『へ——え』
事の以外に彼は驚く。だが一安心と言ふものである。『では、これでお暇します。それでないとあなたに夫は決鬪を申し込むかも知れません——それは甚いやきもちやきで、離縁沙汰になるかも知れません。』
『離縁——そうなつたら私の所へいらつしやい、豫約しておきませんか』
『あら、冗談を……』
瞬間的に女中が飛びこんで來て、問題のコクナールの訪れたことを告げる。
『さあ、大變だ——留守だと言へ、支那旅行に出かけたと言へ——』
この言葉を聞いて憤然と怒つたのは、正直者の召使ひです。
『こんな時にわざ〳〵雇はれてゐるんだ——主人は在宅です、どうぞこちらへ——』
と玄關口へ怒鳴りたてるのだつた。
マダムは、色を失ひ、狼狽する——が心利いた女中は次室へ案内し去る。
『お約束の三百圓を借りに參りました。』
『相憎手許に……』
傍に居た、田舍者は、主人をぐつと睨みながら。先刻渡した、手提鞄を取りに行く。
『ほーら、あるでせう。心配なんてせず持つてお歸りなさい。』
『どうも、有りがとう。』
禮を述べて、歸らうとしだコクナールは、女の忘れた洋傘に眼を止める。——何故なればそれは妻のもので見覺えがあつたからだ。
『この傘は——』
『どこかの美しい奥さまのですよ——』
『奥さま？』
たまらなくなつたシフオンネは狂的に叫ぶ
『馬鹿！お前の出る幕ぢやない！』
その言葉に關はらず、コクナールは居間を隈なく探し初める。そうして、一方のドアーの影に人聲のするのを知つて駈けよる。
刹那——
機智に富んだ女中が姿を見せる。そうして

馴れ〳〵しく主人に近付き。
『伯父さん、さよなら。』
『う……う……さよなら。』
『これは、妾の傘よ……』
この女中の態度に、コクナールと、正直者は呆然となる。
『どうも、今のは替玉らしいよ。』
『さうだらう――では、今夜の招待會に、今日來た婦人を教へてくれ。』
『よし』
『俺はそれによつて決闘するのだ。』
物凄い捨臺詞を殘して、コクナールは歸る
それに隨つて、正直者も去つて行く。
『一難去つて、又一難か。』
不安になつた彼は腕ぐみして、溜息を吐いてゐる時、忠實なる、下女が特意氣に戻つて來る。
『三萬圓やるから、あの田舎者を誘惑しないか――そうして彼奴に嘘を吐かして呉れ――おや、あの馬鹿が來たやうだ。しつかり賴むぜ』
主人の爲めに、金のために、下女は誘惑を計るのだつた。

『あなたは好いた方ねえ。』
『お前美人だなあ――俺と結婚してくれないか。』
『妾のお願ひ――今夜の接待會で嘘を言つてくれゝば結婚してもいゝね――でないと、妾今夜にも、隣のコックと結婚してよ。』
『嘘――首が飛んでも、嘘は吐かねえ。安心しろ――』
難攻不落――如何とも術の施しようもない。
やがて接待會の時刻になつた。意氣込んだコクナールは、早速田舎者に訊ねる。
『今日來た夫人は、この人ぢやなかつたか』
と自分の妻を指す。夫人の顏を一眼見て、田舎者はしばし躊躇。
皇國の興廢この一擧にあり、女中は、縣命だ。

◇

は』
無意識に夫人を指しつゝ、田舎者は、
『この人……この人……』
『速く……速く……』
女中は必死である。
『よろしいか……隣のコックと……』
『うん、――この人……どう、こうなりあ仕方がない。此の人ぢやねえ』
遂に女中が勝つたのだ！。嬉し氣に側へよつた彼女は、正直者、マシアワヴォアヌの肩を抱き、
『あなた、いゝ方ね、三萬圓あげてよ』
『金なんか――いらねえ その代りもう嘘を吐くのは澤山だ。』
――と涙聲で呟く。

◇

◇

NANIWAZA THE FIRST・THEATRE

青江舜二郎作

人氣投票

◇第一景　看板屋倉吉方住居◇

『そんなにがみ〳〵云はなくても、今出かけるよ。』

『出かける〳〵つてもう三十分も經つてしまつたよ、隣の親方が見えると、此の上長くなつちまふぢやアないの、今日は何時もの日とは違ふんですよ、おつねにとつても、また私達夫婦にも大切な日ぢやアないか、どうか早く出かけておくれなね。』

『あゝ、解つたよ。』と選擧中毒にかゝつてゐる倉吉とその妻とが、お塞所と茶の間との押問答、だが倉吉はまだ新聞から眼を放さず夢中で讀んでゐる。戸外は冬には珍らしい好天氣、長屋の共同栓は女將さんたちの會議に占領されてゐて賑々しいこと。

おつねは此の時二階で琵琶の復習に餘念がなかつた。所へ妻の想像通り隣の床屋の親方が相變らずの暢氣な狀でやつて來た。倉吉と親方とは直ぐ新聞を前に政治問題の噂だ。既成政黨彈壓、無產黨進出を盛んに論じ續ける、妻は二人ののんきさに舌打をして、倉吉にそれとなく外出を促す、そこで隣の親方

『倉さん、何かあるのかね、急ぎの用でも控へてゐるのかね……』と尋ねる、妻は此の機逸せずと乘出して、

『えゝ、實は今夜阪下クラブでおつねがお稽古に行つてゐる琵琶のお浚ひがあるんですよ。そして來たお客に人氣投票をして貰つて、一等から五等までの者には賞品が出るのです。おつねもあゝやつて一生懸命稽古をしてるんですから賞品圈内には這入らなくてもせめて十票十五票でも人氣の投票を欲しいのが親心、それにおつねが十票でも十五票でも人氣投票をして貰へばあの子が明日にも藝人として寄席に出られると云ふんです。それだもんですから先刻からお町内の方々に投票をお願ひに上らうと云ふ事になつてゐるんだが、此の通りの長尻で』と生活難から娘を藝人にする志を訴へる、床屋の親方は會の催しの内容を聞く、妻は此の町内からはおつねと家主の嬢樣とが出演すると云ふ。親方は

『藝事は家主も店子もねえ、俺が一肌脫いでやるから心配するな』とおつねの投票に關して勇氣を付ける、そこへおつねが二階から降りて來る、親方はおつねや家主の娘の出し物など聞いて

『屹度俺がお前に勝たしてやるからしつかりお前もやれ』と更に云ふ、親子の者は喜ぶ、然し倉吉は折柄家賃値下問題で家主に交渉中だから娘と嬢さんとの張り合ひから、その交渉が決裂を見やアしないかと心配する。床屋の親方は

『そんなことはない、若しあつたとしたら店子揃つて引越しするまでだ』と多寡を括つて倉吉を引立てる。倉吉も遂にその氣持になつて投票用紙付きの前賣の切符を持つて町内を戶別に訪問すべく出かける。親方は一人はしやいで表へ出る、丁度そこへ來合せたのが、群集に呼かけてゐるちんどん屋である。床屋

の親方はこれを見ると機轉を利かし、群集を押分けちんどん屋の前に來る

『扨て皆さん、今夜阪下クラブで此處にゐるおつね坊の琵琶のおさらひがございます、その時人氣投票が行はれますから、是非共〳〵御觀覽の上おつね坊に人氣投票を下さいますやう……』

ちんどん屋は自分の仕事を妨害されるから澁面で立去らうとする。親方はそれでは群衆が散亂する怖れありとて

『おいちんどん屋さん、行つちやアいけねえもうちよつとだ、長屋の一大事出來なんだ、待つてゝくれ……』と怒鳴られて、ちんどん屋は

『うへつ？』首をちゞめて——　暗轉。

◇第二景　家主加川豐藏宅の茶の間◇

豐藏と妻りつとが今夜の酒肴物や何かゞ雜然としてある中にニコ〳〵して

『ねえあなた投票は七十枚もあれば一等になれるでせうね。』

『うむ、若し足りないやうだつたら後で買へばいゝさ、金はいくら掛つたつて仕方がない』

『あなた今晩、お留守居をして頂戴な。』

『止むを得ん』と話してゐる所へ女中が町會の者の來訪を知らせる、豐藏直に澁面。

『また値下問題で來たな、下てなんかやるもんか、それで氣に入らねば店子全部追ッ拂ふまでだ……』と吐き出すやうに云つて出て行く、入れ代つて豐藏の娘春子に、琵琶の師匠がやつて來る、りつは禮金と切符代とを紙に包んで渡し

『春子は大丈夫でせうか』

『えゝ御心配なさる事はございません、とても結構な出來榮でございますから』とお世辭たつぷり、りつはすつかり滿足、師匠は歸る。でも、りつはまた心配で春子に稽古を付けさして見るが、とても下手ので我ながら呆れたが今更仕方ないと云ふ形、そこへ豐藏怒りに燃える眼で現はれ

『よくも俺をプルジョア政黨の走狗だと云つた。町内の害蟲だと云つた、もう誰が調停に入つても家賃は斷然下げん畜生、床屋の野郎が一番癪に障る奴だ、何處で聞いたか娘に琵琶を唄はせながら親父がこんな惡辣な事をして恥かしくないかと云ひやがつた……』と口惜しさに當り散らす。その時玄關から

『その通りだ、それに違ひないんだ……』と大衆の罵聲。

『畜生ッ——ばかッ……』と豐藏は叫ぶ。

◇第三景　阪下クラブ樂屋裏◇

りつと春子は三四人の手傳ひ人にいろ〳〵用を命じながらも折々表舞臺の彈奏に氣をかけて不安な顏をする。

『ねえ師匠大丈夫でせうか』そして投票數の前例などを聞いて『若し七十枚で足りないやうでしたら追加いたします』と云ふ、内に春子の番が來たので春子は舞臺に出る、彌次や拍手等が漏れて來る、『大變ん今夜のお客は柄が悪いやうですね』とは師匠とりつとの會話そこへおつねが床屋の親方とやつて來る。

『今度はお前の番だ、しつかりやれよ』と床屋は勇氣付ける。そして春子が終つて戻つて來るとおつねが出て行く、同時に高座からは

『待つてました』『いよう花形』『おつね坊』等々、激しい觀客の拍手と聲援が起る。床屋の親方は得意さうに反り身になつて『どんなもんだ』と云はぬばかりにりつや春子の方を見る。

◇第四景　加川家の茶の間◇

留守番に當てられた豐藏至極物足りない顏だが、傍の女中の酌で飲む酒が殊の外美味

さうに舌鼓を打つて『もつと此方へ寄れよ』と女中の手を握つてニタ〳〵とする

『あれ旦那様、お止し遊ばして……』と逃かける、豐藏追はうとする、その時消魂しい電話のベル、女中が出る、そして直ぐ

『奥様からで』と豐藏に讓る。

『うむ、どうした投票は、何に店子のペンキ屋の娘が、實に怪しからん、貧さうだ？ぢやアもつと札を買收せい。向ふは何票だ、八十七票？、此方が八十票、よしぢやアもう二十票も買つたら勝てるだらう、ペンキ屋に貧てはわしの名折れぢや、それにしても怪しからん、娘の投票に金をかける位なら家賃の値下げなんか云ふ所はあるまいに……』と電話を切る、酒を飲む、また電話、

『どうだね形勢は、不利だ、そいつアいかん投票を全部買收しろ、未開票のが何票位あるんだ、十七票、そして此方は百三十五票だ、向ふは、百二十七票か、ぢやア此の儘進めば春子の勝利だ……えゝ向ふが百三十二票だ、……アッ百三十八票だ、おいおりつ、もう買收する投票はないのか、おい、どうした、若し〳〵、……何にッ奥さんが卒倒？、そして勝負は、此方が百三十五票、向ふが百三十八票うー、もう駄目か……』と失望してこれ又卒倒する戸外には一齊に起る歡起の聲。

『おつね坊萬歳ッ！』『加川の奴態ア見ろ』

『無産者でも結束すればこんなもんだ、』『家賃を下げろ』『一人も裏切つちやアいけねえぞ』『勝つた〳〵正々堂々勝つた、おつね坊萬歳ッ！』と漏れて來る。

◇第五景　第一景に同じ、但し夜景◇

おつねが群衆に卷れて戻つて來る、小僧が一等賞品鏡臺を抱へて後から來る。母親迎へに出る。そして座敷狹ましに群衆に對し親子二人は喜びの禮を述べる。群衆も愉快さうにこれに受け答へをしてやがて引上げる。殘された親子に小僧もそれ〴〵寢る支度をして床に這入る。間もなく倉吉に床屋の親方が泥のやうに醉ッ拂つて戻つて來る。

『全く今夜は親方には一方ならねえお骨折りをさして濟まなかつたね』

『そんな事より、加川の奴はよつぽど馬鹿野郎だ、あんな事でやたらに金を費ひやアがつて、此方を見てみねえ、僅か十五圓かそこらしか費つてゐねえ、後の投票は本統のお客のひいき投票だ、なア倉さん』

『だけれど、この事で加川が家賃を下げなかつたら、俺ア町内の人に濟まねえ。』

『何を云ふんだ、心配する事はねえ、俺は屹度間違をうまくまとめて見せる。所で之から直ぐ歸つて寢るかね』

『うむ、俺は何だか知らねえがやたらに愉快だ、親方何處かご飲み直して來やう。吉原は何うだね』『結構、直ぐ出かけやう』

『でもこれに（と小指を出す）大丈夫かい』

『今更、女房の思惑が氣になる年頃でもなからう、お互にな……』と茲で話は一決して、倉吉は一寸財布を調べるのを見て、床屋の親方が『俺も少し持つてるから……』と云ふのを、それでは濟まねえと云つて、倉吉は家に歸つて出直さうとて、家に這入り、茶の間をガタ〳〵させる、女房が二階から降りて來て

『何をまご〳〵してゐるの、寢たらどう？』

倉吉はしまつたと云ふ顔で、戸外に氣をやりながら尙もうろ〳〵

『おい倉さん、もういゝつてことよ、俺が持つてるから』とひよいと入口に立つ、同時に倉吉の女房の視線とばつたり合ふ。女房は今日の禮を厚く述べる、そして倉吉のなまけをためしてくれと賴む、床屋の親方くすぐつたつくなつて『倉さん、今夜はもうおそいからこれで御免するよ……』と慌てゝ歸る、倉吉は茶の間にごろり横になる、妻はそれを起して二階へ連れて行く。

（幕）

曾我廼家五郎

春宵綺語

×

花見月の中座出演は、吉例であり、昨年の餅搗興行以來久々の歸阪であり、色色な意味で、御鞭韃や、御期待を下さる方々へ、冒頭深謝の意を表します。

×

何事によらず、見くびられる事は不愉快でたまらない。

その變り、買ひかぶられる事は、たとへそれが迷惑であつても嬉しい事です。

だから吐るばかりではいけない、なにごとによらず、ほめて、やらなくてはいけない。

みくびる事よりも、ほめる事の方に、より向上のある事を、忘れてはいけない

×

芝居の場合は、特に、見る立場の人と舞臺人との間の、毀譽褒貶は、舞臺人の向上に、非常に深い關係のある事を、見る立場にある人は忘れてはいけない……と思ひますが……。

×

田中智學氏は、何時も、五郎劇は、文部省推薦ではなく推定だ、といつて、賞めて下さいますが、これにはちと恐縮いたしました。

×

推薦の言葉はよく聞きますが、推定となると、いさゝか考へさせられずには居られません。

×

その文部省推定も、要は、思想善導とか、國民教化とか、隨分六つケ敷ひ見解から、下すつたお言葉だと思つて居ますが、――實は私自身は、思想善導も國民教化も考へては居ません、しかし、自分の思想の古い事は知つて居ます、そしてその古い思想が、私の脚本なり、舞臺に現はれた時、それが思想善導となり、國民教化の――烏呼がましい言葉だが――

資料とやらにでもなるんでせう。

そして、芝居は、三圓八十錢――（五郎劇の標準觀劇料）――を面白く見せて歸へせば、要はすむわけです。

が……その面白く見せて歸へつて貰ふ事が、なか〳〵の至難事です。

×

喜劇といふものには、幾度も云ふ事ですが、最初の歐洲視察から歸朝した時から、既にあきらめをつけて居る私ですが……

ともかく、眞の喜劇は六つヶ敷いものです。

×

どうしても、觀客の氣持を打たねばならない、その打ちかたには、笑ひと涙があるが、涙で打たす事は、從來の新派と新劇と變りはない事になります。

しかも、すべての觀客は、笑ひよりも涙に、多くの同情を容易に唆られるものです。

×

これは獨り觀客といふ場合でなく、人間それ自體が笑ひよりも、涙に引き入れられ易いと云ふので、笑ひに引き入れるといふ事は、人間の性質を笑ひと涙に區別して根本的に考へる場合から、六つヶ敷いものです。

笑ひで、觀客の氣持を捕へる事の至難から、眞の喜劇にあきらめをつけたわけですが……

×

然し、笑はせる事は、ちつとも、六つヶ敷い事ではありません。だが、眞の喜劇は、爆笑でもなく、洪笑でもなく、苦笑でなくては、ならないのが、私の眞念ですが……

劇の進行につれて、思はず知らず觀客を笑はせたり、幕がしまつてから後までも、觀客を笑はせる事が出來たら、やうやく、眞の喜劇に成功を得たと云へるでせう。

そうした意味で、此度の「かけぐち」などは、かなり自信のあるものですが……

久々お目見得の御挨拶にかへて、思ひ出のまゝを……

ギブス固煉磨齒

本品を使用すれば、幼時より老年に至るまで齒牙を完全に保つ事が出來ます。

何故なれば、ギブス煉齒磨は刷子がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのであります。毎日二回必ずギブス煉齒磨を御用ひ遊ばせ、さすれば氣分は爽快になられます。

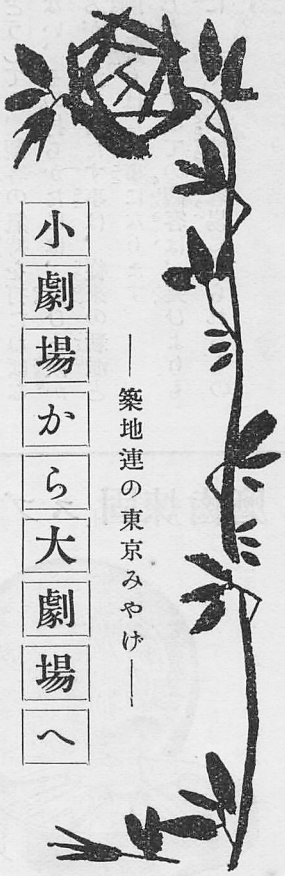
本品は美しきアルミニューム罐入りで桃色の固煉製であります、有名な百貨店、藥店及化粧品店に賣つて居ります。

大形　壹個　金七拾錢
小形　壹個　金四拾五錢

大形中除　壹個　金六拾錢

ロンドン　パリス　ディ・エンド・グブリュー

日本代理店　株式會社　ギブス株式會社　横山商店
東區豐後町三番地



小劇場から大劇場へ

——築地連の東京みやげ——

汐見洋

道頓堀——

それは私の憧れでした。

青い灯赤い灯の道頓堀——

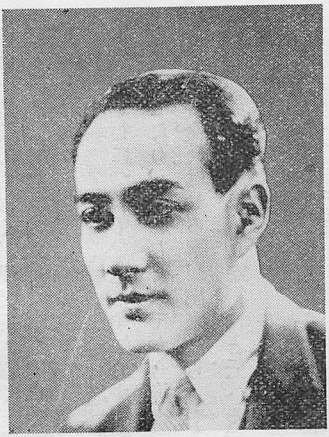
そこで芝居をする事は年來の私の宿望でありました。

今まで御當地へは度々參りました。しかし朝日會館、中之島公會堂などゝいふ講堂でいたして來ましたが。私には何となく固苦しいやうな氣持ちが致してなりませんでした、恐らく御覽になる觀客の方もさういふやうな御心持であつたのではないでせうか。それに總ての點に於て設備が不十分でありましたから私達の仕事を十分批判していたゞく事が出來ませんでした、それでいつかは道頓堀へ出演致したいといふ希望を持つて居りましたが、幸ひ此度大阪松竹の招聘によりまして、浪花座に出勤致す事は、愉快に思はずにはゐられません。

しかし今度は第一劇場の方々に加つて私達の一幕を御目にかける譯ですから、軒並べといふやうなもので御座居ますが、追ひ〳〵に機會を見まして、私達は色々の形で舞臺から皆樣にお近附きになりたいと思ひます。

私達は永年築地の實驗室に立て籠つて多くの技術を學びました、演出、俳優の演技は元より舞臺裝置、照明、効果に至るまで多くの收穫を得ました。これは私達の誇りとする所であります、今後機會ある毎に私達が實驗室で貯め込んだフレッシュな新趣ある仕事を、御當地で發表さしていたゞく事を御約束いたしたいと思ひます。けれども舞臺にたずさはる私達ばかりでは芝居は出來ません、これはどうしても、觀客の皆樣の御力にお縋りしなければならないと思ひます。

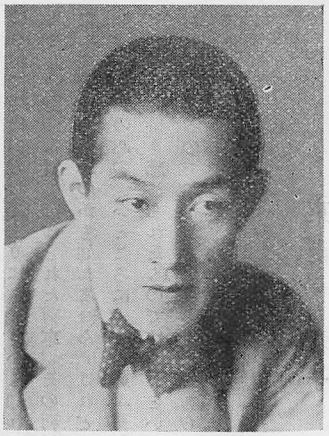
扨てこの度上演しますフランスのラビッシ原作の「色氣ばかりは別物だ」は名語學者關口存男氏が飜譯して下さいましたから今迄での生硬な飜譯劇と違つて決して西洋劇といふやうな感じは致しません、日本の芝居を御覽になるのと大して違ひません事を御吹聽いたします、現に東京松竹本社長の大谷氏も此脚



本を手にして――西洋にもこんな面白い物があるのか――と云はれたさうで御座居ます。

それに今度は演出家青山君を初め、友田、御橋、東山、田村諸君といふ舊築地の生んだエクスパートと、同行である事は私の心強く思ふ事です。

「新劇」「西洋の芝居」は解らない詰らないといふやうな毛嫌ひをなさらずに、私達の此度の第一歩が無駄でなかつたと、お思ひになりますやうに何卒皆様に勇氣づけていたゞきたいと思ひます。



友田恭助

初めてお目にかゝります。どうぞ宜しく。

築地もいろ〳〵と變りましたが、まだ本當に落ちつく所までは參つて居りません。いづれ何かの形で皆様に本體をお目にかけられると思つて居ります。

と申しますと今度は似せ物ぢやないかと云ふ御心配もおありでせうが、夫は違ひます。近く出來る或る型の一部と御覽下さればいゝと思ひます。

さて今度持つて參りました喜劇ですが、これは皆様にも始めてのやうに、私達に取りましても始めてのやうなものです。どういふものになりますか、私達にはまだ見當はつきません。しかしこれも御心配下さいますな、けつして近頃流行語の「インチキ」なものではありません。我々は今日まで十年間の力を全部使つて作り上げるつもりで居ります。

私達ももうこゝらで素人から、いゝ意味での商賣人に成らなければいけないと思ひますしかし素人としてのいつまでもカタマラナイ何かは、のこして置きたいものです。

何にかと云ふより私達の仕事を見て下さいそれから何んとか云つて下さい。

御橋公

私は思想運動家でも、單なる演劇運動家でもありません、たゞの職人、芝居をする職人です。最近プロレタリア演劇が擡頭し新劇界を壟斷した傾きがあります。勿論私もイデオロギー的な演劇を全的に否定するものではありませんが、といつてさうした演劇をのみ續けて行く事に贊成しかねる一人です。さういふ見方は時代錯誤だとけなされるかも知れません、しかし私は自由主義的な立場から面白い芝居、良い芝居をしたいのです、つまり私が職人である、と云つた所以もそこにあるのです。私のやうな演劇行動をとつてゐるもの

はやがて時代からおき去りにされるかも知れません。野邊に置き忘れられた荷車、その荷車に終つてしまふのかも知れません。けれども、なほ私の心の深いところに、こういふ荷車は決して置き忘れられたものではないといふ信念があるのです、本當の良い職人であらうとする抱負があるのです。

東山千榮子

道頓堀の舞臺から皆様にお目にかゝり得ますことをほんとに嬉しく存じます。こちらには以前にも時々參つたのですが、いつも講堂などでございましたので思ふやうに參りませんでした。私達、もと築地に居りました時は飜譯ものばかりやつて居りまして、なんとなく窮屈な芝居を致すやうに、お考がへになる方もおありのやうでございますが、國別に致しますとやはり日本のものが一番多うございますし、又けつして固苦しくはないつもりでございます。今度致します「色氣ばかりは別物だ」も飜譯物ではございますが、皆様くつろいで御覽下さいますやうにと私達力をあはせて準備いたしました。至らぬところも澤山あるでございませうが、どうぞよろしく御後援下さいますやう御願ひ申し上げます。先ははじめて道頓堀に參りましての御挨拶まで。

（談話筆記）

田村秋子

永い間憧れて居りました道頓堀にとう〳〵參ることが出來ました。私は嬉しくてなりません。それに、てうど時節は四月でございますし、毎日明るいうちは、方々とびまはつてみますつもりで御座居ます。それから夜いたしますお芝居「色氣ばかりは別物だ」、これは私共決して快心のものでは御座居ません、けれどいくらかでも皆様のお氣に召しませば、この次こそは、きつともつともつと宜しいものをお目にかけられることゝまあ御約束申し上げておきませう。先は一寸宜しくとの御挨拶まで。（談話筆記）

——順序不同——

「色氣ばかりは別物だ」の配役

主人シフオンネ	汐見洋
女中プリューネツト	田村秋子
田舎者マシアヴオアヌ	友田恭助
客コクナール	御橋公
同夫人	東山千榮子

◇

帝劇の女優が井上正夫一派と共に京都の南座に來て「天國地獄」といふのを出してゐる帝劇の……といふから、さぞかし華やかな舞臺のものだろうと思ふと、全員これ皆まつくろけな女工さんの芝居、そしていわゆる處のプロレタリア、イデオロギーの演劇と來てゐるから驚ろく。何にしても時代だ！

◇

時代といへば、浪花座の第一劇場が出した「淀君」は、姥櫻に達した女が、若返りをやるといふ芝居、これは蓋し老女のイデオロギーか——。淀君に扮する女優さんは三好榮子といふ人。それに「人氣投票」といふ喜劇では、市井の物知り爺さんが政治論をやらかすといふお笑ひの芝居。ところが「現内閣……」云々の作者のイデオロギーは美事その筋の手で削除！

◇

五郎が久しぶりに歸つて來た。喜劇といへば五郎、五郎といへば喜劇の親玉！　近頃東京での人氣はすばらしいもので、大阪をリヨウガするものがあると——。やつぱり創始者の光りは底光りがあると見える。

◇

新聲劇の出し物、花にそむいて「安政怪盗傳」とある。中田にしろ、辻野にしろ、ずゐぶんこれまでドロボーの芝居をやつて來て、この所少し氣が差して叶はぬといふ。中田の覆面黑裝束、花道を通る時近くにゐる見物がジロ〳〵と中田の顏を見上げて「此奴、前ドロボーと違ふか——」。これには中田もいさゝか參つた！

◇

歌舞伎は何處へ行く——

その聲や久しである。だが歌舞伎は以然として歌舞伎である。近松と默阿彌と荒事と和事のこの四つの流れから一歩も出ない樣だ。

その傳統こそ本當に尊しといふ物である。いつまでもシツカリと昔乍らの型と、そして色彩は長く〳〵傳へて欲しいものだと思ふ。しかし時代は移る。歌舞伎の世界にも新しい分野は開けて行く。いや、漸次新分野が確立されなければ嘘だ。

或ひは、歌舞伎本來の傳統的使命が崩壞されるにしてもこの新分野の確立こそ、將來の歌舞伎の「生くる道」である。

それなら、新分野とは——。

大衆の認意に成る演劇の上演である。

歌舞伎が、歌舞伎俳優がもつと〳〵演劇的インテリと握手して、新時代にタッチしたフレッシュな芝居をしてもいゝと思ふ。

たゞし、そんなものが全體的に歌舞伎の行く道だとはいはない。さうした別な一つの分野を持つことが、また必要ではあるまいかといふだけの御相談——。

◇

東京で新派が全盛をきはめてゐる。澤正興り、即ちケンゲキ流行と共に、東京に於ても關西に於ても新派がそれから不遇に置かれ出した。そして十年にも餘る。

といふと、故澤田のためにさしもの新派もメチャ〳〵にされた樣に聞えるが、さうでなくつても、當時「勤王」とか「同志」とかいふ言葉と、そして劍と劍の交戟は遙かに「浪さん」や「お宮」の涙よりも歡迎された。

處が、その劍劇もすでに「月形半平太」に非ず「近藤勇」に非ざる時代が來た。勿論「國定忠次」や「清水治郎長」の英雄的行動にも共鳴がうすくなつた。

そして、新派はまた本年の春にめぐり合した。伊井、河合、喜多村の三頭目の名も以然として金城鐵壁の牢固たる位置にある。

いま東京には新派の大合同が引つゞき行はれてゐる。

これを或る若手の新派俳優は「當然時代が移れば週期的に斯くの如き好成績を擧げ得るだけの質的には劍劇よりも後れたものを新派は持つてゐたのだ」と觀てゐた。

果して、新派はさうなのだらうか。澤正——劍劇——などの流行に一時まくし立てられても、やはり確固たる價値を存してゐるのだろうか——。

「太功記」の一考察

――四月の文樂座――

森　ほのほ

「繪本太功記」は文樂座の出し物の中でも、かなり度々繰返される狂言である。從來、前狂言として、全十三册の中、大序「安土城の段」（本文の發端）「二條城中、配膳の段」（六月朔日の段）「本能寺の段」（二日の段）清水長左衞門切腹の段（三日の段）「妙心寺の段」（六日の段）「尼ヶ崎の段」（十日の段）といふやうに、大部分を通して見せたものである。此度は「本能寺」と「尼ヶ崎」だけを出すと聞く。義太夫通の多い大阪では所謂「太十」の「尼ヶ崎」だけでも事足りるのであらう。併し「太功記」てふ淨曲の面白さは、矢張大序から十段目へと疊み込んで來るに在る。殊にこの作のやうに、中心人物たる光秀の――心理描寫といふまでではなくとも、心持の變化を取扱つたものに於てさうである。而も、その心的變化が、かなり丁寧に漸層的に書かれてゐるのであるから――。

光秀といふ冷靜な、道義的な、理性的な一人格者が、周圍の力でだん〳〵に動かされ、昂奮させられて、遂に反逆者と呼ばれるまでの過程、その漸層的な興味夫が此曲の面白さである。この意味からすれば「繪本太功記」を本當に味はふには、挿話（エピソード）である清水長左衞門や、鱸孫市や、松田太郎左衞門の條などはカットし、光秀を中心とした發端の「安土城」から二條城の配膳、本能寺、妙心寺、尼ヶ崎（そして大詰、光秀最後の十三日の段）と通して見せるべきである。人形劇研究の上から斯樣に院本々位で狂言を据えることも、時々はあつて欲しいと思ふ。

○

光秀が反逆者と呼ばれるまでの過程――それはかういふ風に取扱はれてゐる――。

大序「安土城」で、死罪となる妙國寺の僧、普天の助命を請ふ處に、信長の光秀に對する反感の端が發しる。（この僧普天が信長を罵倒し、呪咀する件は、綺堂氏作「增補信長記」の善住坊を連想する。作者は彼の人物のヒントを此に得られたのではあるまいか。）

次に「二條城」で、同じ勅使饗應の役にある蘭丸と爭ひ、それが信長に好い口實を與へる。とゞ蘭丸の鐵扇に眉間を割られる――これが第二段である。（歌舞伎の所謂「眉間割」が之に負ふ所の多いのは言ふまでもない。）併し、この段の光秀は未だ敵意を含んではゐない。君臣の分を忘れようとはしない。

光秀が本當に反意を起すのは「朔日の段」の奥、上屋敷の段で、上使赤山與三兵衞から上意と稱する遠廻しの自滅策を聞いてからである。（此段は歌舞伎の「愛宕山」の場に相當する。）

「心なき人は何とも言はゞ言へ、身をも惜しまじ名をも惜しまず」――光秀は既う決心を翻へさうとはしないのである。

○

芝居の「十段目」は、近來は「殘る蒼……」からが普通で、十次郎の入込を見せるのさへ稀れなことである。併し、人形の方では院本通り、妙見講の件から操、初菊の見舞、旅僧に化けた久吉の駈込み、次に十次郎の入りといふやうに忠實に見せるのが例となつてゐる。

今述べた旅僧の久吉が一夜の宿を借りる、外には「人目を忍び唯一騎」光秀がそつと立聞いてゐる――本文通りのこの場面は芝居では見られない。そしてこれは劇を研究する者にとつて尠からぬ興味がある――。

「窺ひ立聞く」光秀が「心得難き旅僧」と生垣を分けて覗くと思はず母と顔を見合す。こゝで「老母は何か心に點頭いた處のものは「作りし罪の萬分一亡ぶる事もあらうか」と「我が子に代る」決意である。

人形は勿論、芝居でも、光秀が久吉を刺したと思つて引出す時、老母が墨の衣を被つてゐる型がある。猿之助の亡父、段四郎なども此型に依つてゐた。餘り企んだやうで妙でないと非難する評家もあるが、前に述べた通り本文を觀ると、前から久吉の身代りたらんと企くんでゐる方が本當である。企んでゐる以上、墨染の衣で姿を隱すに、少しも不思議はないのである。

○

光秀の母の身代りの趣向は、大近松の「用明天皇職人鑑」の二段目に於ける佐渡ノ兵藤太が母の身代りの翻案であると、黑木勘藏氏は述べてゐられる。

松浦の鄕士、兵藤太には佐用姫といふ妹がある。兄は惡皇子方に與してゐるが、妹の契を結んだ五位之介は親王方で在た。五位之介は姫と緣を切る爲の難題として「さ程添ひたくば、御身手に掛け兄兵藤太が首取つて來れ」と言ふ。母は兄妹の孰れをも殺すに忍びず、兵藤太が身代りとなつて、姫が長刀に命を落すのである。此身代りの趣向は、恐らく袈裟御前の傳說に系統を引いてゐるのであらう。

○

「夕顏棚の此方より」で藪陰から現はれる光秀を、竹藪を描いた道具幕の前で演じたのを見たが、これは新しい、大膽な手法である。同じ折に、物見の件で、光秀が松に登るにつれて、松の方をせり下げたのも、人形劇らしい稚拙さが反つて嬉しく思はれた。震災前の夏、東京の有樂座であつたが、遣ひ手は誰だか忘れてしまつた。かうした手法の大膽さ、幼稚さが人形劇の生命ではないだらうか。今の人形劇の愈々眞實味、人間味に近づくことは、果してそれが本道であらうか……否か……。

文樂漫談

高谷　伸

〃文樂へ〃

運轉手にさう命じた私は、タクシーの中でマッチの火を擦りながら考へた。それは一月上旬、新築落成の文樂座初興行へ急ぐ途中である。嘗て、どこかに三宅周太郎氏が文樂座を知らない運轉手の話を書かれたことを思ひだしたからである。ましてそれは數十年の老舗の文樂座である。私の行かうとしてゐたのは開場後旬日を出ない新文樂座である。そこで念を押した。

〃文樂座、わかつてるか〃

〃えゝ、わかつてます〃

運轉手は、ハンドルを握つたまゝ、ちらりとふりかへつて元氣よく答へた。私は、ほつと煙の輪をふいた。

この二つの場合を比較して、知る知らぬといふことは運轉手によるといふよりも、新文樂座の存在が一般に普及されたと見るべきであらうと考へた。

無くなれば惜しまれるのが人情である。舊文樂座燒失後、それを惜む聲が大きかつただけ、文樂を知るも知らぬも、新文樂に對する期待が多かつた。その上松竹の行きとゞいた宣傳もあつた。かうして再生の文樂座は、御靈境内から四ツ橋へ、文字通り街頭に進出したのであつた。

新築後の文樂座の興行成績は實にすばらしいものらしい。以前の悲觀時代とは隔世の感がある。觀客の種類も變つた。興行方針も變つた。

以前は限られた淨瑠璃愛好者だけであつたと見られたが、今では淨瑠璃を、これ亦知るも知らぬもである。聞きにくる客もあれば、見にくる客もある。以前は聞きにくる客が九〇パーセントだつたと思ふが、今では見にくる客もかなりあるだらう。

先代萩と吉田屋とを前後に据えて、華やかな三番叟と澁い俊寛とを中に挾んだ一月興行、近松以來興趣の深い國姓爺と、淨瑠璃としてはともかくも一般によくわかる勸進帳、嘗ては禁止問題を起した合邦、人形の手さばきの細かい兜軍記と並べた二月興行、越路と弦阿彌の追善として珍らしい空也念佛や堂々たる妹背の山の段を出した三月興行と、月々の狂言配列の巧さ、殊に二月興行などは心憎いまでに理想的な出し物であつた。

たゞ、人形淨瑠璃といへば通し狂言を見馴れた從來の觀客層には問題が多少起るかも知れないが、興行政策上多數の觀客を吸收するためには、安全第一と「みどり」の方針に走るの外はないかも知れない。しかし、全五段を通して見る時は院本のそ

れ〳〵各段に亙つて語り場見せ場は充分考へられてゐるのだから時折には忠臣藏でなくても通して見せて欲しいとも思ふ。

四月の文樂座は、太功記、すしや、酒屋、道成寺だといふ。俊寛や、合邦や、山などが高等科だとすれば、太十や酒屋は普通科であらう。太十や酒屋が語り易いといふのではない。「これ見たまへ光秀殿」や、「今頃は半七つあん」が耳馴れてゐるといふ意味である。古い話だが伯爵柳原義光が太十のサワリを一夜に八遍繰りかへして太功記八十段目といふ有名なゴシツプを作つたといふ話がある程で、言はゞ伯爵の御前から熊公八公のプロ階級に至るまで御存じの太功記十日目なのである。

とはいふものゝ、さて語るとなると素人は勿論、專門家でも難かしいのは敢て太十に限らない。かりに「現れいでたる武智光秀」の一句にしても、素人は無暗に張つて語ればよいと思ひ大きい〳〵など、譽められて好い氣なものであるが、あの光秀に堂々と現れ出でられた日には困つたもので、籔垣から忍んでのつと現れるのだから、ある澁さと殺氣が必要なことはいふまでもない。

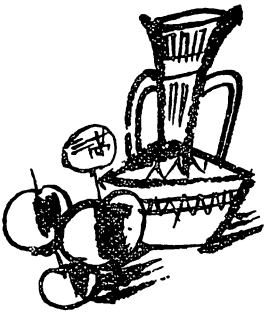
十日目、大抵の淨瑠璃が三の口とか四の切とか五段の内の何段目といふのに太功記だけは何日目といふのは、全曲を發端から十三日までに分けて日記風に仕組んだのが作者の味噌で、尼ケ崎はその十日目である。三日天下の光秀に十日目があるかなどゝ混ぜかへされたら十日目でなくて百年目。折角の趣向を立てた近松やなぎ近松湖水軒近松千葉軒などが泣くであらう。書き卸しの豐竹座寛政十一年以來百三十二年目である。

發端は妙國寺の蘇鐵の件、以下六月朔日の饗應から謀叛の決意、二日は本能寺、三四五日は中國攻めから久吉歸京の所まで六日が妙心寺の砦、七日が杉の森で鷺の森の石山本願寺の件、八日が春長一七日の法事、九日が田島頭の奮闘、十日が尼ケ崎十一十二日が利休と柵の苦衷、十三日が小栗栖といふ風になつてゐる。これを五段風に考へると、尼ケ崎はやはり四の切にあたる重要な場なのである。

太功記書卸しの寛政期は操りとしては、とくに全盛期をすぎて庇を貸して主家を取られた壓迫を歌舞伎から受けてゐた時代であるが、猶節調に苦心して、普及された語り物といへば、時代物なら、まづ太十と指を折られる程になつたのである。淨瑠璃後期の代表作であらう。

酒屋も、太十に對して世話物の方では誰もが知るお園のサワリがある。「艶容女舞衣」是も安永元年の作だから太功記よりは古いがやはり後期の作品とみるべきで、作者は竹本三郎兵衛、八民平七、豐竹應律である。人形使ひの名人上手によれば行燈の陰のお園の姿にあはれの深いものはあるが、やはり、純然たる聞き物と言ふてよいであらう。

すしやは言ふまでも無く出雲等の義經千本櫻の三段目それに人形の華かな道行もあるものゝこと。（第二十八頁〜）



「疵高倉」の話

長谷川　伸

「疵高倉」は會津加藤家の封土沒收一件の際に起つた家臣爭鬪談に材料を採つたものである。いろ〳〵ある武士の爭鬪談の中でもこれなどは隨分面白いと思つてゐたので、遂にこの三月に三幕物に書いてみたのである。この材料はもとより獨自ではなく、だれでも知つてゐる話で、所謂「會津騷動」を史家が語れば、必らず付き物として語らるゝ程、有名な爭鬪談である。

◇

「會津領四十萬石不慮に沒收せられしに付き加藤家の諸臣一同は遽に浪人となれり、茲に馬廻りにて高倉長右衞門といへるは一武技に長じ剛直の士であつたが懇親五六人と會し身の振り方の相談中、東鄕茂兵衞と些細の事から口論し決鬪になりかけたが、仲裁者があつて納まつた「然るに長右衞門歸宅の後、家僕を呼び、もし門を敲き訪るゝ者あらばその姓名を聞き訊し東鄕茂兵衞ならんには我等疾より待ち居れりと答へて開き入れよと命じ置き、自身は奥の一室に寢もやらずして待ち居たり。」果して茂兵衞がやつて來たので「死後他人に見られて叶はざる反古類」を處分したかと尋ねた「東鄕もハタと心付き」兩人連立つて行き、長右衞門は東鄕の門前に半刻ほど待ち、再び出てきた東鄕と共に「今は人に笑はるべき事もなし、いざ勝負」と爭鬪し、互ひに數ヶ所の創を負ひ、遂に長右衞門が東鄕を討ちとめ、加藤家の納戸役金子助十郎方に立退き、それから日光の山中に匿れて疵養生をした。

◇

東鄕茂兵衞には權左衞門、又八郎と二人の弟があつたが權左衞門は病死し、又八郎一人にて復讐を志して江戸に出で、本町通りで長右衞門に出會ひ、爭鬪して互ひに負傷し「町方の與力

同人どもこの騒ぎを聞付け馳せ來たり、二人を引分けせしめたり。」その後、又八郎は手紙で復讐を斷念したと長右衛門に通告したが、長右衛門はそれが計策であるのを觀破した。

又八郎の方は疵養生をして會津に歸り、再び江戸に出て長右衛門を討たうとしたが、眼病に罹りて後に死去した。

長右衛門の方は兩度の爭鬪で「面部手足に數十ケ所の刀疵をのこし、大名中にも能き武士よと思ひ給ひ、彼方、此方より召呼せられ出入する屋敷も多かりき。」

この長右衛門が東叡山の某院で十三四歳の美童に邂逅し、名を聞けば高倉宗四郎、だん〳〵聞き訊すと東鄕を討つて會津を出奔した時、胤を宿した侍女があつた、その生んだのがこの宗四郎だつたと判かつたので、夫婦親子が一所になり、やがて松平大和守直矩（丹波）に仕へ、五百石を與へられ、足輕二十人を附屬され、宗四郎は別に二百石賜はつたといふ。處が長右衛門、馬から落ち金創から血を貰き出したのが却つて幸ひで、今まで利かなかつた右腕が以前よりも自由になつた。

大體かういふのが高倉長右衛門である。

◇

以上のやうな高倉傳も、附會や粉飾が多分に加はつてゐるとは、誰でもいふ處である、といつて正確なものが別に傳はつてもゐないらしい。或はこの爭鬪談も創作であるかも知れない。たとへ、虛飾されたものにしろその頃の士風を語るものとしては、もつとも手頃な物である事に異動はないのだから、私は採つて以つて私の役に立てたのである。隨つてこの材料をバラバラに壞した後に組み立てたので、たとへば國史講習會本の「御家騷動の研究」中にある「會津騷動」に引用されてゐる。原文の作だといふ高倉の傳と、私の作とを對照して貰ふと、いかに組みあげ、いかに神經を植えつけやうとしたかゞ判かるだらうと思ふ。

長右衛門、又八郎の爭鬪にあたつて、見物中から「足を拂へ」と助言した者がある、これを採つて私は又八郎に强敵に對する必勝手段を行はせ、後に至つてその爲に自責心が起る事にしてある。長右衛門が右腕の利かぬのを足に振り換へた、侍女との戀をも一ッ振り換へて置いてみた。そんな事をいろ〳〵とやつてゐる。

◇

「會津騷動」とは加藤式部少輔明成と堀主水との、君臣衝突の大渦卷きで、明成は主水を峻烈な處刑に附し、快武を叫んだがその翌年には四十萬石の封土返還を餘儀なくされ、僅かに子息內藏助友明に石見吉松で一萬石を賜はる、これが後の江州水口城の三萬石、俗にいふ籤加藤の家である。加之、明成の弟も奧州二本松の封を削られた。

◇

一體會津の城は黑川といひ足利義滿時代の至德年間に葦名直盛が（賴朝の臣三浦十郎左衛門尉義連の後胤）築き、爾來連綿として葦名氏代々の居城であつたが、天正十七年、義廣の時に

伊達政宗に攻め取られた、政宗は會津に入城してゐたが秀吉の爲に削られ、蒲生氏郷が代つて入城し、百萬石の黑川を若松と更めたが、氏郷の子秀行が封を嗣いでから「蒲生騷動」が發して、會津を沒收され、秀行は下野宇都宮十八萬石に移封され、その後へは上杉景勝が百二十萬石で入城したが、關ケ原の役に前後して景勝は東北平定に着手し、雄志半ばならずして失敗に歸し百二十萬石から米澤三十萬石に移されてしまつた、その後へ再び蒲生秀行が六十萬石になつて若松に入城したが秀行父子ともに病死し削られたその後へ、伊豫松山で二十萬石だつた加藤左馬助嘉明が四十萬石となつて若松へ入つた、この加藤家も二代目の式部少輔が封を削られるといふ、變動の多い若松城は保科正之が入城してからは幕末の松平容保まで永續した、これが雜とした會津城の沿革だ。

◇

序幕は所謂武家退轉の時で、酒井、溝口その他の大名が幕吏と共に城地受取りに派遣された、其前後といふ事にしてある。

二幕目は本町通りであり、時は正月二日であるが、私は日本橋にしてしまつた。正月二日は賑かだが私が正月を好かないので、もつと陽氣のいゝ時にしたのである。本町通りも面白いが書いてゐる間に、日本橋の幻想が出てきて仕方がないので、あゝ書いたのである。

武家退轉の相を語りたいので、上沼庄助　小手森喜六の兩人を出したが、私としては小手森の方が面白いと思つてゐるのだが、或る人はさういはなかつた。しかし、たれが何といつた處で、自分が面白いと思つてゐる限り、面白いに相違ない。

◇

「疵高倉」といふ「疵」が「來ズ」に通ずるのかどうか知らないが、ご弊を擔ぐ場合は「御供は三百三十人」と改題してもいゝと思つてゐる。「來ズ」卽ち「疵」よりも「來ラレ」卽ち「切られ」の方が緣起がいゝので「切られ與三郎」それで足りなくて「お富」も一ツ「安」を出したのだと考へると、昔の人は用意周到だつたと變に感心してみる氣が出る。

しかし「疵高倉」といふ題名は出來上つた題名だと思つてゐる、餘り題をつけるのが旨くない私にとつて、これなどは上の部だと思つてゐる。幸ひに第一劇場では「疵高倉」で上演してくれるらしい。有難い。

（一九）

（第二十五頁より）

大丈夫の物である。

道成寺は芝居でも人形ぶりで賣りこんだ日高川か、それとも今樣亂拍子か、後者であればそれこそ近來での珍らしいものである。

とにもかくにも近來の文樂の興行目錄を見ると、その時の狙ひを定めたうまさがある。四月の出し物の淨瑠璃普通部的なのもまた一つの趣向として、義太夫愛好者を喜ばせるものであらう。殊に花見月の物として無理のない物と見る事ができる。

春の郊外

花の吉野山
アベノ橋ヨリのりかへなし

四月五日ヨリ廿五日マデ
大割引 往復 一圓半
午後一時ヨリ發賣

櫻!! 觀心寺
天野山
長野遊園

お子達の樂園
玉手遊園

ぼたん（四月下旬ヨリ）
當麻寺、石光寺

つゝじ（四月下旬ヨリ）
瀧谷不動、岡寺

アベノ橋
大鐵電車

岡本綺堂監修『舞臺』四月號要目

戲曲

見放された與三郎　森　ほのほ
幻お七（舞踊）　木村富子
松を伐る　大村嘉代子
藤見の宴　小林宗吉
石堂の御所（喜劇）　山下巖

劇評……大村、作間、森

歌舞伎劇の系統　渥美清太郎
歌舞伎談義　岡本綺堂

「ちや〳〵さま……」と云ふと大變モダン語に響かうが、この物語今を去る三百五十年前その昔、ある人物の名前として通稱されたのだから島渡面白い、最近の「パパ」「ママ」は何んのそのだ。

そこで「ちや〳〵さまとは……？」

驚くなかれ豐太閤の奥さん淀さんの幼名ではある。淀さんは越前一桑ケ谷淺井長政の長女で、父が秀吉に攻撃されて討死するや、直ちに秀吉の手に移されて成人した婦人である、ちや〳〵さまで通つた理由は、かなり淀さんが幼少から慘忍性と放從な氣持の持主であつたからだと聞く、卽ちめちや〳〵だつたのが、成長につれてちやちやの名前とはなつたのである。

◈序幕第一、浴室◈　その放從な淀君が秀吉の愛妾となると一そう粗暴を極めた。それは淀君には秀吉が父の仇であるのと、もう一つはその仇を討てずに秀吉に服從しなければならない反動から原因してゐる。

偖、淀君は粗暴が昂じて遂いにヒステリイの人になつた。侍女を罪なくして責める等、それの犧牲の槍玉に揚げられたのが楓と云ふ五奉行の一人木村常陸介の妹である。尤も楓は主命に依つて淀君素行の牒者のやうな役に出來てゐたからだ。

「浦、楓は妾に熱湯を呑まして殺さうとした不埒者である。何者に賴まれて斯の如き手段に及びしかその方、しかと吟味いたすやう」

浦とは淀君の腹中の局である。

「承知仕りました」と彼女は直ぐと楓を折檻にかゝる、そこへ恰度小姓相川牛三郎が石田三成の文使ひにやつて來た、淀君の態度一變、

「浦、今日は石田村からの好き文使ひぢや、楓の仕置は今宵一夜裕餘いたしてやれ……」

と淀君は文章を持つて自分の部屋に引取る、侍女は之れに從ふ。殘された楓と浦の局、敵愾心に互ひが燃へる、そいつを相川牛三郎が冷やかに、だが注意深く見詰める、内に楓は浦に引かれて揚り屋へ……チョン、木の頭。

◈第二、鳳凰堂◈　牛三郎は暗い心地で、鳳凰堂の前に差しかゝると、そこには木村常陸介と石川五右衛門の無德道人とが頻りに密

談に凝つてゐた。

「道人、火急お願ひがござる聞いて下され」

牛三郎は四邊り憚はず叫んで頼む。

「何んぢや頼みとは、どんな事か」

「罪のない人の命が今宵此の世から掻き消されやうとしてゐます」「だから話せと云ふに……」茲で牛三郎が見て來た楓の一件を述べた。傍らの木村は吃驚「えッ楓が……」と叫んで口惜しがる。道人はたじろなづいて立上る、牛三郎は之れに從はんとするを常陸介は

「他力を要するお前が道人に從つて行つて何になる、此處で待つてゐろ、話したい事がある」と止めた。道人は去つて行く、二人はこれを見送つて吐息、やがて

「牛三、お前は楓に戀してゐるな、だがその戀は此の儘のお前には不幸ぢや、女夫になりたくば之から俺の言葉に從へ」と訓へる、牛三郎は戀の爲に木村の言葉に從ふ事を契ふ。所へ石川の道人が氣絶した楓を抱へて戻つて來る。牛三郎は喜んだ、然し、運命であると云つて木村と道人の去つた後で自害せんとする、その理由ははつきりしない。只「世の義理が……」と叫ぶのみだ、楓は殺させまじと和め止める、さうしてもつれ合つてゐる内に牛三郎が白刃を落して「おゝ楓どの……」と抱擁する。

◈第三、淀君の居間◈　淀君は益々ヒステリイが昂じて當るべからずの權幕だ、そして腹臣の浦の局と檜垣とにその責を問ふので、二人は只々伏して辯明の言葉もない。

「十餘名の見張りを置きましたにも拘らず、楓が檻から消えて失せるは、只不思議と申さうより外にお返答もございませぬ」と、然し、それでは淀君の腹の蟲が治まらない、乃で見張りの者十餘名の侍女を呼寄せて楓の失綜を問責した、その揚句右十餘名の黑髮を一束に確く結びこれが等分に分けてその間に太い丸太棒を入れて一同を吊せとの申し分だ、恰も目刺式のやり口、一同は「御免遊ばせ、お許し遊ばして……」と嘆願する、けれ共淀君は容易に肯入れない。大奥付の侍をしてこの拷問を行はんとした。所へ石田治部三成が、

「御方樣、お手荒き事をなされては御身の汚れ、まづ〳〵萬事は私めにお任せ下さりませ」と仔細あり氣に和めたので淀君も

「ではその方に任すであらう……」とて一同は九死に一生を得た心地で喜ぶ、そして居間を退る、淀君と三成とは是から酒宴を催して今の今驚いだ事は他所吹く風。

「のう治部、わらははそなたの身のために勞く苦勞いたす、察してたも……」と人目がなくば取縋らん風情。

◈二幕目第一、お萬の方の居間◈　聚樂の大奥では日夜秀次がお萬を膝下に酒宴を開いてゐた。それが秀次の日程の樣でもあつた。と一日お萬が秀次と酒宴中につい口を辷らして、

「世にも美しき女があります」「そんな美しい女子なら是非逢つて見たい」「以前わらはの友垣にて」とて座中に導いて來る、それが楓であつた。秀次は一目見て楓の美に魅られ

「予の伽ぎを申し付ける。」然し楓はお萬に夫のある身なれば、例へ關白殿下にもしろお任せする事はなりませぬと斷はる、お萬は「それは一を知つて二を知らぬ事、關白殿下と、小姓相川との愛には天地の相違があります」と說得させやうとする、けれ共楓は頑として應じなかつた。そこでお萬とお萬の父阪主水とが奸策を弄して說得させやうと密議をする。

◈同第二、木村常陸介の別邸◈　常陸介は目算あつて夜中楓の居る別邸を訪れた。用人

たちは嚴重な固めをしてゐた。常陸介はまづ久々で楓と會合したがお互いが悲しい惱みを胸に抱いてゐた。それは楓はお萬から說かれた件、常陸介は秀次から楓を殿中に差出せとの事だつた。然し二人にはそれが有難い事ではあつたが實現出來ない事なので思案に暮れたが、そこへ半三郎が訪れて來た。半三郎の訪問は勿論常陸介との申合せがあつたからだ。三人はまづ酒宴をした、そじて常陸介曰く、

「どうか此の酒宴はそち等二人の祝言だと思つてくれ。それから秀次殿には濟まぬ事乍ら二人は奈良に居る石川五右衛門の下へ落延びてくれ、君命とは云へ女の操は破らせたくない」とてこん〳〵と諭した、二人は承知したが出發に先立ち

「石田治部の首を鳳凰堂前で契つた通り我が命に從ふて搖いて來てくれ」と半三郎に常陸介が云ふ、半三郎宜しいと引受けて立去る、常陸介も間もなく去る、楓は旅支度を整へる爲次の部屋に去つたが、やがて出て來ると二人の姿はなく石川五右衛門が悠然控へてゐるのに驚いた。

「まアあなた樣は……」

「案じる事はない半三郎は舅殿への引出物を取りに參つた、直ぐ戻つて來る、さア祝言の殘りの酒でも馳走になり申さう」

◈同第三、三成の居間◈ 半三郎は常陸介の命に依つて密かに石田の邸に忍び入り三成の居間に來て、將に一命を取らんとした刹那、却つて三成のために押へられた、半三郎は殘念がると共に悶へた、三成は別に憤りもしなかつたが、それだけに半三郎に諭す言葉は裏に裏を搖いたもので、流石に勇氣を鼓舞して忍んだ半三郎も一言もなく悄々と石田の邸を引取る態たらくであつた。

◈同第四、常陸介別莊◈ 常陸介と五右衛門は密議に凝つてゐた。

「關白殿下の御一命を殺し參らせて貰ひたい」

「して褒賞には何を下さるかな」

「一國一城の大名に此の木村がお引立て仕る」。

「そんな物はいらぬ、わしは官位が欲しい。そして天下の政事を司どり、世に美しい女子を自由にしたい」。

とやつて居る所へ、半三郎は死人の如く蒼白顏でしよんぼり戻り、

「舅殿、申分けございませぬ」と突如に自害に及ぶ、常陸介に五右衛門は「偉い、それでこそ武士大死にさせぬ」と褒めて楓を呼ぶ。楓は半三郎の自害を見て吃驚り、

「半三郎樣、せめては最後のお別れに我が妻と呼んで下されい」と縋つて泣く。

◈同第五、伏見稻荷附近◈

唄一へしんぞ、白いものでそろ、紅いものでそろ、秋の小花、しん、白いものでそろ、紅いものでそろ、なかかしや……

夫を失つた楓は遂に精神に異狀を來たし、そして洛中洛外をあてどもなく彷徨する、今の唄は楓の胸の何處かに夫半三郎を想ふ一念が殘つて居て、斯く唄になつて現はれたものである、恁うして彷徨してゐる中に、淀君の伏見稻荷參詣の途に楓がめぐり會ふた。淀君の輿を見るや

「御方、御覺悟」と懷劍の鞘を拔いて突き迫つた。だが警護の役に居た三成は「狼籍者」と云ふが早いか一刀の太刀は浴せられた、楓は怯せず對手した。然し女の腕の鈍さ、遂いに三成の太刀に仆された。これを蔭で見てゐた常陸介は、やがて行列の見えなくなるを見て飛出し、

「楓、楓……よく死んでくれた、心を殘すな

よ」と悲痛な聲を絞つて叫び、合掌した。

◇三幕目、第一淀君の居間◇　淀君は拾君を抱いて頻りに愁嘆する、浦の局と檜垣とがその側に侍して取なしする。だが淀君はそれに耳を貸さず

「そなたは豐臣家の一子に生れながら殿下の跡目も繼げず實に哀れな子である、その悲しみは此の淀も……」と歎く。そこへ三成が訪れて來る。淀君は待ち構えた顏、直ぐと酒盃を揚げて三成に差す。

三成何を考へたか、甚く物堅く出る。

「おん方さまのお盃は憂ひを拂ふためかも存じませぬが三成には涙の增す盃……」とほろりとする、淀君いよ〳〵焦て來て

「そなたはわらはには兄とも思へる賴母しき方ぢや、治部少輔わらはの胸の惱みを察してたもいのう」意味有り氣な瞳。

「これはまた異なるお言葉、三成御方さまの御胸中相判ればこそ、かくお盡し申し居るのでござる、これも皆太閤殿下の御ため、御家のためを思へばこそでござる、されば御方さまの御胸中をも充分にお察し申すなれど世の中は義理と人情のしがらみ、時には、御方さまのお氣に召さぬ事もなきにしも非らず、然しこれも御方さまをお守りする三成の心からにございます……」と聚樂殿からの使ひ文の來たを幸ひに「火急の用事もあらば」とて戻つて行く、淀君やき付くやうな眼で見送り直ぐと

「三成にまで飽きられたか、鏡を持て」と命ず、侍女は畏まつて持參する、「この鏡はわらはを呪つてゐる」と投げ付け狂亂の態、更らに新なる鏡に依つてつく〳〵己れが顏を見て

「駄目ぢや〳〵、わらはにも老の訪れが來た」と嘆じ法上上人を呼べと命ず、上人間もなくやつて來る、そこで淀君が不老の方法がないか、永久に若さを持つ事は出來ぬかとの無理な注文をする。

「それは有玄坊に命じて行はしむるが上々の策……」と答へ有玄坊を案内する。

物事は氣の持ちやう、淀君は有玄坊の說明にすつかり動かされて、急に陽氣になつてそわ〳〵し始め

「老幼壽命ばかりは人力では及ばぬと思ひしに、さて奇特な事もあるものぢや」と、飛んだ子供だましのやうな臺詞まわし、然しそんな幼稚な所に放縱者らしい向ふ見ずの淀君が現はれて一寸面白い仕組である。

◇同大詰、浴場◇

「御方さま、願望は奇蹟にも叶ひましたぞ、永へに若さと美しさが立ち戻りましたぞ」と有玄坊經文を終つて、寢臺に横たはる淀君に呼かける、淀君起き上つてまづ鏡を見る。

「おゝ、あのかすかな皺も消えた。此の黑き瞳の若々しさ、赤き唇、頰笑みのやさしさ、あゝわらはゝ、まだ若い、まだ美しい……」と勇み立つ、有玄坊陶然として眺めながら

「御方さま、一生のお願ひがございます」

「何事ぢや、天下にわらはの思ひの叶はぬものはない、何なりと申して見や」

「お情けでございまする、たつた一度でようございます、御方樣のお情けに縋らして下さいまし」

「何にわらはに……不所存者め」突のけるが有玄坊熱心にもつきまとふ、そこで仕方なく侍女の持つた懷劍で淀君が有玄を突き

「天下に並びなき美人の淀の手にかゝつて死なばそちも幸福であらう」の豪語を發して有玄を殺害し、再び鏡を見て、

「また春が來た、春ぢや〳〵、これ淀、そなたの春が再びめぐつて來たのぢやアぞオホホホ……」。

（完）

疵高倉

◆高倉の家◆

福島會津四十萬石の藩主加藤左馬助嘉明侯の嗣民部少輔明成侯が、重臣堀主水の叛反を未然に防止するため、まづ主人本人を慘刑に處したが、却つてその處刑方法が公儀の怒りに觸れる所となつて、茲に加藤家四十萬石は缺所となり、家名改易の餘儀なきに至つた。時は寛永二十年四月に始まる。

會津の城内外は何處もかしこも引越しやら藏首の沙汰に漲り、生ある心地は殆ど見られない位の陰氣さだつた。

一臣高倉家でも、奉公人達は今日がお暇か明日故郷に引揚げねばならないかと、全く死を待つ前の靜けさで日を送つて居る。忠僕佐兵衛に小間使のすがの二人は、千客萬來と云へば景氣はいいが、來る者〳〵が訣別の辭を述べるので氣をくさらせた。だが一々叮嚀な應答をするのでかなり疲勞した。

「佐兵衛どの、私達も明日が日にもお客樣のやうな別れの言葉を知己へお告げに歩かねばならないのですね」

「さうぢや、旦那樣が今にお城からお下りになれば、その別れの日も定まるであらう、すがどの、別れは何時の時でも淋しいものだの」

一寸の餘暇にでも二人はこん立話で主人長右衛門の歸宅を待つてゐた。そこへ人目を忍ぶやうにしてすがの戀人東郷又八郎が悲壯な面持ちで逢ひに來た。佐兵衛は幸ひに表方に行つてゐたので、すがが戀人の手を握つて、まづ泣いた。

「又八郎樣、あなた樣のお宅では何時お國立ちでございまする。」

「兄の言葉では明朝との仰せでござるが」

「それではこれが最後のお別れなので……」

「いや、それで自分はそなたに相談に參つたすがどの何んにも云はぬ、明朝を待たず今宵拙者と逃て下され」

「ても私は身分賤しく、また、お兄樣のお許しもなく、貴郎樣とお逃申しては……」

「いや、今はそんな事を云つてゐる場合ではない。直ぐ支度をして下され、今宵落ち延びやう、再び仕官して成功すれば兄は二人の仲を許してくれると思ふ……」

すがは又八郎の熱愛に嬉しく泣いた。そして、逃る事を約束した。又八郎は「では今宵我が門前に待つて」とて勇んで引取つた。

間もなく主人長右衛門が歸つて來た。沈痛

極まつた顔で……佐兵衛は偖はと主人の心を讀めたが、然し此の場合は主人の氣になれない方か宜からうと何事も云はずにゐた。すると長右衛門の方から、

「お前達の都合次第で何時でも身を引くがいゝ、さアこの金は二人で分けてくれ」と佐兵衛とすがに最後の通牒を下した。二人は別れを惜んで泣いた、だが、すがは又八郎と云ふ戀人に縋れる事の出來るので氣強い所があつた。すがは直ぐ自分の部屋で旅支度にかゝつた。

所へ長右衛門の親友である又八郎の兄茂兵衛が只ならぬ機幕で訪れた。佐兵衛は吃驚して取次いだが、長右衛門は怯れもせず笑つてゐた。そして謎の如き言葉を放した。

「長右衛門の生命も今が最後だ……」。

長右衛門と茂兵衛とは二人とも眼は其々血に燃えて加藤家存亡に關して爭論をなした。然し結果は決闘となつて「此の上は刀にかけて是非を訊す」と云ふ事に決した。長右衛門は勝負に先んじて

「東郷氏、勝負は時の運、萬一貴公が負た場合に此の世に遺して惡い品々や、子孫へ遺さねばならぬ品々もあらうから、それを片付けてから決闘してはどうか」と注意したので東郷も然りと思つて

「では暫らく待たれい跡始末をして參るから……」と直ぐに邸へ戻つた。長右衛門は茂兵衛の來るを待たで自ら東郷の邸へ決闘に出向いた。

「旦那様、どうしても決闘にお出かけですか」

「うむー佐兵衛、さらばぢや、達者で暮せよ」

◈東郷の門前◈

東郷家の門前には五六人の奴小者が各主人の命で告別に來てゐた。又八郎はこれに挨拶してゐる、軈て一段落ついたので又八郎は直ぐに旅裝束で再び現れ邸の横に待つすがを門内に案内した。

長右衛門はその以前から藪の中に隱れてゐたが人かげなくなつたのを見澄ましてのつそり門前に佇んだ。所へ茂兵衛が出て來た

「おゝ長右衛門か、今行かうとした所だ」

「門前ではいけない藪へ行かう」と二人は藪中の少しある廣場へ去つて行つた。

又八郎とすがとは

「兄上、何れ成功の曉にお詫び仕る」そしてすがと共に母屋の方に向つて合掌し暫らく別れを惜んで悄然と何れかへ姿を消した。

長右衛門と茂兵衛との鍔なりは通行の者の耳を奪つた。

「おやつ、斬り合ひだ、決闘らしい」と誰かゞ叫ふと、忽ちに門前は群集をなして藪のかなたへ押かけた。所へ長右衛門が、鮮血淋漓たる茂兵衛の生首を小脇に立つたが、その狀恰も修羅の巷を往來する鬼だつた。

「又八郎居らぬか、高倉長右衛門だ、會津加藤風の武士氣質に依つて日頃の心友なれど東郷茂兵衛と決闘ひ、九死に一生の勝を得た。又八郎居らぬか、其方の兄を高倉長右衛門が討ち果したぞ、兄の敵を討たずに置くまいその方故その場去らずに二度の勝負をいたしに參つた。又八郎居らぬか、又八郎――又八郎――又八郎居らぬか」

◈日本・橋◈

斯くして七年の歳月は流れた。慶安二年の春花の旺んな時である。茲は江戸日本橋の高札場前、諸種多樣の風俗が次から次と人馬の往來が絶へぬ中に、深編笠で面を包んだ東郷又八郎が加はつてゐた。

と突然奴小者同志の喧嘩が始まつた。物見高い人心は忽ち人の山を築く。そして口々に彌次る。すると此の喧嘩を敵討ちと心得て飛

出した武士があつた。又八郎が見るとその武士は忘れもせぬ幼少からの友小手森喜六だつた、彼は主人没落後極度の生活難に襲はれ、而して今尚仕官の口を探してゐる者だつた。

「敵討ちなら拙者助太刀いたす」と云つたが喧嘩と知つて落膽し

「えゝ、また奉公に外れたか」と悲感した。だが、又八郎を見ると

「どうして貴公は高倉を打取らぬ、敵討ちの時には拙者が助太刀申すぞ」と、喜六が勇氣付けた。

「拙者は一刻も早く長右衛門にめぐり會ひたい若し貴公が見かけたら知らせてくれ……」と賴む、恰度そこへ通りかゝつたのが長右衛門だつた。

又八郎は敢然として前に立ち塞がり矢庭に一刀拔いて長右衛門の脛を拂つた。

「誰だッ！卑怯者、名を名乘れ……」

「東郷又八郎だ、兄の敵勝負しろ」と茲に改めて名乘りを揚げた。高倉は又八郎の敵ではなかつた。

そして二人は次第に勢れて行つた、だが高倉は剛氣だつた、三度も又八郎を勵まして戰つた、がやつぱり傷はお互に受けたものゝ又八郎の方が歩行すらなり兼ねるまでに氣力が弱つた。

長右衛門は佐兵衛の介抱でやがて何れへか歸つて行つた。大衆は呻吟する又八郎を見て氣の毒がり大衆の中に町醫が居たのを幸ひ直と傷の手當を施したが又八郎は長右衛門を討ち取れぬ自分の腕の弱さを殘念がつた。

㊥又八郎浪宅㊥

日本橋に於いて重傷を負ふた又八郎は、永い歳月を涙々の身で過ぎて來た上の物入りなので家庭は實に悲慘そのものだつた。

又八郎の凶事を知つた昔の友や知己は來訪しては夫婦二人をいろ〳〵に慰めた。その度毎に、依然として又八郎は自分の腑甲斐なさを嘆くのだつたが、彼の傷負は日々に重態になるばかりだつた。

それは夏のある日の事だ、妻のすがゝついぞ又八郎に見せた事もなく、話した事もない黑裝束をつゞらの中から取出すのを又八郎が見付けた。

「何に用ゐるのだ」と咎めた。すがはこれには答へず泣いた。又八郎は呵責してもがいたので身體の痛みを覺えうと〳〵と眠りに入つて了つた、すがはその狀を見澄まして子供又市の寢てゐる枕元に一通の手紙を置いて決心の色でそつと家を忍び出て行く……

と表方から

「東郷ー、又八郎どの、又八郎どの……」と訪れる者がある、それは小手森喜六だつた。又八郎は目が覺めたのですぐ妻を呼んだ。居ない、すがの姿が見えない。又八郎は不思議でならない所へ喜六が這入つて來て、まづ彼の病氣を見舞ひすがの居ないのを聞き糾めた。

「そんな筈はないのだ」と又八郎は四邊を家探しゝた。すると喜六が又市の枕頭にある手紙を發見して又八郎に渡した。

「何んだらう」それは無理ない事であるが、開封して見ると

「高倉長右衛門は病氣保養で播州有馬へ明日旅立つとの事、今宵を逸せば時は再びめぐり來ぬ。あなた樣に代りて討ち果したく存じ、卑怯な振舞ながら舊主人高倉長右衛門どのゝ寢首を掻きに參る云々……」と認めてあつた。

又八郎は吃驚した

「喜六どの、恁うしては居られぬ。」又八郎は殆ど半狂亂になつて

「か弱き女に任せきりで、拙者は此の儘にし

て居られぬ、又市、さア父と一緒に參れ」

利かぬ身を無理に起して又八郎は這ふやうにして家を飛出した。

「とゝ樣、何處へ行くの」又市は呆氣に取られて聞く

「よい處へ、さア來い、夫婦親子三人、死ぬる處は一つ、高倉長右衛門の刃の下で……」

悲痛そのものゝ聲で叫ぶ、喜六は只呆れて止める事も忘れて見てゐた。

◈大詰　江戸高倉の家◈

高倉は浪人はして居たが奉行神尾備前守、丹波の松平若狹守侯等に武藝の講義や稽古で出入して居たので生活狀態は相當進んで居た、佐兵衛はやはり高倉の忠僕として仕へて居た。

それは或宵の事だ、長右衛門不在中突然見知らぬ闖入者があつた、至つて人骨賤しい男が、そして曰く「舊主人に殺されやうとして居る者です助けて下さい」と佐兵衛困つたが窮鳥懷中に入る時は獵師も之れを殺さずの式で匿まつてやつたが、間もなく闖入者の舊主人が駈付けて此れ又無斷で闖入し而して暴言を吐く、佐兵衛當惑一方ならず居た所へ折よく長右衛門が戻つて來た。佐兵衛から樣子を聞いて一時は嚇となつて見たが直ぐ闖入者を押へて和め、追ひ歸して了つた。が此の闖入者二人のあつた頃から庭に忍んで長右衛門の戻るを待つてゐたのは又八郎の妻すがである。男裝を粧ふて……闖入者が歸つて長右衛門が一まづ部屋に落着くやすがは忍んで來て、やがて物も云はずに背後から斬り付けた。

「無禮者、何者だ、名前を名乘れッ、」と長右衛門はさして驚いた風もなくゐた。すがは無性に斬つてかゝり遂いた「東郷又八郎と申す」と答へたが隱し切れないのは女聲、長右衛門早くも又八郎の妻すがである事を悟つたのでまづ對手の頭巾を脫して見やうとしたのでまづ對手の頭巾を脫して見やうとした。覆面の武士はそれをさせじと縱橫無盡に刀を振り廻したが、過つて已れが持つた刀で自らを斬つてばつたりそれへ仆れた所へ表から東郷又八郎が轉ぶやうにして慌しく訪れ「長右衛門在宅か、東郷又八郎だ、兄の敵勝負せい」と又市を小脇にして叫んだ。

すがは一時に氣を失つたが二人の物騷ぎに我に復り、

「あなた樣、又八郎樣、早く又市を連れて逃て下さいまし、お命が危なうございます」

絞るやうな悲鳴を揚げたまゝ靜かに絕命して行つた。又八郎は叫んだ、

「高倉どの餘命いくばくもない又八郎だ、生き永らへて苦勞するより、兄やそなたと同じやうに長右衛門の刃の下で親子兄弟四人が死ぬ、高倉どの此の親子の者の首をはねて下され」そして次第に呼吸は幽かになつて行くのだつた。彼もかなり病軀のためつかれてゐたのである、が高倉は又八郎を斬らうとはしなかつた。さうしてゐる内に又八郎は身を支へる力さへ失せて妻すがの上へ折り重なり仆れて遂に冥目した。

噫！高倉長右衛門は、親友でありし東郷茂兵衛を議論の隔異から斬つた、そして今またその弟夫婦を斬らずして死に到らしめた。長右衛門は只運命の徒らなる支配を恨み、靜かにすがと又八郎との死骸に對つて合掌した。そしていき殘る幼年又市を膝に抱いた、又市は無精に泣く、長右衛門は靜かに又市をあやしながら子守唄を唄つた。

ヘ坊やよい子ぢやよい子ぢや寢んねしや、大きうなつたら槍を立て乘り換へ駒にはあを芦毛……お供二百三十人……」と座敷中を廻り歩いた。又市は何時の間にか長右衛門の腕に抱かれた儘眠りに就いてゐた。（幕）

正しい批判を

園池公功

私は經濟學を學んだものでないから是を果して產業の合理化と云ふのか何うかを知らない。が、兎に角、今年の一月から、東京の帝國劇場の經營は松竹興業株式會社の手に委托されることになつた。從つて舊帝劇の專屬男女俳優も、事實上松竹の人となつた譯である。

一時は、帝劇女優解散などと、如何に氣の早いのが江戸つ子の性分とは云ひ乍ら誠らしく、傳える連中もあつたが、事實はそれとは逆に、大谷社長は今後大いに、女優を活躍させる意見らしい。

二月には、東京新橋演舞場に出演したし、三月には同じく明治座に出演した。帝劇では一年に女優の出る月は五回であつたから、帝劇女優生活二十年と云つても、實は中味は十年にも足りないであらう。處が今後の十年は名實共に十年となるであらう。

過去に於ては、興行と興行との間に一ヶ月と云ふものがあつたから、休養も出來たし、稽古も充分にやれば出來た譯である。處が今後、毎月の出演となると、稽古も前の樣に充分と云ふわけには行かない。從つて優者劣者の標準が、以前とは異なつて來る。今まで下づみになつてゐた者が、見出される場合がないでもない。これは我々に非常に興味のある問題である。

今度、京都南座へ女優の持つて行く

村田嘉久子

長年憧れて居た皆樣にお目にかゝります事は私にとつてはどんなに喜悦か？之れも帝劇が松竹の手に移つた爲であります。私は幼少の頃から京都の地に宿望を持つて居りました別段理由はありません、只憧れの都として、しかも私等姉妹三人が皆樣にお目にかゝれる事はどんなに私等姉妹の幸福であるか知りません。私の出演しますのは「首斬代千兩」「結婚反對倶樂部」「夕だち」ですが、結婚反對倶樂部の劇は最近珍らしくも女性許りの舞臺で觀客皆樣にもよほど多興味の感に打たれる事でせうが、至らぬ點は皆樣の御指導と御援助に縋らせて頂いて……。

初瀨浪子

山紫水明のあこがれの都！
鴨川の水に映つる繪日傘に布團きて寢たる

出し物は、主として最近評判のよかつた物と、帝劇時代に當つた十八番物である。色取り〳〵ではあるが、各々女優の特色は十分に伺はれるものと思ふ。我々は見馴れてゐるから、やゝともすると正しい判斷を失ひ易い。京都へ帝劇女優の出演するのは初めてであるから、或は京都の見物から正しい批判を聞き得るのではないかと思ふ。

——と云ふのは、歌舞伎劇に對する新派劇の女形と女優の問題である。生粹の女性である女優には、舞臺では果して女形を驅逐するだけの力がないのであらうか。

歌舞伎劇の女形と、新派の女形と、女優と、或はこれは三つの平行する線であるかも知れない。

そうして、この三つに對立するものは明かに新興演劇の女優であるかも知れない。

是は京都の新しい見物に課せられた一つの問題である。（一九三〇・三・二二）

城廓から街頭へ

櫻井悅三郎

帝劇と云ふ城廓から、松竹と云ふ街路に進出した女優の人々。其の松竹の手によつて二ヶ月間の連續興行——新橋演舞場、明治座、共に絶對的好盛況に打上げた、今又、此の花の四月といふ好季節に京都へと一同打揃つての初旅、しかも三年以前來演したきり、暫く映畫界に大統領として納まつてゐた井上正夫氏が再び異常の勢で舞臺に進出して、小堀外新派の幹部數十名の人

姿の東山の綠に、强い魅力をもつてひきつけられてゐました京都の春——。

その好時季に當りまして、此度美しく改築されまして間もない南座四月興行に、松竹興業會社の經營の許に私達、初の旅興行として出場させて戴く事となりました。初のお目見得に高い觀賞眼をお持ちの京の皆樣方の御滿足をいたゞけるかと心を痛め乍らも亦あこがれの地の舞臺に立てる悅びにいさんでゐるのでございます。今迄は舞臺の暇の暫しをぬすんでは春の花に、秋の紅葉に東都の塵をさけ古い都の靜寂を求めて、ゆつたりとした氣分にひたりたいと遊んだ事もございましたが、私の務めとしまして舞臺に登る爲めに參りますのは此度が初めてゞございます。

お馴染みも薄い上に、まして京の四月は都踊り、鴨川踊りその外數々の年中行事の賑々

々とが合同しての來演である。花の都に、松竹の名花數十名の大熱演。必ずや、我、人共に此の一座に屬望する點が多からうと思ふ。

舞臺稽古

杵屋正一郎

「いゝ陽氣になりましたね」と云ふならば、

「春のをどりを御覽になつて……」と云ひませう。それ程に春のおどりは時節に相應しいものです。誰れかが

「觀たとも、觀たともミタトモ賴朝公だ……」と洒落ましたが、春のをどりを觀た方が、恁うした乙う洒落も出る筈です。

あの舞臺と衣裳のきらびやかさ、朗らかな音樂、そして彼女等の一擧一動が整然として一糸亂れず。たま〳〵衣裾からはぎる白蠟の如き脛を見た時は

「おゝ、こんな嬉しい氣持になつた事はないね」と誰方だつて激賞するに極つてゐます。

大森正男氏が

「こんなテンポの滑らかな、そして明るいレビューは外國でも見なかつた」と云つて居ります。

更らに南北翁が相好を崩して

「儂アこんな好いをどりが出來ればもう死んでもいゝ、松竹の若い者は皆な傑いな、儂死んだら此のラストの舞臺で葬式してや、さくら葬に……」とこれまた激賞、すると誰かが「さくら草でもすみれ草でも何んでもして上げまん」なんて陰口を聞く、南北翁さくらしい眞只中に私達が參ります事は、雅の都の興趣をば害ひはせぬかとも存じますが、それは古き舞踊の粹として、これは人情の機微をうつす技として、一夕の御見物を賜りまして御批評頂けますれば今後のはげみともなります事と幾重にも御後援の程をお願ひ致します次第でございます。

河村菊江

日本六十餘州の國々の中で私は京都ほど好きな都は御座居ません、美術の發達、寺院及び、金閣、銀閣の建築美、人の美、山水の自然美、何を思ひ浮べても京都は全く日本の國寶だと存じます、右を見ても左をふりかへりても、文化々々の世の中に、ひとり純粹の日本の風景建築歴史を以て、觀光の外賓に心か

葬の御所望から察するに抹香くさいお參りは嫌ひなさうな、尤も達者だからさくら草御執心も無理ない事、歳は老つてもね……

音樂部の松本四郎ちやんは

「いゝな、とても素的だ、斷然秀逸だあゝ嬉しくなつちやつた。さア何處かへ行かう、今晩もまた夜明しだ……」

と南北翁の如きさくら草位ぢやア納まらない、どうしたつてバラの香りか、黑百合の刺戟の强い奴に觸れないと、でも世も春なら、人も春「四郎ちやん脫線しない程度にね……」

山田の仲ちやんなんかは

「何んでこんなにえゝやろ……」と、まるでお他人樣の臺詞だ。

實際、正眞正銘、掛け價なしの所立派だ、うまいものだ。

江川の幸ちやんなどは、餘りに振付けに夢中になり過ぎて卒倒しやうとした位だとは云ひますが、踊子の魅力に惱殺されたのだと云へば多少は云ひ得るかも知りません「正月や家の女房に惚れ直る」なんてこともあるから、それはいゝとして、卒倒しさうになつた幸ちやんが、シーガアーを横ちよに咬へて彼女（？）の踊りをせつせと撮影してその方にも夢中になれる人、何處を押せば、本當の幸ちやんが見られるのか見當が付きやアしない。

千葉さんは安樂椅子に倚りかゝつて只だもう「春のをどり」そのもののやうな御會心、そして「春の歌」を記憶するのに懸命、曰く「多少唄へないとカフエーで困るからね」はとんだおのろけさ。

香椎園子さんは

「わて、何んで出られへんやろ、出たいわ、出演したいわ、わて、皆なが羨しうてならん、千葉はんに賴んで帝キネと掛け持ちさして貰うかしらん」

と自分勝手な熱を吹いて涙を見せる（此の場合の涙は千葉氏を責めるの武器）ので千葉さん、仕樣ことなしに地らの滿足を與へ、外國に眞の日本の風土を紹介なし得らるゝ國が京都の外に存在して居りませうか、全く何度くりかへしても京都は國の寶と存じます、そのあこがれの都へ花咲く春にしかも自分の趣味の道の爲めに參都して未熟なれども力のかぎりを盡した舞臺を皆樣に見て頂かれます事は實に嬉しい極みと存じます、どうぞ始じめてまみえます御地、此興行の成功に終りますやう御後援を頂き度く、あこがれの都へ御住居の憧れの皆樣方へ失禮をかへりみず紙上よりお願ひ申上げます。

あこがれの都へ行くうれしさを
胸に抱きて

藤間房子

私の大好きな大好きな京都、いつぞや公會

下室の食堂へ連れて行つてテキでもおごつたかどうか、予の知る所に非らず……

私は不言實行主義である。何か云はうとすると、直ぐ皆んなに叱られるから……

「何故叱られるんだつて……」お聞きなんですか、その說明は困りましたね多分、その××だらうと思ひますが、まアはつきりしない方が花、花はいゝものです、そして今年の花のおどりは殊更に……と仰有ることでせうが

「いゝえ、そんなでもありませんよ、オホン」と謙遜してゐるのが、卽ち私の何んにも云はない主義なのです。で右に述べた事も實はその不言主義から來る漏音で、ないしよ〳〵。

善光寺行き

曾我廼家五郎丸

一九三〇年勞頭の興行を帝都に於いて蓋開けした私達劇團は、連日滿員の盛況に浴し、お陰で手元頗る順調、全く申分のない程でしたが、二ケ月に亘る帝都生活は私をしてホームシックに襲はらしめました。だが「おゝ我が故鄉！浪花よ」と悲憾してゐる餘暇も與へられず、三月上旬北陸金澤に出演する事になりました。俳優生活の悲哀でせうね。

私は二月二十七日上野發金澤直行に身をゆだね慕しい浪花の思ひ出の數々を胸に描いて混沌としてゐました。すると驚くぢやアありませんか、一座の堂で三日許り芝居をさして頂きましたが、帝劇からまゐりましたので大變にあわたゞしい旅を致しまして、其時はやはり花のさかりでしたが、花もろく〳〵拜見しないで歸らねばなりませんでした。本當に殘念に思つて居りましたところ、今度は松竹會社の手にうつりましてゆる〳〵おちついて、芝居をさして頂く事の出來るのは私として本當に嬉しい事と存じます。どうか御期待にそむかないやうな芝居をさして頂きたいと思ひます、私はまことにみじくもので御座いますから、只々一生懸命に、役々を勤めます考へで御座います。どうぞ御見物遊ばして、御目まだるいところは御遠慮なく仰せ下さらば有難い事と存じます。こうして原稿を書いて居ります間も、私の靈は京都の方へ飛んで行つて了まつて居ります。都鄙のきれいな事、御料理のおいしい事、御菓子は京都に限る事、お土產には友染を買ひたいとか、繪の樣な舞子さんの姿、金閣寺、銀閣寺、清水樣の舞臺、嵐山のほとゝぎす等々、一日ゆるりつと遊びたいなぞと、何も彼も一所にうかんで來て、一つも原稿がまとまらなくなつてしまいました、其內でも私の大好きなのは舞子さんの言葉で御座いますわ、色氣が有つて、可愛らしくて「ワテほ

女形秀蝶さんが毛布にくるまつてお控へなんです「よう！之れは秀蝶さん、貴方も此の列車だつたんですか」てな鹽梅式で、でも比較的列車は空いてゐたので樂々と席をとつて積る話……と云つた所で別にないのですが、まア冗談口を叩いて時を過ごしました。列車は寒風と闇の夜とを蹴つて疾走する。

所で私達の乘つた一つ車箱に正裝をした男女老若凡そ十五六人、勿論地方の人で國へ戻るらしい話し吻での一行を乘合せました。樣子は結婚式を日比谷か東京會館か、それ程でもないか知らないが東京で擧げてその戻りのやうでした。新郎新婦を取卷いての笑ひ興じて居る樣は私達をして陽氣にさせました。身裝から察して新郎は何々村會議員とか村長とかの苦勞知らずでせうでも農校卒位は確かです、新婦は法螺を吹けば「あたしお茶の水よ」は云はないまでもA女校卒業位は滔々述べてモダンがる風で、之れは東京人らしい明るさでしたが、却々婿どんは理屈だけはこねましたね。初めて觀た東京の所感と云つたやうなものを……「黄塵萬丈の中に在る都人エに長命者の尠なきは當然云々、されば山國の幽邃人のエ朴訥然りである……」なんてな工合に……

然し私に秀蝶さんは連日の疲勞とまた此の一行の駄辯に耳を貸してゐるより眠つた方が增しだつたので、あれでさア——何の邊でしたか、兎も角も「上田……」「上田」とけだるさうな赤帽の聲が枕元に響いて目が醒めました二十五の碓井の墜道も一睡の夢の中に過ぎたのですね、上田ではかなりの下車する人がありました。私は洗面に下りて、發車の警笛が鳴る同時に、大急ぎで飛乘りましたが、秀蝶さんは「ずほら」な私を知つてゐるためにかお辨當とお茶とを買つてくれたらしいのです。私は流石に女形だけあつて氣の利く人だと感謝し、別に之れまでの關係

んまに好きやわ」とまねて見たくても、とてもぎこちなくてダメで御座います。今度は本當に覺えたいと思ひます。私は大變な癖坊でおひる前に起きると、一日ボンヤリすると云ふ、やつかいな人間で御座いますが今度は一生懸命に、早起を致しまして出來るだけ方々見物さして頂いて、すつかり京都通になりまして、これからは年に一二度位づゝ、お邪魔をさせて頂きたいと存じます、どうぞ御ひゐきに願ます。

東　日出子

憧れの都！私の好きな好きな京都！其名を聞くだにそゞろ浮立つ心地が致します。

今回圖らずも多年の宿願が叶ひまして、南座に出演する事になりましたのは本當に嬉しい何んと愉快な事でありましよふ。

上、禮言も述べなかつたが早速辨當をパク付いた譯です。そして「秀蝶さん貝今は有難う、美味しかつたです」とやつたものです。すると皆さん意外ぢやアありませんか、秀蝶さんは、默つた儘笑ひ、先刻の新婦卽ち花嫁さんが私の身邊近くに來て疑惑の眼を投けてジロ〳〵見るのです。「變んなお嫁さん」私は恁う思つてそつと秀蝶さんの袖を引くと、秀蝶さん私話いて曰く「貴郎の今召上つたお辨當はあの花嫁さんが買つたものです、一同の方に配つた中で一人分足りないから、見に來たのですよ」と。

さア、私は赤面どころぢやアない窓から飛下りたい位でした。然し秀蝶さんも秀蝶さん一言喰べる時に云つてくれゝばこんな恥は搔かないものを自烈つたかつたが後の祭り、どうにもなりません。仕方がないから長野で下車する事に決心して、驛最近くなると同時に右の一行の內の一老人を呼かけて「どうも失禮しまして、之れは辨當代ですと五十錢銀貨一つ渡すが早いか車箱から飛出ました、驛の前に來てホツと一息安堵するやまたも、右の一行もぞろ〳〵改札口から出て來たのにはいやもうヒヤ〳〵して腋の下は汗びつしより私はタクシーで這々の態で善光寺へドロンしましたが雪國で名代の信州長野は、二月と云ふに、どうして六月土用の暑さでしたよ。

麗人の春

倉田啓明

春のおどり、おどりの春の四月、道頓堀に歌舞伎のないのは聊か寂しい氣

尤も確か一昨年の春、櫻花咲く矢張り同じ四月でありましたが、大阪の或る保險會社の御招待で彼地の公會堂へ出演致しました折に一日御當地の公會堂でも、喜劇を演じさせて頂きましたが一座揃つての出演は今度が初めてゞあります。

素より未熟の私共の藝術が皆樣方の御意に召すかどうか、いとゞ不安に戰いて居ります東路へよき土產の出來ます樣一重に皆樣方の御贔屓に御縋り申上げます。

村田美禰子

この度彌生の京都へ初御目見得致します事は、私の常に期待して居ります處で誠に嬉しく存じます。

御當地にて御高覽に供しまする出し物の內

もするが、第一劇場が續いて浪花座に據り、新作を並べて氣を吐のは先以て結構である。

仄聞するところによると脚本が二つまで大阪城に於ける女性の大立物「千姫」と「淀君」いづれ劣らぬ妖艶な傾國の美春らんまんの誇をこゝにも見せようとか前者は小山内氏の舊作、後者は三上君の原作で一部は發賣禁止に會ひ世評を高めた大衆文學、先頃東京で帝劇の女優達が演じたことがあつて興行政策としてはまづ〳〵百パーセントに近いものか。然しこの「淀君」も流行の映畫式レヴュウ式に舞臺面澤山のぐる〳〵廻り時代の尖端を行くとかのテンポの速い演出では少々呆氣ないが勿論眞價は見た上での事、今は例に依つての老婆心とやら。

さて淀君にしろ千姫にしろ史によれば當時無双の麗人で、淀君は石田三成や大野治長とたゞならぬ仲らひであつたとか浮世の稗史野乘に、道ならぬ艶聞を傳へられてゐるが、もとより正史の上では信ずべき證憑もなく、我等見たわけではないから事の眞僞は保證の限りではないが、何がさて豐家大阪方の記錄は敗者の悲しさ、德川のために都合の惡い點は盡く湮滅され、惡しざまに舞文曲筆され、當時の眞相は甚だ捕捉するに苦しむ。恰も明治維新の歴史が薩長の手になつた我田引水が多く近頃まで幕府方の小栗上野の如き偉人が、野州烏川で首を刎ねられ犬死を遂げたまゝ世に出なかつた例もある。然るに秀忠の女、秀頼の室であつた後の天樹院卽ち千姫には、吉田御殿の亂行の傳說が殘つて「吉田通れば二階からのぞく、しかも鹿の子の振袖で……」と云ふ時花唄は人口に噲炙してゐるがまさか千姫が鹿の子の振袖姿で、道行く美男に秋波を送つたわけでもあるまい。けれども傳說にあるやうな亂行を敢行したのが事實ならば、この麗姫は殘虐性變態性慾の所有者でクラフト、

の「天國地獄」と題するお芝居は北村小松先生の傑作で御座いますが、筋は或紡績工場を背景に女工に對する待遇問題をお描きになつたもので、粗食に不滿を抱く大勢の女工の中の一人に私も扮しまして、懸命に勤めますれば何卒御觀劇の上御高評の程戴きたく願ひ上げます。

橘　薫

初めてお目もじ致します京都！

あこがれの花の都！

其の京都へ來る四月、丁度お花見月にわたし達が揃つて伺ひ、お芝居の出來るといふことはなんと幸福なことで御座いませう。帝劇に居ります頃は丸の内にとぢこもつておりましたが、松竹へ移りましてからは御當地へも今後度々お伺ひ致しますことになることゝ思

エビングの書の好材料になつたであらう。男性では殺生關白、女性では德川千姫至極興味の深い人物である。とは言へこの淫虐な千姫の亂行も果してそれほどまでに猛烈だつたかどうだか、これとても眉唾ものではなからうか。小山内氏の脚本にはこれがかなり如實に描かれてゐるので、先年東京では上演を許可されなかつたと仄聞してゐるから大阪でもカットを免れまい。

淀君も坪内博士の桐一葉や「孤城落月」以來すつかりヒステリー患者にされてしまつた。事實彼女はヒステリーかも知れなかつたが、爾來淀君といふと男蕩しで誇の高いヒステリックな女性として解釋される。洵に氣の毒千萬である。その淀君母子は落城の際、蘆田曲輪の朱三矢倉で死なず薩摩へ落去したといふ傳説もあつて、既に綺堂氏の脚本さへある。薩摩は封建時代には一種の秘密國で、一切他國人の入國を禁じ、幕府の穩密が入り込んでも再び無事に歸つたものがなかつた。その秘密國へ落去したといふのは、あながち荒唐無稽の話のやうにも聞えないが、判官義經が蝦夷へ落ちたり成吉思汗に早變りさしたり、又西鄕南洲が城山の露と消えず支那からロシアに遁走したといふ話よりも、少しは取得がなきにしもあらずだ。

冒頭に春のおどりを云々したから、序に松竹座の年中行事「春のおどり」——正しく書けばをどりだが感じがわるいからおどりとしたのだらう。それで私も松竹座のひそみに倣つておどりとかく——は年々進境を示し、歳々好評を博して行くのも祝着の至りだが、ダンスも結構だけれど、ジャパンダンスの方も、もう少しみつしりたゝき込んではどうかそれにあの長唄連中——いつものことだがどうも節附と言ひ、唄と言ひ、三味線と言ひ、頂戴出來ない。

はれます、今後ともに、どうかよろしく御鞭撻、御後援の程を伏して御願申上ます。

飯田蝶子

なつかしい京都へ。

震災の時には蒲田から逃げ出して、御地で隨分御厄介になりました、あの時の御恩は未だに忘れようとしても、忘れられません其の後蒲田の皆さんと「馬車屋の娘」でお伺ひしましたが、映畫を通じてはしよつちう皆樣にお目にかゝつてゐても、直接にお目にかゝる機會のなかつた事を、まことに殘念に思つておりましたところ今度は初めて芝居で御地へ伺へます事を、ほんとうに嬉しく存じます。

折も折、花の盛りの時節で御座いますから私の喜びは二倍にも三倍にも……どうぞお察し下さいませ。又スクリーンの上の私と同樣宜しくお引立ての程を重ねてお願申上ます。

遲日斷片

高原慶三

鴈治郎が名古屋で病むだ、芭蕉の臨終「旅に病むで夢は枯野をかけ廻る」と、旅の空に病むことは人生一脈の哀愁である。殊に鴈次郎ほどの高齢、高名なるに於て一層この感が深い。團十郎や菊五郎は東京以外、餘り旅に出なかつた、鴈治郎も今の地位、今の名聲からいつて、三都以外に出向くことはどうだらうか。

大阪の名物鴈治郎として地方の客を自ら惹きつける策に出づべきではないか。

この點に於て、あの高齢、あの高名の鴈治郎を遇する道を松竹は少し間違てはしないか、働かせるだけ働かせるのは若い賣出しの時分だ。況や去年の五月？　一銀行の預金者招待に買切られた鴈治郎を見た時、一層「鴈治郎大切」の念を強ふした。

◇

文樂は復興して以來、藝題の選擇に餘程頭をつかつてゐる苦心は見られる、この調子でゆけば、とにかく藝題珍しさに見物をつないでゆくことだらう。

殊に三月「良辨杉」と「妹脊山」と「野崎村」のとり合はせは季題趣味のお水取、雛祭、野崎參りと季節感にひつかけたのは、茶室のとり合せ以上に妙趣向だ。あの選擇は、多少俳句的な機鋒の鋭さがある。

◇

「妹脊山」の山の段は、何といつても日本の民族詩だ。萬葉集に芽生え古今集に培はれたわれらの民族的な詩的感情が舞臺的に美化された數少い戯曲的所産だ。

雛道具流す早瀬や櫻散る　　吸江

雛鳥が川瀬に立てば櫻散る　　萍水

この二句は蒼生會に於て期せずして、妹脊山を句材として、同想に陷たものだ、吸江、萍水……ともに大阪の劇通二人が同じやうな句を作つたことは興味を惹いた。

◇

四月は「釋迦誕生會」でも出るか、五月は「楠昔噺」でも出るか、

春の野球シーズンがきた、關西劇界のベースボールマン、阪東壽三郎が甲子園通ひの日が近づいた、そうして男女の双ヘキといつてよい映畫の伏見直江と一緒に平安中學のために伊藤投手の一投一球にデリケートな感情を動かせる春がきた。

帝劇女優の出演

宇野四郎

一　帝劇女優を語る

四月、日本の代表櫻花が古典的な笑顔を見せる。

四月、帝劇女優が關西にその美しい容姿を咲かせる、計らずも櫻花と時を同じくして。時ならぬこの花――これぞ大松竹の偉力によつてもたらされる關西劇界への春の挨拶である。兎に角、機を得て帝劇女優の一團が大擧して關西へインヴェードするのは近頃にない欣快事である。とりわけ京都は初出演の地である。

帝劇女優が生れてから軈ての事――大分久しい以前です――大阪へ出演した事があつた。粂八一派の女役者と川上貞奴の外に女の俳優を見出せなかつた頃、帝劇は新しく「女優」を育てて社會に話題を投げ與へた。當時の尖端的女性であつた所の帝劇女優は、その頃呼び傲された「新しい女」の一つの象であつたらう。彼等は舞臺に於ては唯健やかにのんびりと慈しみ育てられる幸福を、自由に呼吸した。彼等の舞臺は五月の果物のやうに新鮮であつた。健康が躍つて居た。眞夏の海のやうに潑溂として居た。そして可憐なその舞臺には誰しもほゝ笑まずには居られなかつたのである。可愛い箱入娘！　大阪の好劇家の眼には先づさう映じたであつたらう。

爾來――この所十數年相立ち申候――因習の殼を破つて飛出して「日本最初の女優」としてトップを切つたゞけに彼等には舞臺以外に苦勞が多かつたらしい。併しそれだけに人間としても鍛へられて舞臺に好い結果をも生んで居ようと思はれる。今日までお下げ、桃割れの頃から手を握り合つて來た第一次の帝劇女優村田嘉久子、初瀬浪子、河村菊江、藤間房子――今度關西出演の諸君は、此時過ぎ來しかたをふり返り大阪出演を懷かしみ、感慨これを久しくするものがあらう。

併し、時間はこれ等先進諸君に技藝を與へた。その進歩熟達を賞した。箱入娘の殼を脱して劇界に一勢力を作して居る事は茲に擴聲して申し上げるまでもない。

この先進諸君のあとを追つてゴールめがけて躍進を續けて居る帝劇女優の中堅とも云ふべきひと達が居る。東日出子、村田美禰子（嘉久子君の妹）橘薫の諸君がそれである事を忘れずに申し上げて置かう。そしてこれ等中堅諸君へ追ひつくべく、一番あとからテープを切つて出て、驀進する美しい一叢の花を見出されるであらう。その後進女優の中から今度は村田竹子（嘉久子君の妹）明石久子、小村京子、中島初子、草間錦絲の諸君が來演する。

帝劇女優――そこに香り高い實もあらう、風味佳いそれもあらう。艶麗な色の漂ふ花もあらう、匂ひ薫る花もあらう。夫々の風格風韻を傳へるであらうし、斷然全體としての美しい技藝とその力とは舞臺に漲るであらう。

期して待たれたいと申し上げたい。そしてこの意義ある「春の挨拶」を快く御受けありたい。そして更に此際帝劇女優の京都出演に對し、一層の御後援と御吹聽とを冀ふ次第である。

四月の京都の地に幸あれ。

二　「首斬代千兩」「天國地獄」

「首斬代千兩」は眞山青果氏の近頃の力作である。これよりさきに發表された「江藤新平」の終曲とも見るべきものである。堂々四つに組んだ芝居だと評した人もあるが、これは蓋し適評であらう。この點、普通見られるフィナーレとかエピロオグなど、大いに趣を異にして居る。

第一場の佐賀縣廳の一室である大久保の室では、大久保卿と河野敏鎌との、次の場へ誘導する說明的で而も直題的の前奏である。なか〳〵の難曲だ。大久保の亢奮した饒舌?、長いレシタチボ、アリア。併し加藤精一君のそれは東京の初演では見事に成功した。その時の疲れた夜の闇から活々した朝への照明は和田精君によつて巧妙に表出された事は伊藤熹朔君の裝置と共に忘れまい。

第二場の臨時裁判所の法廷の場でも裝置と照明とはぴつたり呼吸の合つたヂュエットを見せた。こゝでは江藤と河野との息もつがせぬ競奏曲だ。名手井上正夫君の江藤、新進市川八百藏君の河野。東京に於る昭和五年劇壇劈頭の熱演であつた。推稱すべき勞作であつた。

今度は河野を小堀誠君が演ずる！、新劇に於て頴才を示す小堀君、必ずや獨自の境地を以て之を演じ表はす事と信ずる。

片唾を呑む芝居、手に汗する芝居、思はず舞臺に向つてからだをのめり出す芝居、熱と壓力と牽引とを感ずる芝居である。

北村小松君の力作「天國地獄」は東京に於る三月劇壇を斷然抑へた。劇評家は擧つて賛辭を送つた。

今度は北村君の作を補つて幾分人情劇として上場される事になつた。

帝劇女優はその舞臺に熱が乏しい、力が弱いと云ふひとがあつた。併しこの芝居では驚くべき熱と力との舞臺を展開してそのひと達の言葉の誤を訂正した。演出者である自分は、尤もそれ等の點に於て努力した甲斐のあつた事を、それに成功した事を、心私かに欣快として居るものである。

「雪の降る夜」「夕立」でその悲劇的な纖細な技藝を女優は表出し、女優獨特とまで稱される喜劇的才能を「結婚反對倶樂部」に表現すると同時に、力强い熱技を示す機會を茲に得たのは有難い事である。

井上正夫

兩千代斬首

しばらく舞臺から遠ざかつて映畫の方にゐましたが、今年度からは再び舞臺の上で努力奮鬪する覺悟でをります。

劇といひ、映畫といひ私の精進には變りありませんが、矢張り舞臺劇の方が、私にはピッタリとした感じが自分自身にします。

よく劇と映畫とどちらが俳優として其の演技上に苦心を要するかとの質問を受けますが、私は何時でも、どちらも難しいと答へてゐます。事實、兩者共に各々其の特長を異にしてゐるのですから、右を左に、左を右に置き換えただけで直ちにそれが同一のものであるとは肯けません。左に置き換えるためにも、右に移すためにも、何れにしても相當の理由をつけねばなりません。其の理由が困難なのです。私は撮影の時には、人一倍の努力をしてゐます、といふのは私が舞臺劇から踏み出した俳優だからです。努めて舞臺の癖を出すまいとは注意してゐても遂ひ無意識のうちに出てしまひます、これが映畫の方での私の最大の惱みです。

そこで芝居に出演する際には、漸く本來の自分にたち返つたやうな心安さで、樂々と演技することが出來ます。此の點からだけでも、矢張り私は舞臺の上で働くのが最も自己を活かす事になります。

今度三年振りで京都へ行きます。然も京都へは初出演の元帝劇女優の方々と一緒で非常に賑やかな一座です。女三人よれば姦しとさへ云はれるのに、一座の大半が女優ですから、どうかよろしきように御想像下さい。定めし京童をアッと驚かすことでしようが、いとも優しく美し

き女性ばかりですから、決して皆さんを取つて食はふなど、云ふ危險性のないことは私が充分に證明しますから、どうか安心して賑々しく御觀劇下さい。

此の女優澤山の一座の狂言の中に、女はそれこそ話の中にも出ないものが一つあります、と同時に男の全然舞臺に登場しない物も一つあります。男が勝つか、それとも、アメリカ流に女が勝つか、どうか皆さん、公平に審判を願ひます。男の方が「首斬代千兩」女の方が「結婚反對倶樂部」

此の「首斬代千兩」は眞山青果先生が私のために書いて下すつた作品で、二月新橋演舞場に上演の際にも、絶大なる賛辭を得ましたが、もと〳〵四幕物の「江藤新平」の中の最後の一幕丈ですから、上演しない前の方を、一寸お話ししませう。

明治六年十月、參議近衞都督陸軍大將西郷隆盛、參議司法卿江藤新平等五參議は、其の提唱する征韓の議が、閣議で參議の内務卿大久保利通等のために破られて連袖辭職しました。

一方廢藩置縣の新制度によつて職を失ひ、不平滿々の諸國諸藩の士族の大部分は征韓論に共鳴して、西郷、江藤等征韓派の總辭職に同情憤慨しましたが、其の中にも江藤の同藩佐賀士族は激動沸起したのでありました。そこで或は憂國黨を組織し、或は征韓請願事務所を設けるなど、不穩の形勢は日一日と濃厚になつて行きました。

明治七年一月、江藤は佐賀縣内の情勢の容易でないことを憂ひ、鎭撫するために佐賀に赴きましたが、江藤の歸縣は却つて其の燃え盛る氣勢に油を注ぐようなもので、遂には、自身、其の渦中に引込まれて首領と仰がれ、二月十四日、擧兵するに到ります。これが佐賀の亂なのです。大久保内務卿は其の報に接すると、直ちに鎭壓の總指揮官として九州に出向きました。

江藤等は鎭臺兵と轉戰、半ケ月に及んだが、戰ひ利あらず、遂に敗れて鹿兒島に脫走し、西郷の救援を求めましたが之を得ること能はず、日向を經て伊豫に遁れ晝伏夜行、艱難辛苦して土佐の同志を頼つたが、之にも容れられず再び流浪の末遂に明治七年三月廿八日、土佐、阿波の境界甲浦に於て捕縛されました。

尙江藤新平が梟首と結審された、佐賀城内の臨時裁判所に就て、的野半介氏は「江藤南白」の書に於て左の如く言つておられます。

「此の法廷は河野、岸良、杉本等の大小判檢事、解部等を以て組織し臨時裁判所と稱して、此事件のため、特設したる點を除き、正式合法の法廷たるが如き外觀を現はすと雖も、其の實は司法以外に立ちて征討軍司令官にして、司法官——其の形式は異るも精神は然り——を兼ねたる内務卿に隷屬せる法廷なるを以て、決して合法的にあらずして、寧ろ軍法會議たりしなり。而かも軍法會議と謂はずして、臨時裁判所と稱せしは、其の組織の内部に含める性質を蔽ふ手段に過ぎざりしなるべし。論より證據、斯る大事件を僅に二回の審問に由り、法文以外の極刑

を宣告して、本事件を終結したる此の法廷の行事は遺憾なく其の實質を暴露せしものにあらざるなき歟　換言せば、臨時裁判所は當時の政府が內務卿たる大久保を通じて强行せし專制橫恣を修飾する塗料に過ぎざりしなり。

人若し被告として斯る法廷に立つに至らば、苟も常識を有する限り、有ゆる手段を以て、當時の非違のために蒙むるべき損害を輕減するの擧に出でざるはなからん。是、斯る非常の場合に於ける唯一の防禦法にして、所謂正當防衞の一手段たればなり。卽ち江藤が法廷に於ける陳述を曖昧にし未練らしき態度を示せしは政府が臨時裁判の形式を假りて暴威を揮へるに對する正當防衞の一手段に外ならず」と。

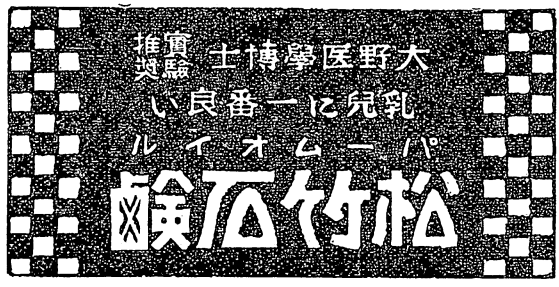
これをもつて見ても、當時の政府が如何に江藤新平を憎惡してゐたかゞよく判ります。

今も昔も、政爭の醜さには少しも變りなく、維新の功臣、明治政府創業の際の組織者であり、最初の司法卿として、司法權の獨立、民權の基礎を確立した江藤新平も遂には政爭の犧牲となつて、身首所を異にするような慘刑、梟し首にされてしまつたのであります。

餘りに正義感が强過ぎたがために、幾多の奸商、汚吏の非法を擧げ、又は權門勢家の奸曲を訐いたが爲に、時の薩長の藩閥政治家の憎怨嫉視を一身に受けて、明治七年四月十三日、江藤は斬罪に處せられたのでありますが、こゝに一つのエピソードがあります。それは當時の政府の一政策として、江藤の梟首の寫眞を全國に公然と販賣さしました。ところが東京に於て、江藤の寵を受けてゐた藝妓某がそれを知り大いに憤慨して、早速自分の財布の底をハタいて其の寫眞を買ひ集め燒いてしまつたといふことです。

餘りに江藤のことばかり書いてゐて、皆さんにエトわれると困りますから江藤の首は打斬りますが、どうか是非御觀劇の上、御批評下さいます樣、紙上を通じてこゝに重ねて御願して擱筆します。

（三、三、二三）



舞臺で終始して貰ひたい

井上正夫君

額田六福

井上君について何か書けとの命令であるが、同君の藝術については、殆ど云ひ盡され論じ盡されてゐる。敢てこゝに事新しく云ふ可き何物をも持たない。たゞ折角の御依頼に負くのも心苦しいので、ほんの少しばかり同君に對しての希望を正直に云はして貰ふ事にする。

井上君は確かに方今の劇壇の巨人である。劇戰場の一方の旗頭である。君の赴く處、いつも華やかな戰場が展開されるしかし、いまだ一國一城の主ではない。一つの偉大な惑星であるが、恒星ではない。これからさうなるかも知れぬが、今まではさうでなかつた。

君ほどの藝と人氣とを持つて、何故にさうなつたか。理由は至極簡單である。君は、あまりに度々舞臺から退きすぎてゐたと云ふ事である。

聞く處によると、君は脚本を選ぶ事について、非常に愼重で、いやしくもいさゝかでも自分に不適當だと思ふ脚本に對しては出演をがへんじないと云ふ。藝術家としてそれは非常に正しい事である。それについて異論をさしはさむ可き餘地は少しもない。

けれども、そのために、必要以上に細心になりすぎて、脚本選擇の範圍を非常に極限してはゐないであらうか。

そこで自然の勢で、舞臺へ出る機會がだん〳〵と少くなつて行くのではあるまいか。

けれども借問する。しからば、君が逃避した活動の世界は、果して悉く君の藝術慾を滿足せしめたであらうか。いや私は決つしてさうでないと思ふ。こゝにおいて、君の場合においてのみは、活動寫眞の存在は（私は活動の存在を否定する者ではない）よろこぶ可き事ではなかつた樣に思ふ。

活動へさへ行かなければ、君はいつも舞臺に立つてゐたに違ひない。常に舞臺に立つてゐれば、もつと數多くの名作を出してゐるに違ひない。勿論時としては藝や性格の上において多少の無理をして不評を取る樣な事があつたかも知れないが、一面それ丈け藝の範圍が擴充されて君の天分を一層深めて行つた事であらうと思ふ。

求むれば必ず道がある。君が常に舞臺に立つとすれば、必ず君のために新しい脚本が生れるに違ひない。かく云ふ私も今ひそかに君のため筆を執りつゝある。そして、あの本郷座の「將門」時代を懷しく想起してゐる。

（五十五頁へ續く）

井上正夫の輪廓

中井泰孝

舞臺上の井上正夫は暫く措いて、個人交際での井上氏を、最初誰でも一度は面喰ふ、惡人なのか善人なのか、氣儘者なのか嚴肅な人なのか、見たそれだけの人か、もつと奥に何かあるのか、結局見たそれだけの人なのである、至極穩健な忌味のない一種の人格者だ（一種の人格者、と云ふと妙に聞えるかも知れないが、要するに學者とか名人とか云ふ或る一つの技能に卓越した頭腦を持つ人は、必ず精神的に缺陷がある、と云つても好いほど偏執的である、藝術家は大抵此の性格に箝つて居る、生理的から見ても、限られた肉體内に散在して居る神經が、一方に太く發達した神經があれば、必ず一方に細く萎縮した神經があるに相違ない譯である、一方に超越した技能を持つ人は、必ず一方に神經の鈍ぶい點がある、餘地から見ると、一種風變りな性格に見える、之れが卽ち學者肌、名人肌と云ふ、云はゞ一種のゆかしい人格である、それを云つたのです）世間には、井上氏を酷く變屈の一徹者の樣に云ふ人もあるが、それも或る點では例の人格だとも云へるが、然し決して世間的な並な變屈や一徹者ではない樣である、あのグロテスクな顏を鏡に映して、默々と卷煙草をふかしながら、氣が向かないと、何時までゝも默りこくつて、自分の顏と睨みつこをして居る、その態度が如何にも氣むづかしやに見える、だがいくら默然として考へ込んで居たつて、毛頭彼の胸中天下を取ろうの、一億萬圓の長者になろうのつて云ふ野心家でない事は確かである、何か面白い話が耳に入る、一分間も過ぎてから、やつと話の面白い意味が判つた樣に、大口を開いて例の放膽な笑ひをする、私はそれがひどく好きだ、恐らく誰でも彼と少し長く交際つて、彼の性格を呑み込むと、その笑ひが妙に感じよく聞えるに相違ない。

そう云つた風に、俳優としては珍らしく飾り氣のない、極めて正直な一本氣な人だ、だから世渡り用のお世辭なんてものはちつとも持ち合はして居ない樣である、得て世間から一徹者と云はれる所以だらう、時に放膽に見えて、決して怠惰者でなく而かもする通りの事だけは、どうでもしなければ氣が濟まない投げ鎗とか仕事を半端にして置く、と云つた樣な輕業は毛頭出來ない人である、どうかすると座布團のゆがんで居るのが氣になつたりする樣な神經質さもある、得て世間からは井上正夫は氣が小さいなんて惡口される點だろうと思ふ。

彼の性格上勿論進取的な潑溂さはない、卽ち人を搔き分けて進出しやうなんて活動的な氣持は、よし、持ち合せて居ても、それを出し得ない人である、それが此の人の好き長所であつてまた惡い短所とも云へる。

彼が仕事の上には、よく新派俳優に見るお先きの知れた偏則

な華かさはないが、滋味で危なつかしくない土臺を持つて居るだが時として、それが稍もすると引込思案に陷る場合が往々ある樣に思ふ、私は常に同氏の爲に惜んで止まないのは、勿論偏則な華かさを飾れと云ふのではないが、と云つて餘りに大事を取り過ぎて、凝つては思案に能はずして陷る事をである。

さて、舞臺上の井上正夫を、今更うまいとかまづいとか云ふ愚評は止そう、俳優は常に推移に順應して行ける俳優は長壽でもあり、從つてうまくもある譯だ、その點で彼は新派中に唯一人超然と出色して居る事も、今更物々しく云ふ迄もあるまい。

此れを頭腦の問題とすると、彼の後輩には彼よりも頭のある新人も居るし、中には系統的な學問を修めた俳優も澤山居る、そう云ふ人は無條件で、彼より一歩も二歩も前に、新しい芝居をして居る筈だが、そうばかりは行かない、中にはつまらない新派の中に落ち込んで、磨いた頭も、修めた學問も、から臺なしにして居る人も少なくない、だから結局彼をして時代に伴ふて進ませて居るものは、要するに彼の眞面目な努力に外ならないのである。

彼は先づ芝居を出すとなると、その出し物の撰定に、人一倍頭を使う、さて稽古に入つたが最後、所謂寢食を忘れて猛烈に突進する、そうなると彼はまるで常日（ふだん）とは別人の樣に猛り狂つて居る。夜中でも氣になり出すと、むつくり起き上つて稽古を始めて家人を驚かす事も少なくないそうだ、演出監督の指揮に忠實なことは勿論だが、少しでも自分の腑に落ちないと、落ちるまでは猛烈に追究して行く、會ふ人毎に自分の演技に就て批評を仰ぐ、意見を叩く、書生や番頭の言葉にも眞劍な眞面目な耳を傾ける、此の點が他の俳優と心の措き方が大分違つて居る樣だ。どうかすると、業に今日と明日との間に時の推移のあることを知らず、偶々他人から意見でも云はれると、宛然自分の素晴しい技能を傷けられでもしたかの樣に、頑迷不律に舊態？を固守して止まない、俺は舞臺に立つて何年間の長い經驗を持つて居ると威張つてゐるのがある、要するに彼等は長い舞臺上のアな經驗に依つて能事足れり、俺の藝當は正に完璧だと心得て居る、今日の自分の藝は明日の藝には役立ないと云ふ事を知らない彼等である、眞に憐む可くも淺間しい人達である、そう云ふ不心得の人も可なりたんと居る中に、年數から云ふと、そろそろ元老株に入る井上氏が、超然新進を凌いで、新しい言葉で云ふとその尖端を歩きつゝあるのは、云ふまでもなく、一度舞臺に立つに當つて、心の措き方が違つて居るからである、卽ち絶えず新しいものに觸れやうとする一生懸命の努力と、時代思潮に順ずる航行術の熱烈な研究があるからである。（完）

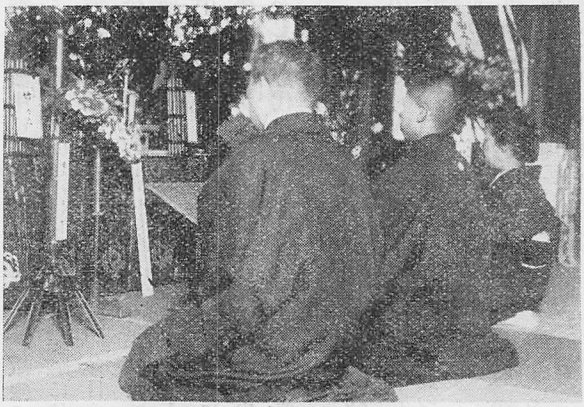
（五十三頁の續き）

舞臺一途、一元的の生活に戻つて貰ひたい。それが私の同君への唯一の希望である。否、多くのファン達の希望であらうと思ふ。妄言多謝。

（三月廿日記）

日本映畫の海外進出

日本映畫の海外進出は松竹キネマがそのトップをきつた。最近のニュースによると獨逸伯林一流の封切館たるウフア・パビリオンに於て三月上旬より岩田祐吉田中絹代主演の「樵夫彌吉」三週間續映のレコードがある。日本映畫の前途や大いに期待すべきである。寫眞はその當時のパンフレットを復寫したもの。



越路太夫の追善法要

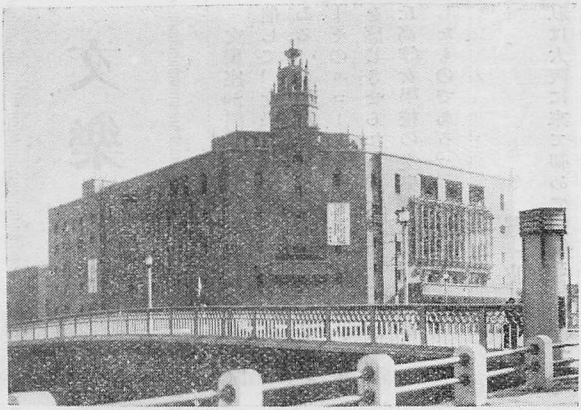
二代目竹本越路太夫の七回忌法要は、去る三月十八日午前十一時より生玉中寺町の清恩寺で營まれた。式は導師杉村玉童師によつて始まる、來詣者は白井松竹社長、福井同常務を始め文樂座では津太夫を始め各太夫、三味線人形遣ひ等全部出席、珍しいのは歌舞伎から實川延若が參列した事で施主はさの太夫であつた。

紘阿彌七回忌法要

豐澤猿二郎施主となり名庭紘阿彌の七回忌追善法要は去る三月十九日正午から谷町八丁目久本寺に於て營まれたが主なる參列者は白井松竹社長、同福井常務始め友次郎、津太夫、土佐太夫、古靱太夫、道八、吉兵衞、文五郎、榮三等に生前の知己淨瑠璃愛好者の顏も多く見へて賑やかであつた。

竣工した東京劇場

三月二十九日開場式を擧げた東京築地萬年橋畔の東京劇場は愈よ四月興行を舞臺開きとして開場する。初興行の出演俳優は羽左衛門、梅幸、菊五郎外音羽屋一門總出の大歌舞伎で狂言は一番目「義經千本櫻」二幕、中幕「色彩間苅豆」所作事「京鹿子娘道成寺」二番目「江戸育御祭佐七」二幕、尚「東京劇場」とネオンサインで浮出した光景は品川沖から望見し得ると。



床次氏の文樂見物

なんぼ政界の巨頭でも總選擧にあつてはかなはない。政友會顧問の床次竹次郎さんもやつぱり總選擧にたゝられて東奔西走した人だが、この頃では漸く肩荷も下りたと見へて好きな文樂見物を夫人と御一緒に利用し三月廿八日東京歸途を片手に恰も議會觀賞した、同氏は人形を殺する樣な表情で政策事項の質問でも種々白井社長に質問の矢を向けてゐた。

團平忌賑ふ

名人團平の三十三回忌、及び加古千賀女の三十七回忌を去る四月一日阿部野墓地に於て行はれた。來詣者は自井松竹社長始め太夫、佐太夫、古靱太夫その他各關係者三百餘人、そのの中一人中村源次郎氏が見へてゐたこと。當日の導師は曹洞宗禪林寺佳職谷根道琳師である。

文樂座の印象

文樂座が開場した一月にマチネーを開催して、女學生徒に鄕土藝術を紹介してゐる。女學生は人形淨瑠璃をどう見たか—そのエコーとエイクラにはかるい興味を感じさせられる。次に掲げたのは夕陽丘高等女學校の文樂感想集からセレクトしたものである。

五冬　灘波富子

私は大阪に來て初めて文樂を見に行つた。建物といひ中の樣子等大阪獨得の大阪らしい感じがして他の物等と比べものにならなかつた。

文樂といへば淨瑠璃にあはせて人形を人と同じ樣に動かすのだと聞いてゐた、私は人形をどういふ風におどらすのか不思議でならなかつた、實際に見てみると話よりはずつと上手でどういつたらよいかわからない、あの人形をよくもあんなに上手に動かすといふ事は私には到底出來ないであらう、だから感心するより外はない、先代萩にしろ中心人物である政岡等としてもうまい表情をしてゐる。三番叟でも萬歲等大變面白かつた、よくまあれだけ人形で表情が出來るのかと思ふとおどろき又人形を使ふ人の苦心が思はれる、何もしないものもあれまでさせるといふ事は容易な事ではあるまい、淨瑠璃はラヂオでよくきくけれどもわからなかつた。文樂の淨瑠璃を聞いてゐると、よくわかる樣になつて面白くなつた。日本の音樂を一つ理解する事が出來る樣になつたのでうれしい。

先代はぎの少しの場面の中にでもぎせい的感情や愛情がよくみなぎつてゐる。

文樂をたゞ誤樂的にだけ見るのでなくて、名高い大阪のものとして私達は理解しておきたいと思ふ。

五夏　平野美子

先づ文樂座に入つた時その建物からは如何にも人形淨瑠璃をする場所らしく、日本的の或る落付きをあたへてくれると思ひます。さて人形淨瑠璃そのものについて云へば、人形のあつかひ方の巧妙さにおどろかされます、側で語る人の言葉に合して非常に細かくゼスチュアをする事は驚くばかりです。普通私達が考へつかないような微妙な事でも總て、身振で人形自身が眞に語つてゐるようにあやつられてゐるのに感心しました、しかし始めの中は人形使ひの人の手が人形のたもとに入れられてゐるのを見た時、何かしらおかしな感じがしました、でもぢつと見てゐる中に、とても人形とは思へず、人間がその事柄に直面した時の身振と動作と表情を少しのうしなふ事もなく、人間そのまゝに表現されてゐるのは眞心がこもつてゐる故とでも云ふのか本當に遺憾なく現ばされてゐると感心しました。

語り手について云へば、その堂々たる純日本式の聲の出し方に徹底してゐると思ひます又三味線の音は何とも云へない、いゝ澁味を持つた音色が出てゐると思ひます、普通の洋風の樂器からは到底受けることの出來ない、美しさ、澁み、など日本人にふさはしい、日本人の最も好む種類の美しい音色だと思ひました、人形使ひ、語り手、ひき手、は別々のものではありますが、皆一心同體になつてする事によつて、此三拍子そろつて美しい立派な淨瑠璃といふものが織り出されてゐるのだと思ひます。

出し物について云へば先代萩は昔の忠勇なる婦人と人間味のあらはれでありますが、あの千松が殺される所など余りにむごいのでぢつと見てゐることは到底出來ませんでした、余りむごたらしい殺し方ではないでせうか、しかし政岡が人のゐなくなつた時我が兒の死體に取りついて泣く所など人間の弱み、人間性を充分よくあらはしてゐると思ひます、あの邊の語り方も非常によく出來て、人形の身振と共に涙なしでは聞いてをられない程よく出來てゐます。

三番叟では人形のあやつり方の功みさと、三味線の撥のさばきのあざやかさに感心させられました。

最後に不快に思つた事は語り手、人形使ひに不熱心な時のあつた事を深く感じます、語り手では交替で歌ふ時、其場にゐる總ての人は緊張して見もし、聞きもしてゐるのに歌ふ番でない人が笑つてゐたり、人形使ひの方では政岡が我が兒の死に對してやるせない、くやしさや、我が兒の死に方について感きはまつてくどいてゐるのにその人形を使ふ人が笑つて居られたのは本當に不快に思ひました。

四夏　安田美代

トヂン〳〵〳〵樂屋の方より流れ來るかすかな太鼓の響き、夢の中で聞いて居る樣な音だ何とも云へない神祕な感じがした。

場内は靜かになつた。なほ續く太鼓の音。今しも私共の目前には、我が大阪の世界にもほこるべき鄕土藝術が展開されようとして居る。未だ見ぬその美しさ。心は躍り眼は舞臺の幕の方へと集る。カチ〳〵拍子木と共に幕は上り、舞臺の横よりは力强い澄みきつた三味の音が流れて來る。人形は出て來た。明るい舞臺は「加羅先代萩」だ。お人形の美しい顏、美しい手、すべてが優美な姿だ。歌詞に合つた上手な表情、たくみな使ひこなしにたゞ一心に見入るばかりだ、次は「壽式三番叟」だ。前にも增して明るい舞臺、目出たい歌詞流れ出る三味の音につれて美々しく着飾つた人形は自由自在に舞ひ出す。とても人形とは思へない、人間でもあんなに上手におどれないのに。日本のみにあるものなのだ。神國の我々のみにあるものだ、更に萬歲と才藏が現れ出て目出度舞ひ納めた。たくみな顏の表情には思はずほゝゑむ。

愛する兒がなぶり殺しにされて居るのを目の前に見て涙一滴落さぬ乳母政岡の心を思ふ時、泣かずには居れない。しかして日本婦人の美德の義理と人情とをよく辨へ、何處迄も心の中は强く、といふ事は時代の古い新しいにかゝわらず、同じであつて永久に變らないのだ。

身も魂も盡く自分の藝術に打ち込んでこそ眞の藝術、最高の藝術となるのだ。淨瑠璃をかたる人も人形をつかふ人も全力をつくしてこの世界に誇るべき藝術を生み出して居られるのだ。尊敬の念を起さずには居れない。

古典的なこの芝居と、近代的なあの建物とがよく調和して一層立派な感じがする。何時迄も此處に居たい。

場内より一歩外へふみ出すと世はスピード時代で文明の利器たる自動車、電車が忙しく走りまはる、時々はあの樣な靜かな昔にかへつた樣な境地に入る事も必要なことだ。

そして我々平民は歷史ああの人形芝居を此の後如何に世の中が進んでも完全に保存してゆかねばならないといふ事を强く感じた。

三春　山田ノブ

私達の持つ、唯一の鄕土藝術で有る古雅な人形芝居の存在の昔から長く續いて、今も猶昔の儘の面影を此の大阪の中心地に留めて居ると云ふ事は誠に私達にとつての大きな誇となるものでせう。

西洋の物質文明にのみ取らはれて居た私達の眼には、古日本の最も發達した藝術が深く

身に感じられるのです。歐米諸國の輕薄な利己的な精神は微塵もなく、獻身的な武士道の表徵とも云ふべき、此の義太夫の筋道はよく精神に一致した處が日本國民の賛同を博したのであらうと思ふ。

社會の醜くき反面のお家騷動を背景として其處に忠節な政岡の主家を思ふ心と、母性愛との窮地に陷りながらも、愛しき我子を犧牲にまでして忠義を盡す等、巧に織り込まれて私達は涙ぐましき感激を受けました。

そして人形使ひの巧妙さに一擧一動にも神秘な而も人間としての情の溢れが遺憾なく顯されてゐると思ひました。

此の文樂座の人形芝居が永く後世までも傳へられて、日本の古藝術としての昔の名殘を留め武士道の精神を發揮して外國人までにも知らしめたいと望んで居ります。

三　秋　山崎昭子

文樂々々と前から母達の間でよく言はれてゐたけれども、私は其の文樂とは唯人形といふ丈で、其の「人形」の先の言葉も知らない位だつた、其の文樂に今度學校の生徒一同と一等席ともいふべき場所でゆつくり見られた事を大變嬉しく思つて居る。又其の見る人が學生ばかりなので、少しも下品な所はなく、學校の講堂で面白い講話でも愉快に聞ゐてゐる時の氣分ともあまり大差はなかつた。先代萩の政岡の「君に對する忠義の心」「母性愛の念」の强固な其の志が假令人形でも充分に私達に汲み取らせてくれた。政岡が子の仇敵を打殺す所等は、もう夢中で心も何もかも夫に吸ひこまれて、實際の場面に面して居る樣だつた。三番叟の狂ひ廻つて踊つて居る邊り、一つの人形に三人ついて居るのに三人の心がピツタリ合つて一つの人形を生かして居る、其の動作の機敏な事うまく一致する事等はこれも文學生の團體生活に必要な事である。其の事が一つの人形の動作によつて充分表はされて居た。其の他何一つとして珍しくないものは無く、又よく考へれば總べてが利益な物だつた。

今日の文樂によつて大阪の名物を見る事が出來、又精神的方面にも隨分好果があつたと思ふ。

二　春　藤井幾子

文樂人形淨瑠璃とは一體なにであらう。

私は多くの興味をもつてこの芝居をみた。

これは淨瑠璃と三味線と人形、この三つが綜合されてゐる。又これは日本の一つの古典藝術となつてゐる。そればかりでなく日本の昔や歷史、風俗習慣もうかゞはれる。私達の見た「伽羅先代萩」その主人たる乳人政岡の行ひは、その精神は、私達の大いに學ばなければならない所だ。私達はこの文樂座で何を學んだらうか。第一に人形が上手に遣はれたのに驚いた。だん〳〵熱中していくに從つてもうそこには人形が動くのでなく、實際の政岡鶴喜代君、千松あるのみだ。

動作に一つも人形らしい所はみえなかつた千松の忠節、又母政岡の誠忠それによつて惡人こと〴〵くわかりお家騷動も解決する。やつぱり惡は善に勝てない。

惡のみなぎつた鶴喜代君の身邊それをおまもりする政岡、つらいかなしい事をきりぬけて困難に打勝つて行く雄々しくもあはれな政岡の心中。

後々の世までうたはれる御殿の女丈夫政岡それはかならず人々の胸に何かあたる物がある。

一　夏　山畑嘉津子

押し合ひへし合ひながら私達はやうやく規定の場所に着きました。一年と五年はお二階の特等席でした。三木先生も内田先生も大茂先生も皆私等の直前にお座りになりましたので何となく嬉しく思ひました。幕の開かるゝまで三十分程ありましたがその間三木先生にハンカチでお人形を造つて頂いたりお友達が手袋でタスキをこしらへたりしなさつて幕の開くのを待ちました。

チョン〳〵〳〵樂しんで居た。先代萩の幕が開きました、御殿の場でした、津太夫とか

いふ方の文樂と共に人形芝居が始まりました始めから終りまで手に汗をためて熱心に見入つて居りました。どの人も此の人も皆そうでした。私は小さい鶴喜代君が下々のものを愛するやさしさと政岡や千松の主人に對する忠義な心、見てゐる私までほんとうに嬉しいでした。それから三番叟も神々しくて無邪氣な萬歳も面白いでした。

あたりの空氣もお家からお母様等と一緒に來た時よりずつと靜かでずつと皆がお行儀もよかつた樣に思ひました敎護聯盟の方がそばにいらつしやるといふので、皆が氣を張つて居るからだと思ひます。

一夏　友眞わか子

文樂座。私は文樂に急ぐ途すがら、文樂とは一體何んな所だらう等と思つた。心の中に盛り場の芝居等をする家を思ひ浮べながら……。

佐野屋橋に着いたのは、もう定刻の九時にきち〳〵だつた。文樂座は案に相違して日本風ではなく立派な洋館建であつた。

十時、待つてゐた加羅先代萩の幕があがつた。美しく着飾つたお人形、全體の割に顏の小さい可愛いお人形だつた。私も一度自分の手であの樣なお人形を抱いて見たいと思つた私はそのお人形を見る前まで、もつと大きいお人形かと思つてゐた。若し私の考へてゐる樣なお人形だつたら、一時間も二時間も抱いてゐねばならぬのですからそれではお人形を使ふ方が堪らないのだろとも一人苦笑した。

時間は休み無しに過ぎる時の立つのに從つて愈一心に舞臺を見つめた。見つめずにはゐられなかつた。千松の健氣な行ひ私は本當に心を動かされた。未だ幼いのに中々大人も及ばぬ健氣な言分これも忠を思ふ心ある故に、鶴喜代君の犬になりたい等と、無邪氣な然し本當の心から出たその言葉にも涙を誘はれた千松の最後、これは實際涙ぐまずには見てゐられなかつた。

豫定の時刻午後零時半無事終了した。私はまだ半分お芝居の事を考へてぼんやりしながら歸途についた。

本當に爲になる然も面白味のある今日のお芝居だつた。私は今日半日を有効に過した事を大變嬉しく感じた。

一春　森田和子

私は常々からおばあさんからよく文樂座の人形芝居のお話を聞きましたが實物を見るのは今回始めてでございます。

それに今度は新しいのが建つたので一度見にゆこうと思つてゐました處丁度大阪府敎護聯盟主催で見せていたゞく事になりましたのでよろこんでまいりました。かねがね聞いて居りました事は淨瑠璃といふものは藝術の司であるといふ事であります。今回始めて私が見物しまして全く感心したわけであります。

文章を作つた人。語る人、三味線をひく人人形をあやつる人が誠に生きた人間がうごく如くに四つの人が一つになつて始めて藝術味を發揮して居る事が、成程我が國藝術の司であるといふ事を證明出きたのであります。淨瑠璃にもいろ〳〵の種類があるようでありますが私が拜見しました先代萩の正岡の忠僕なる事は古今通じてあれ程りつぱなお話はないと思ひます。男なればいざしらず婦人としての忠僕な事は全く我々の人位を强くするやうに思ひます。

一、我が子を殺してまで主人に對して忠。

一、我が身をすてゝ主家に對する忠。

いずれより見るもりつぱな行爲であると思ひます。

次に人形づかひについてます〳〵感じを强くしたのであります。

空腹の時の態度、かなしき時の態度。

又よろこばしき態度。土で造つた人形がかくまであざやかに人情をあらはす事の出來るのは人形づかひの精心が人形そのものになりかはつて動かすからであると思つた。

誠に感じたわけであります。

かゝる藝術は我が國に於て獨占するよりも世界人類のために廣く見せて上げたいと思ひました。

劇壇往來

曾我廼家五郎劇

——中座——

四月一日初日
午後五時開幕

【狂言】第一「尺取虫」一場・第二「かげぐち」一場・第三「初戀」一場・第四「黄金の雨」一場・第五「春の宵」二場

【配役】縣の友人須藤楠松、磯のお秋、坑夫頭剛田良助、熊吉女房お久(五郎)お三の父芳兵衛、請負師縣正三。娘お春、亭主利助、大工酒井熊吉(蝶六)女房お三、請負師妻お花、女房お浪、酌婦お澄、紳士山川(大磯)辯護士宮松正一、畵家島田豐仙、本田新兵衛、佐官棟梁今井宗兵衛(小次郎)牛乳店太兵衛、お花の父治兵衛、漁夫荒磯の清太、坑夫金助、橋本丑三(一朝)お咲の父熊吉、八百屋の辰三、湯淺太郎兵衛、お澄の父由茂、番頭平七(五樂)車夫の源助、島田の妻春子、堀子の源太郎、女將お倉(林蝶)實業家池田、ペンキ師政吉、支配人井上廣吉、事務員甲田、春日芳次郎(時雄)令孃文子、本田妾つゆ子、酌婦のお米、藝者万竜(秀蝶)肴屋の久七、隱居神田清左衛門、村長今村治兵衛、事務員山本、棟梁佐伯伊兵衛(時右衛門)太兵衛女房お咲、藝者駒千代、女中お竹、女房お六、女給の玉子(時和)久七女房おきぬ、會社員原田仁三郎、漁夫なまこの佐太郎、堀子市助、仲居お梅(五郎丸)小使、青年團長原田保、坑夫銀茂、觀櫻客の軍人(蝶太郎)下男太八、漁夫蝦の久助、堀子仁茂、若者甲(笑將)百姓作三、曳網の喜八、坑夫砂三、觀櫻客の老百姓(宗蝶)下女お竹、嬶のお市、酌婦のお花、丑三女房お辰(桃蝶)

第一劇場

——浪花座——

四月一日初日
午後四時開幕

【演物】第一、三上於兎吉原作・田中總一郎脚色「淀君」三幕十場・第二、佛蘭西ラビッシイ原作、關口存男教授譯補「色氣ばかりは別物だ」一幕・第三、長谷川伸作「疵高倉」三幕五場・第四、青江舜二郎作「人氣投票」五景

【配役】石田治部少輔三成、高倉長右衛門、家主加川豐治(藤三郎)淀君、高倉の姪まさ琵琶の女師匠(三好)檜垣の局、倉吉の娘つね(若宮)おまんの方、加川の妻りつ(六條)浦の局、加川の女中(香取)侍女楓、又八郎の妻すが、倉吉の妻とめ(石河)木村常陸介、ペンキ屋館野倉吉(藤村)石川五右衛門無德道人、東鄕茂兵衛、床屋吉田喜作(小笠原)有玄坊、上沼庄助(元安)木村の用人、駒泉卯平(吉田正)鷹野志麻太(前田)岩月當之助(眼童)相川半三郎、ペンキ屋の小僧(高田)坂主人、小手森喜六(進藤)町醫丸岡朴庵(豐之助)下僕久內、チンドン屋(山中)法上上人、下僕佐兵衛(吉田豐)東鄕又八郎、關白孝次(山口)主人(汐見)女中(田村)客(御橋)客の夫人(東山)田舍者(友田)

新聲劇

——角座——

四月一日初日
正午・五時半・二回開演

【演物】 德田純宏作「安政怪盜傳」五幕十四場

【配役】 中瀨の權次（辻野）お旦那久兵衞（新田）浪士岡田求馬（小波）新兵衞の子分又八（武澤）花見客宗太郎（鈴木）駕舁龍藏實は大盜大門の龍五郎（中田）嘉吉（名越）新兵衞の子分きいたか清次（山本）三ッ目の圓六（芝田）與力志村勘十（藤本）道中師桑田新兵衞、駕舁與兵衞（伊川）女白浪お仙（和歌浦）新兵衞の情婦おもと（澤井）茶店の娘おつる近所の女房お石（細川）半玉玉琴（井上）岡田求馬の妹歌代（浪花）お島の友達おわさ、お仙の配下お種（金剛）お島の友達おいね、網仙の女中おさと（富士岡）近所の女房おらん（吉野）或る老婆（中村）與兵衞の娘お島（富士野）

近代座

――樂天地――

三月三十一日初日
十二時・五時二回開演

【狂言】 第一山中峯太郎原作、柳橋住人脚色「上等兵志願」五景・第二瀨川春郎新作連鎖劇「切支丹お蝶」四幕九場

【配役】 切支丹お蝶（五月信子）桑島少尉、本間進之丞（原健作）長次郎、薛の庄太（大倉文雄）八重の父權造、お蝶の父竹内內記（玉川秀作）山中見習士官、青山新九郎（中村武夫）道化師小鐵（山田一郎）老婆およし、牒者源吉（滿喜國春）大山特務曹長、上總屋仁右衞門（朝香春彥）上等兵、福助の三吉（井田昌太郎）軍曹波田、眼曼寶、刑事松本定雄（戸田茂作）運轉手、助高屋助六、船頭長七（南條清之助）除隊兵の一等卒、太夫元場壺の重吉、老婆おりき（藤間市）雜誌記者、口上云の吉五郎（麻布伸）初年兵、若黨清造、通行の男（有馬光）弟子のお駒（村田靜子）町娘お咲、弟子お米（月橋喜久子）山中の妻藤枝、水茶屋の女お喜代（富士川滿惠）水茶屋の女お京（小松孝子）お蝶の兄竹內花之助（高橋義信）

人形淨瑠璃

――文樂座――

四月十日初日
午後三時開幕

前「繪本太功記」

本能寺の段

【太夫】 小田春永、森蘭丸、腰元志のぶ（和泉太夫、相生太夫、島太夫、つばめ太夫）森力丸（さの太夫）宗祇坊（鶴尾太夫、文太夫）阿能局（貴鳳太夫、鏡太夫）【三味線】歌助、八助、友平、綱右衞門【人形】 門造の小田春永・扇太郎の阿能の局・光之助の森蘭丸・文之助の腰元しのぶ・玉吉の三法師・文作の森力丸・市松の宗祇坊・軍兵大勢

尼ケ崎の段

【太夫】 中和泉太夫、相生太夫、島太夫、つばめ太夫 切切古靱太夫【三味線】 友造、芳之助、淺造、藤市 切清六【人形】 玉七の母さつき・文五郎の妻みさほ・紋十郎の嫁初菊・政龜の眞柴久吉・玉松の武智重次郎・榮三の武智光秀・文之助の加藤正清・大勢の軍兵

中「義經千本櫻」

壽し屋の段

【太夫】 切津太夫【三味線】 切友次郎【人形】 玉七の彌左衞門女房・文五郎の娘おさと・扇太郎の下男彌助・榮三のいがみの權太・政龜の親彌左衞門・紋太郎の若葉內侍・紋司の六代君・玉市の梶原平三景時・覺之助の女房小仙・玉昇の忰善太・大勢の取卷

千本櫻道行の段

【太夫】 靜御前(綴太夫)忠信(大隅太夫)町太夫、越名太夫、源路太夫、富太夫、駒尾太夫、隅榮太夫、照太夫、小松太夫、叶美太夫、駒司太夫、津廣太夫、文字榮太夫、佐久太夫、宮太夫、相壽太夫、おぼこ太夫隅壽太夫【三味線】 新左衞門、道八、猿糸團六、友之助、可、友若、猿太郎、喜代之助、新三郎、新吉、勝三郎、團伊三、市之助、廣二、道次郎【人形】 文五郎の靜御前・榮三の狐忠信

次「艶容女舞衣」

酒屋の段

【太夫】 切 土佐太夫【三味線】 吉兵衞【琴】 小庄【人形】 玉治郎の親宗岸・文五郎の嫁お園・瓢壽呂の半兵衞女房・門造の酒屋半兵衞・文二郎の娘おつう・玉市の酒屋半七・市松の美濃屋三勝

切「增補大江山」

戻り橋の段

【太夫】 若菜(朝太夫)渡邊綱(文字太夫)、郎黨石源太、綾太夫、辰太夫、千駒太夫、浪花太夫)郎黨左源太(長子太夫、陸路太夫、龜久太夫、播路太夫)【三味線】 仙糸、勝平、ツレ廣太郎、猿二郎、友衞門、寛市、清二郎、叶太郎、友作、友二、吉左【八雲】 團二郎、福太郎、友駒、清若、新之助、勝芳【人形】 玉松の渡邊源吾綱・紋十郎の扇打娘若菜實は惡鬼・文作の右源太・光之助の左源太

井上一派帝劇女優 大新派劇

——京都南座——

四月一日初日
午後三時開幕

第一、大島多慶夫作「夕だち」一幕

【梗概】 牢獄生活を了へて、妹千代香の家に厄介になつてゐるおせいは、弟恒次と深い仲の百合子のせつぱつまつた兩人を救ひ自分は永久の眠に入つた。

【配役】 父親伊八(小堀)姉おせい(初瀨浪子)妹千代香(村田嘉久子)弟恒次(清水)女給百合子(村田美彌子)千代香の旦那(伊志井)

第二、眞山青果作「首斬代千兩」二幕

【梗概】 司法鄕江藤新平等五參議は大久保利通に征韓論を破られ總辭職した。やがて江藤は佐賀士族と兵を擧げただが遂に捕縛され斬罪梟首の刑にされた。江藤は新法律を作りながら、已は舊法律に處せられたのである。

【配役】 江藤新平(井上)大久保利通(加藤)河野敏鎌 小堀 內務省屬官(藤井)解部の判事(喜多)岸良檢事(渡邊 杉本檢事(花和)香月經五郎(伊志井)山中一郎(清水)生田源八(山田)

第三、松居松翁作「結婚反對倶樂部」一幕

【梗概】 結婚反對倶樂部員は、權利とし義務として、男性を銅像視すべきに、各自婚約が調つたのを喜び、共同戰線を張つて抗爭せんとする。そうして總會に色々なものが提案された。

【配役】 會長(河村菊江)眞面目なる女(初瀨浪子)だらけたる女(村田嘉久子)はにかめる女(村田美彌子)氣の强い女(飯田蝶子)盛りを過ぎた女(藤間房子)夫を失へる女(東日出子)書記長(橘薫)女給(西條靜子)

第四、松居松翁作「吹雪の夜」一幕

【梗概】 逃亡中の李七は探偵王良の情によつて、病の娘を介抱することが出來る。李七は娘が奇蹟的に癒つたので逃れやうとするが、王良の親切を思ひ自ら縛されて行く。

【配役】李七（伊志井）その妻碧蓮（初瀬浪子）その娘雪娥（齊田照子）王良（井上）醫師劉高手（梅田）

第五、北村小松作、巖谷三一改訂「天國地獄」三幕十三場

【梗概】紡績會社の社長夫人と令孃とは工場を視察し、模範女工セッを社長秘書に取立てた。彼女の熱によつて、社長は女工待遇案を發表し工場には朗らかな歡聲があがつた。

【配役】社長（井上）重役（伊志井）重役（梅田）老事務員、重役（加藤）重役（喜多）工場長（小堀）セッ（村田嘉久子）女工（飯田蝶子）令孃（河村菊江）夫人（藤間房子）女工チヨ（東日出子）女工トキ（村田美爾子）女工トミ（西條靜子）女工アイ（橘薫）女工（花柳あけみ）運轉手高山（山田巳之助）技師山野三郎（本郷道夫）

花形大歌舞伎

——京都座——

四月一日初日
晝の部 正午開幕
夜の部 五時開幕

【晝之部】一番目「時鳥雲間月」三幕・中幕、片岡十二集の内、お俊傳兵衛「堀川」與次郎猿廻しの場・大喜利「吉野山」正行閑居の場・竹本連中、長唄連中

【夜之部】一番目「鎌倉三代記」絹川村閑居の場・二番目、高安月郊作「さくら時雨」二幕・大喜利「嫗山姥」兼冬館の場

【連名】我童、扇雀、ひとし、卯之助、我久之助、我久三郎、松壽、右若、右文次、右田三郎、霞仙、右團次

花形大歌舞伎

——神戸歌舞伎座——

四月一日初日
晝の部 正午開演
夜の部 五時半開演

【狂言】第一、志賀里の物狂、良辨杉の再會「二月堂」二幕・第二、食滿南北作並に脚色「西郷隆盛」二幕・第三「新版歌祭文」野崎村の場・第四、河竹默阿彌翁作「辨天娘男女白浪」濱松屋より勢揃ひまで

【連名】德三郎、延太郎、升藏、福太郎、延女、吉三郎、鴈之助、秀郎、扇、橋三郎他

家庭劇

——神戸松竹劇場——

四月一日初日
晝夜二回開演

【狂言】第一「野球狂時代」一場・第二「まづ健康」二場・第三「さくら時雨」二場・第四「人形箱」三場・第五「引越し茶話」一場

關西大歌舞伎

——中國・九州・地方巡業——

【狂言】一番目「伽羅先代萩」三幕・淨瑠璃、鶴屋南北新作、新曲「戀巴」竹本連中、長唄連中、常磐津連中・中幕、大西利夫作「破れ三味線」二場・二番目「助六」常磐津連中・大喜利「三人形」常磐津連中

【連名】福助、長三郎、政治郎、駒之助、九團次、市藏、魁車、成太郎、八百藏、芦鴈、魁童、升藏、延郎、市昇、美鴈、奥山、鴈正、大吉、延若

編輯後記

松本泰三

花の四月だといふのに、朔日から例の印刷所がよひを始めた。どうも春に背いて働くなんて……いやそんな愚痴はポケットにしまつて居いて、花は見ずとも誌上に花を咲かす事にした。これでせめてもの自己滿足、どうして、讀者諸彥にも樂んでもらへることだと信ずる。

×

道頓堀には歌舞伎がかゝらなかつた。鴈治郎は病氣靜養で休む、その他は神戸、京都、あるひは地方へ巡業に出てゐる。

中座は吉例によつて曾我廼家五郎劇が歸演して、笑ひの劇場は花より素晴しい人氣を攫攬してゐる。「かげぐち」は英國の小話からヒントを得たものだといふが、なか〳〵の新喜劇で、「黃金の雨」は金解禁の春に因んで上場したといふが、ステキなブル演劇である。

×

浪花座は第一劇場の居据りだが、これに新築地連が特別加入して「色氣ばかりは別ものだ」に出場してゐる。この舞臺は築地連ばかりの舞臺だ。幕が降りると觀客は猛烈な拍手を送る。感激した觀客はアンコールしてやまないといふ道頓堀では未曾有の絶讃と嚴肅な一シーンを見せてゐる。

角座は新聲劇が歸演してゐる。

近代座は連鎖劇が大當りに當つて四月も引續き出演連鎖劇「切支丹お蝶」を上場してこれまた連日滿員といふから、芝居の春も絢爛華麗だ。

×

遂ひに井上正夫が舞臺にたつて關西にも來てくれた。それに帝劇の女優も加入してゐる。是非京都の芝居も見たいものだ。

×

府の教育會をわづらはして、夕陽丘高女から「文樂座見學感想文集」を拜借した。これをセレクトして載せてある。「女學生は文樂をどう見るか」これも輕るい好奇心を誘ふものだ。

×

築地連の原稿を取纒めるために、淺利鶴男氏を、帝劇女優連のために園池公功氏をわづらはした。誌上から厚くお禮を述べる。

×

五月はどんな劇壇が道頓堀に出るか、それは判らない。然し五月號も諸君の期待を裏切らぬものを送り出すプランだけは出來てゐる。

昭和五年四月一日發行
雜誌月刊『道頓堀』第五年第四十三輯

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價 金參拾錢（郵稅壹錢五厘）

昭和五年三月廿八日印刷
昭和五年四月一日發行
大阪市南區久左衞門町八番地
松竹土地建物興業株式會社
編輯兼發行者 鳥江銕也
大阪市東成區猪飼野南之町一丁目
印刷者 松本米藏
大阪市東成區猪飼野南之町一丁目
印刷所 桃谷印刷株式會社
大阪市南區久左衞門町八番地
發行所 松竹土地建物興業株式會社
道頓堀編輯部
電南（一二四〇番）（六六六五番）

てゐる。この舞臺は築地連ばかりの舞臺だ。幕が降り出すプランだけは出來てゐる。

南一温泉料理

＝文樂座南一＝

宴會場百疊敷
洋食宴會場五百人樣
その他風雅な小間三十室

大阪四つ橋
宮河計之助
電話南（七七〇一一／五二九一一）番

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和五年四月一日發行（毎月一回一日發行）
「道頓堀」第五年第四十三輯四月號

道頓堀第五年四月號　第四十三輯

金參拾錢（郵稅一錢五厘）